

学匠詩人 オーギュスト・アンジュリエ

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林

(巻 / Volume)

54

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

220

(終了ページ / End Page)

89

(発行年 / Year)

2007-09

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021037>

学匠詩人 オーギュスト・アンジュリエ

宮 永 孝

- 一 日本における英文学研究法——過去と現在
- 二 日本におけるオーギュスト・アンジュリエ
- 三 島田謹二先生をおもう
- 四 オーギュスト・アンジュリエの人と業績
- 五 オーギュスト・アンジュリエ関連史料
(英文レジュメ)

一 日本における英文学研究法——過去と現在。

いまから四十年以上もまえの古い話である。当時、二十歳未満の若者であったわたしは、わりあい英語に興味があったから、大学では英語・英文学を専攻することにした。曲がりなりにも英文科を出ておれば、中学や高校の英語教師ぐらいにはなれるとおもったからである。

が、じっさい専修生となって授業を受けはじめてみると、どのクラスもつまらないし、やがて一、二の授業をのぞくと、ほとんど身が入らなくなった。年が若かったのと、学ぶ力や学ぶ意欲に欠けていたこと、何よりも生気のない、そもそも授業が多かったことによる。

英文学の老教授は、その道では大家かもしれないが、いったいに覇気や情熱、おもしろ味に欠けていて、教材を通してこちら側に伝わってくるものが何もなかった。どうにか単位をとり、おさなりの卒論を書き、いったん社会に出たのち、研究生として大学院にもどってきたが、“研究”とはどのようなものか、さっぱりわからなかったし、だれもその方法を教えてくれなかった。

日本人がおこなう外国文化・文学の研究は、学問として成立するかどうかは別問題として、英文学の研究を本格的にやろうとする場合、そこには学理とか方法論といったものが何かあるはずだった。しかし、外国の文化や文学をどう研究したらよいのか、その手引や教科書となるものはほとんど皆無であり、授業においても方法論めいた話を聞いた記憶はひとつもない。

いまおもうと、英文学専修の教授にも、これこそわたしの著書、論文である、と胸をはっていえる、世間がみとめる、専門性の高い業績はなく、めいめい定見なく、自己流にものを書き、自己流に講義していたような気がする。すなわち、めいめい無責任な印象批評をおこなっていたということである。かれらはじぶんでも研究方法がわからず、暗中模索の状態のなかにいたのではなからうか。だから学生にとって参考となる、またモデルとなるしかるべき研究をわれわれに示せなかった。

また学生にしても、教師のよしあしを判断するだけの力はなかった。われわれにとって、大学の先生というのは、えらい、雲のうえの人であった。だから教師の才質がどうかとか、愚物か才人かといったことはあまり頭の中になかったし、相手をただ無批判的に受け入れていた。

多くの教師は、人にこうせよ、と自信をもっていえるだけの識見はなく、巧みに学生をあざむいていたのかもしれない。

外国人の立場から、英米の文化や文学を学ぼうとするとき、どのような研究方法があるのか。またそれをおこなう最良の方法があるとしたら、それはいったいどのようなものなのか。

わたしは日本における外国文化、外国文学のうちでも、とくに英文学研究に焦点をあわせ、英文学研究の過去と現状とをきわめ、将来あるべき姿をかんがえてみたい。そのさいに参考となるのは、諸外国における英文学研究のあり方である。が、その一典型としてフランス人の英文学の研究法——とくにリール大学に英文学講座をひらいた学匠詩人・オーギュスト・アンジュリエ教授を取りあげ、その学問上の態度や学識（がくしん学者の心得）について語り、これからのわが国の英文学研究の指針のひとつとしたい。

*

勉強とはなにか。そして研究とはなにか。

勉強とは、ものごとにはげむこと、学問やしごとを精をだすことの意である。研究とは、ものごとを学問的に深く考えたり、真理をあきらかにする意である、と漢和や国語辞典にある。この二つのことばに共通しているのは、ものごとに「せいれい精励」することである。

が、いまわたしは、勉強と研究を区分し、つぎのように考えている。『勉強』とは、人が書きあらわしたものを読み、味得する行為である、と。そして『研究』とは、創造的なことであり、あるテーマについて究め、それを報告書のかたちで発表する行為である、と。

そして研究をはじめるにあたって重要な点は、問題意識であり、設問である。われわれはそれにたいして、しかるべき答を出さなくてはならない。研究報告が、まさにそれである。

西洋文学の日本移入の嚆矢は、ふつう『イソップのフツラス』（「イソップ物語」*Aisopus Fabulas*）とされている。これは文禄二年（一五九三）に天草の耶蘇会学林においてラテン語からわが国の俗語に訳し、ローマ字に綴って刊行されたもので、教訓書である。が、原本の出版年、場所、訳者名はあきらかでない。本書は、大英図書館に所蔵されている。

このようにわが国に英文学が移入される以前——キリシタン時代にすでに西洋文学が移入・紹介されていたのである。その後も「イソップ物語」は、何度も訳されたり、翻案の形で刊行されている。

- 『伊曾保物語』……三冊 訳者不詳 京都刊 慶長年間。これは寓話六十四を収めたもの。
- 『伊曾保物語』……三冊 訳者・発行所不詳 元和年間。
- 『戲言養気集』……二冊 編著者・発行所不詳 元和年間。これは「イソップ物語」を翻案したもの。
- 『伊曾保物語』……三冊 訳者・発行所不詳 寛永十六年（一六三九）。
- 『伊曾保物語』……三冊 訳者不詳 京都 伊藤三右衛門刊 万治二年（一六五九）。これは絵入り製版本であった。

ついで英文学とわが国との交渉は、日本の芝居との類似性によって推測される。文化七年（一八一〇）江戸の市村座で上演された「心謎解色絲」は、シェイクスピアの「ロミオとジュリエット」の翻案だといわれている。

幕末にイギリス文学の移植として注目すべき作品が二つ、翻訳紹介されている。イギリスの小説家ダニエル・デフォー（Daniel Defoe, 1659?～1731）の名著『ロビンソン漂流記』（*Robinson Crusoe*, 1710）のオランダ語訳“*HET LEVEN en de wonderbare GEVALLEN van ROBINSON CRUSOE*”, By de Jansons van Waesberge, MDCCXXXV [1735]『ロビンソン・クルーソーの生涯とふしぎな出来事』ヤンソーン・ファン・フ

BEKNOPTE
LEVENSGESCHIEDENIS
VAN
ROBINSON CRUSOE.



牙屋川寛摹

横山由清の略本『魯敏遊漂行紀略』。
〔国立国会図書館蔵〕

エスベルへ社、一七三五年刊ほどの意）を重訳したものである。

嘉永初年（一八四八）ごろ、江州膳所藩（現・滋賀県大津市）の蘭学者・黒田麴廬（一八二七〜九二、開成所教授をへて維新後、京都東本願寺訳文局で梵語の和訳に従事）は、「ロビンソン漂流記」（「漂流記事」）を訳了した。しかし、幕末に刊行せず、明治五年（一八七二）にその第一巻が「魯敏遜全傳」と題し、鐵線書屋から斎藤了庵訳としてかれの知らぬ間に上梓された。

もうひとつは、国学者・横山由清（一八二六〜七九）の私家本「魯敏遜漂流紀略」（原典はオランダ文、洋画家・川上冬崖（一八二七〜八一）の幕末にすでに黒田の「漂流記事」は筆写され、好事家のあいだで広く読まれていたことは、その写本が各地に現存することからも明らかである。いずれにせよ、十八世紀イギリス文学の代表作であるデフォアの『ロビンソン漂流記』が、原著者と作品名ともどもわが国に移植されたことは、本邦文化史上ひじょうに意義ぶかい。しかし、それはあくまで反訳であり、純然たる英文学研究ではなかったが……。

本邦における西洋学の開祖は、新井白石（一六五七〜一七二五、江戸中期の儒学者）である。かれは近世屈指の学者であり、進歩的な合理的思考のひとつであった。西洋学の端緒がひらけてから数百年になるが、江戸人の多くは「洋学」（蘭学）をやろうといった気がなく、まれにおれば「心得違いの奴」とか、「変人」「謀本人」「狂人」としてあつかわれ、ときには命をねらわれることもあった（加藤弘之「昔時洋学者の辛苦」『大日本論集』第二十二編所収、明治22・2）。

維新の大業になって、文明開化の世となると、日本の学術や技芸はどうあるべきかについて反省が芽ばえた。明治二十年代——文部省の専門学務局次長であった杉浦重剛（一八五五〜一九二四、明治・大正期の国粹主義的教育者）は、「日本人ハ如何ナル学問ヲナシタラハ宜カラント云フ」といった問題にたいして、「余ハ西洋ノ長ヲ採リテ 我ノ短ヲ補フト同時ニ 我ノ長ヲ長トシテ 我ノ短ヲ補フノ必要ヲ説ク者ナリ」と答え

ている（『日本学問ノ方針』『日本大家論集』第十五編所収、明治21・8）。

すなわち“採長補短”（欧米の長所を採り、わが国の短所を補う）と同時に、わが国の長所をもって、わが国の短所をおぎなおうといった考えである。

この考えは、日本人の外国文学研究にも当てはまるもので、日本人の短処（劣った点）を外国人のすぐれた考え、方法によって埋めあわせ、じぶんの“短”（欠点）を補完しようとするものである。

明治二十年代、ひろく国内においておこなわれた外国語は、英語であった。ついでドイツ語、フランス語、ロシア語、イタリア語がつづいた。

（『外国語学と外国文学』『早稲田文学』第二号所収、明治24・10）。同誌は、もし教場で“英文学”をおしえるところしたら、何をどのように教授したらよいか伝えている。

まずすぐれた詩眼をもって、シェイクスピア、ベーコン、アディソンの著作をよみ、その文章を吟味し、分析し、解釈し、批評すべきであるとあるいはエリザベス朝の文学全体を論じ、古今の文学とのちがいを説き、東西理想の異同を議論すべきである、と。また言外の意味をとらえるようにし、一字一句の解釈は重要ではない、と「英語と英文学」『早稲田文学』第一号所収、明治24・10）。

明治二十六年（一八九三）ごろ——学習院教授・村田祐治は、外国語の研究について講演し、そのなかで、日本の教育界・文学界における外国語の必要性を説き、「彼れの長を取て 我の短を補う」ためにも、外国語を利用せねばならぬといっている。

しかし、洋学は日本にはいつてからまだ日があさく、その発達はまだ不十分だという。その証拠に外国の高尚なる文学の研究がはじまったのは近年のことだといっている。それまでは、日本人はおもに理解しやすい学術上の書物や、理屈一方の論文のようなものばかりを一生懸命にひろい読みしていたという。また西洋文学の研究については、

「一口に申しますと 是れまで 重もに意義の解釈的研究に止まったもので 文学的研究をなすに至らなかつたもので御座います」と語っている（『外国語の研究に就て』『日本英学新誌』第三卷第三十七号所収、明治26・6）。

「ここである洋学とは、英学のことであろう。当時は英語の発達はまだ十分ではなく、多くの日本人は辞引を片手に字義を解釈するのが精一杯で

あり、とても英文学を鑑賞したり、研究するレベルに達していなかったということである。つまり高尚なる散文を読んでも、“一読了然”^{りようぜん}というわけにはゆかなかったということである。

文学の研究法には、整然たるやり方があるわけでもない。が、『早稲田文学』の記者は、大学院の某が“文学研究法”を修めたことを伝え聞いて、その大要を示教せられんことを乞うた。

——文学の研究法には、“解釈法”と“批評法”の二つがあるという。解釈法とはなにか。それはおもに文章の意味を解釈することである。さらに著者が使っていることば、句法（文章の組み立て方）、韻律などを明らかにすることである。

批評法には、初等批評法（本文批評法）^{テクニストリチズム}・高等批評法・審美批評法などがある。初等批評法においては、文章や言語のあやまり、錯乱を正すことを目的とする。高等批評法は、著者の特質を見やぶり、本質を洞察することである。審美的批評法は、くわしく説くことはできないが、詩文の価値はみなこの方法によってきまるといふ。著者はいかなる事柄を基礎として、その作品を著わしたかを見るものである（『文学研究法』『早稲田文学』第四十号所収、明治26・10）。

つぎに紹介する坪内逍遙（一八五九—一九三五、明治・大正期の劇作家、評論家）の「英文学の教授法につきて」（『日本英字新誌』第七十七号所収、明治28・7）と題する談話筆記は、英文学研究法に通じるものがある。

坪内によると、わが国でおこなわれている英文学の教授法について、あかずに思うことは、一、二にとどまらない、という。

いちばん寒心にたえないのは、第一に訓解（よみと意義）のほうがおもしろくないこと。第二に教師の側に文章の鑑識（めきき）が乏しいことである。教師はただ字句の解釈だけに促われ、文章の風致とか風調を味わう力がないことである。

坪内は、いわゆる直訳法をあらため、新訓読法をおこなうようにいつている。この英文学の教授法は、いふなれば、英文学鑑賞法に通じるものである。かつてわれわれ学生は、外国文をよむとき、一字一句、文字をおさえて読むようにいわれたが、坪内によると、訓話（字義を解く）流の“直訳的解釈”はだめということか。英文学を味わったり、研究するときは、さらに幾歩をも進め、原文の意を解するだけにとどまらず、原文がもつ風趣（おもむき）をも味わうようにせよというのであらう。

さらに原作者の精神がいわんとするところ、その文詞（文章のことは）の特異性、その風韻の妙（すぐれた点）、その作家の特性なども当然顧慮せねばならぬというのであろう。

『国民之友』（第三三三号、明治29・11）に、「我が国に於ける英文学」と題する小記事がでている。その骨子は、つぎのような内容である。

——わが国文学が外国文学に負うところが多いのはよいことである。支那の文学がわが文華の発達をうながしたように、外国文学の研究を等閑視（なほざり）してはならない。いまもっともわが国民のあいだでおこなわれている外国語といえは、もちろん英語である。文学のうえにおいても、イギリスの勢力は大きいし、英文学が勢いあるのを見て、文学界のためによろこぶものである。

ついで帝国大学の英文学について論じ、文科大学には英文科なるものがあり、ディクソン（一八五六―一九三三、スコットランド生まれ、明治十二年に来日）という者が主任教授として教えているが、まことにふるわず、英文科は英語学者を養成するところのように思われる、といっている。そしてディクソンの後任として来日したのは、ウッド（一八五五―一九二二、アメリカ人）であるが、「氏は近世文学の精緻なる（細まい点まで注意が行きとどいている）研究に心を傾けた」という。

ついで来日したラファディオ・ハーン（一八五〇―一九〇四、ギリシャ生まれのイギリスの文学者）は、達文士であると聞いており、このことは英文学のためにはたいへん結構である。同氏は新聞の通信員ということだが、西洋の新聞通信員のなかには篤学の士はいるが、それが大学の教師とはものたりぬ気がする、と語っている。

こんにちの英文学者は、読書家であるにせよ、達意の文章をかく人間であるにせよ、両者兼備のものはすくない、とのべている。

この記事の要旨は、外国文学の研究は、日本文学にとっても利があることだが、語学もでき、文学もわかる人間はすくないというのであろう。外国文学の研究は、その原語をもっておこなうのが常道であって、もしそれを邦語（翻訳本などを用いる）をもってやるとしたら、それは国文学の研究と大してかわらないのである。英文学の研究をはじめにしても、何よりも英語ができなくては話にならない。

外国語の習得における捷径（はやみち）は、まずふつう使用する単語をおぼえ、教材によってそのじっさいの活用を知り、文法や訳読や作文を習い、ついでむずかしい本を読む階梯（かいてい）をふまねばならぬから、なかなか辛気なしことである。ましてや英文学の研究方法も、区々として一定してないものである。

明治三十五年（一九〇二）、雑誌『芸世』の記者は坪内逍遙を訪ね、文学研究法について語ってもらった。「文学研究の心得」として同誌に掲載

されたものは、そのときの談話筆記である。

——坪内によると、『文学』とは、想像と感情とが主となつてきた思想を記録したものだという。文学を研究するにあたって、『予備的知識』がぜひとも必要だという。そのひとつは、世界文学史のだいたいの知識。たとえば、イギリスのスペンサーやシェイクスピアの作品を研究したいと思つたら、イギリス文学のおおよその潮流——それがどのように変遷してきたか——をあらかじめ調べておく必要があるという。

何か研究する段になると、ただむやみに引っかけまわすわけにはゆかぬから、何かひとつ代表作をえらばねばならぬ。

坪内は近松の代表作「心中天綱島」を取りあげ、その研究のやり方について語るのだが、国文学の研究法を英文学のそれに置きかえることは可能であろう。研究に先だつて、まず対象とする作品をよまねばならない。坪内は読むにしても、『順序』というものがある、という。すなわち、まずやるべきは表面的、形式上の読み方（研究）である。

一 訓詁註解（字句の解釈）。

二 衍字（文中に誤つて入った無用な文字）（びやうどく） 謬説（まちがつて読む）などを調べる。

三 当時の風俗や習慣などを他と比べ参考にする。

四 由来などを調べる。

ついでやるべきは、『内面的』すなわち『精神的の研究』である。

一 修辞上（ことば使い）の研究——文章のよしあしを論じる。

二 組織（脚色）の研究——仕組がよくできているとか、その場その場の手順のよしあしをいう。

三 人物の批判・解釈——篇中の人物は、いかにもじっさいの人物のようであるとか、作者はよく人情や人生をみているとか、

“恋”というものをどのように解釈していたかということ、を論じる。

四 同時代の他の作者との比較をおこなう。その時代の政治・風俗・宗教・文明などと比較して、その発達の由来をたずねる。

さいごに、研究者がもっている人生観、すなわち哲学上の意見によって判断せねばならない。かくして文学の研究の目的はおわる、という（『芸世』第三十三号所収、明治35・3）。

むかしの洋学者のなかには、洋学をはじめたとき、早年のものもいたが、三十や四十歳ぐらいのもの、中には晩学のものもいた。邦人で多国語

に通じている者は、むかしもいまも少数である。すこしずつたくさん外国語を識っておるよりも、英語だけでもあるていどしっかり読めるほうが学問上利益がある、という（文科大学教授・中島力造「専門学科と英語」『日本英学新誌』第八卷所収、明治29・12）。英語を通して、あるていどの学問はできるが、“読める”といっても、どのていど読めるのか、じっさい程度の差は大きいように思える。

ニワトリがえさをついばむように、字引で単語をひろって読んでいては、英文学の研究などできるわけではない。英語を読んで、感ずるようにならねば、喜怒哀楽がわかるようにならねば研究などできるはずはない、という。

西洋人のあいだには、中国学とか日本学といった学問分野があつて、中国なり日本を一つの研究対象とし、多角的に究めることがはじまっているが、イギリスには“イギリス学”といったものはない、という（有賀長雄「日本学及其研究法」『東亜之光』第四卷第八号所収、明治42・8）。わが国の英文学も、和洋の研究方法を合併して、あたらしい研究方法を樹立できないであらうか。

英文学を言語学や社会学の方面から迫ってみるのも一つの方法であらうし、作品をそれが生みだされた風土や気候、世態人情、風俗、習慣のなかで捉えてみなければ、わからぬことが多い。たしかな研究は、そうやすやすとはできない。

明治・大正期を代表する著名な英語学者・斎藤秀三郎（一八六六―一九二九、のち正則英語学校を創設）は、英語や英文学をまなぶうえでの感想をのべている。それを修めるには正道をあゆみ、たゆまず努力せねばならぬとしている。人となりやそして学ぶ過程で、世に処する道を示唆される機会がないと、その者の英語は平々凡々たるものであり、完成の域に到達できない。

英語をまなぶ者は、英語の魂をくらい、生きた英語をまなぶことにつねに心を配らねばならぬとしている。斎藤にとって、“語学”や“文学”は人間学であつた。それは人間の生き方をおしえてくれるものであつた。英語や英文学をまなぶことによって、処世術や妙想、示唆をうけることを究極の目的としたようだ。

「人間学即ち語学、文学を遣るには、どうしても正路を踏んでコツコツ勉強して居るうちに、*inspiration*を得なければならぬ」と（「英語研究談」『英語世界』第二号第七卷所収、大正2・2）。

斎藤が創った正則英語学校の教育方針は、「喜んで教へ、喜んで学ぶ」というものであつた。学ぶよろこびが感じられぬようであれば、その者

の学問は長つづきしないし、いつか放てきするにきまっている。

世の中には、ただ人の書をよみ、先人の糟糠^{そうこう}をなめ、古書から秘かに学説をぬき取り、涼しい顔をして、これが『研究』だと信じている者が多い。それは単に他人の学問の請け売りにすぎず、独創を目的とする『研究』ではないから、長つづきしないのがふつうである。

まことの研究は、つねに苦痛をとまなうものであるが、好心があれば、その苦をじゅうぶん耐えしのぶことができる。外国文学の研究は、おそれとはできないから、生みの苦しみを味わい、荊棘^{けいきよく}（いばら）を開き、辛苦しながら進まねばならぬ道である。

外国文学の研究は、原書からおこなうべきではあるが、日本人一般の語学力からいって、まだまだその域に達してはいないのではなからうか。日本人の語学の素養、その者の原語にたいする感受性、理解の精度からいって、原作をしっかりと的確にはあくできていないのではなからうか。

文学はもともと、読んでたのしむために創られたものであり、研究の対象ではなかった。が、文化全体の進歩にともない、外国文学も（……）文学といったふうに分化し、英文学、仏文学、独文学といったものが誕生した。その結果、われわれ日本人は不忠実な、あやしいインチキな研究をおこなうことをはじめて、年ひさしい。それは功名のためにではなく、多くは研究業績をあげるためであった。

本来、外国文学研究は、語学のしっかりとした、感受性に富んだ、天分ゆたかな、才気非凡なるものがおこなってこそ、たしかな成果をあげうるものである。

象牙の塔における英文学そのものを虚心にながめたとき、それはいうまでもなく教育と鑑賞と研究が中心である。そして一国の文学を究めるには、その国の言語をもいっしょに学ぶ必要がある。つまり文学をまなぶことと語学を学ぶことを同時にせねばならぬということである。

明治時代、日本人の英文学研究はどうあるべきか、方法論をふくめて正面から論じた記事とわたしはまだ出会っていないが、大正期に入ってようやくそれに言及したものはじめて見いだした。土居光知（一八八六―一九七九、明治から昭和期にかけての英文学者）が、東北帝国大学教授に内定したとき、同人を知る平田禿木^{とくぼく}（一八七三―一九四三、明治から昭和期にかけての英文学者）は土居を評して、「あの精力、あの頭脳、あの鑑賞をもってすれば、万代の後にも重きをなす大著述、大講義ができるであろう」とかたった（藤野文蔵「東北大学英文学講座及び教授」『英語青年』第五十一巻第一号所収、大正13・4）。

東京帝大英文学会は、大正七年（一九一八）十二月十五日の夜――大学の山上御殿において開催された。出席者は十九名。このとき土居は、「英文学研究における科学的態度と印象的態度」と題して講演をおこなった。

土居はこのとき、研究方法についての問題を提起しようとしただけで、断案を下そうとしたわけではなかった。講演のはじめ「予は英文学の範圍廣大にして、対岸に達し得ずして、溺死せんとするの恐れを抱くに至り、研究方法を考ふるの必要に迫られた」とかたった。ついでつぎのような内容の話をした。——英文学研究に、二つの大切な問題がある。研究の対称（象？——引用者）と研究の態度とである。これを考えるにあたって、われわれに教えてくれる所のは、日本における支那文学研究の歴史である。

奈良時代の支那文学研究は、外国文化を輸入して国家を益せんとする方便であった。平安時代は、遊戲的に詩文をもてあそぶとした。

まじめに支那文学を研究しようとしたのは、徳川時代の儒者である。かれらの研究は、純文学とかけ離れたものかも知れないが、普遍的人道を対称とし、研究の態度は自覺的となり、明治維新を生む原動力となり、支那にも誇りうる学者をだした。

明治以来、わが国における英文学の研究も、ほぼおなじ経路を取りつつあるようである。

明治の初年では、学者はわが国民を覚醒させるために英文学を輸入した。その後、わが国の思想はやや進み、英文学の方便的貢獻すくなくなるに及び、英文学そのものために英文学を研究するものが出てきた。

英文学を真に理解するのは、これからの事業である。英文学そのものために英文学を学ぶに三つの態度がある。

- 一 模倣的態度——英米人の英語を粉本とし、微妙な点にいたるまで模倣し、かれらと同じように話し、書くことを理想とすること。
- 二 科学的態度——文学作品の内容を分析し、類似の点から分類し、その作品によってまとめられた主義、環境、思想傾向、モデルなどについて叙述する。一名、比較文学的態度。普遍的法則を帰納的に求めんとするもの。客觀的模倣主義。
- 三 印象的態度——作品から受ける印象を重んずるもので、それを検査し、その特質をあきらかにする。享樂的（じゅうぶんに楽しむ）傾向は個人の印象ということになるから、人を指導することはできない。主觀的模倣主義。

英文学をこのように見れば、いままで溺れんとして泳いでいた暗い海が、じぶんの心のなかにあることがわかり、このような道から研究をはじめたい、と語っている（土居光知「英文学研究に於ける態度」『英語青年』第四十卷第七号所収、大正8・1）。

この土居の意見は、わからぬではないが、もうすこし具体的な説明を要しよう。

明治期以来の英文学研究法は、いまでもほとんど同じだが、作品の研究というよりその「鑑賞」が中心であり、じぶんの鑑賞力や批評力の不足を補うために、他人の説を借りてきて、やたらと注をつけ、博引傍証をおこなっていることである。

ともあれ、土居は東大でこの講演をおこなった翌大正九年（一九二〇）二月、『英文学研究 第二冊（大正八年）』（東京帝国大学英文学会発行）に「英文学研究の態度及び対象性」と題する論文（二二九頁〜一四九頁）を発表し、前回の講演を敷衍した。土居はかたっている。

——日本のように東海に孤立する国民にとって、書物を通じて、諸外国の思想にふれ、その生活を研究し、世界的教養をつむことが精神発達の主要な刺激である。無反省な外国崇拜、奴隸的な模倣は排すべきであるが、熱心に外国文化を研究することは、わが国にとって絶対に必要である。

外国文学研究の意義（価値）は、この点を中心にして考察しなければならない。

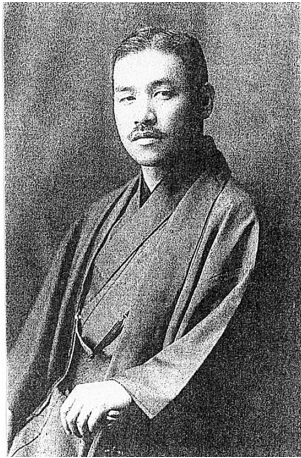
上田萬年（一八六七〜一九三七、明治から昭和期の言語学者）は、チェンバレンにまなび、ドイツに留学し、ヨーロッパの比較言語学、史的言語学をまなんだ人だが、将来の世界の言語の勢力をはやくも明治期に予測している。大正までは、フランス語や英語が国内学会や国際会議などで有力な言語であったが、これからは「英語がもっとも有力な言語であることは争はれない事実である」としている。

上田は明治二十三年（一八九〇）にドイツ留学を命じられ、三カ年ほどドイツに滞在し、ドイツ語をまなんだ。ドイツ語は、十九世紀に勃興したドイツ帝国の言語であり、第一次世界大戦前においては、世界において権威あることばであった。が、大戦後しぜんその権威はフランス語のほうに移行しつつあった。

ドイツの学術界は、ドイツ帝国が没落してから漸次衰退の一途をたどり、ドイツ語は第二のギリシャ語——死したる言語にひとしく——これからは新（現代？）ギリシャ語のような立場に立つものと思われる、とのべている（上田萬年「独逸語の未来」『太陽』大正13・4）。

この上田の予見は、みごとの中し、ドイツ語はこんなにち見るような悲観的状态に陥るのである。ドイツ語は世界の有力な言語の地位から一挙に凋落し、死語のようになるのだが、当時の日本におけるドイツ文学の研究にも、何んら創意をもった研究や独創はみられなかったようだ。この点では、英文学研究とおなじことがいえる。

大正時代になって、英文学研究は一大進歩をみるにいたり、研究ということに重きを置くようになり、テーマにも特殊問題が多くなったという。



上田敏

明治のおわりの十年間は、自然主義文学全盛の趨勢により、イギリス文学はみじめなほどとんじられた。その後もロシア小説、フランス象徴詩などの勢力に圧倒された。のちに人道主義が樹立され、その風潮にうごかされ、理想主義的な英文学があらたに研究され、愛読されるようになった。

市河三喜（一八八六～一九七〇、明治から昭和期にかけての英語学者）は、大正元年（一九一二）欧米に留学し、同五年（一九一六）に帰国すると、東大において講座をもち、英語の科学的な研究を唱導した結果、英語学の研究がさかんになり、それが英文学の研究に資するところが少くなかった。やがて市河と岡倉由三郎（一八六八～一九三六、明治から昭和期の英語学者）が主幹となり、「研究社英文学叢書」（大正十年創刊）の刊行がはじまり、英文学を熟読玩味する風風が醸成された。

ついで東北、九州、朝鮮の三帝国大学に英文科が新設され、英文学の“専門化”と“研究”をうながした。

大正時代には、日本を代表する英文学者が三名、相ついで亡くなった。上田敏（一八七四～一九一六）、夏目漱石（一八六七～一九一六）、厨川白村（一八八〇～一九二三）らである。上田は語学（英独仏伊や古典語）に堪能であったばかりか、国語の運用力にもすぐれ、美辞を弄することに非凡な才能を発揮した。

かれは広くヨーロッパ文学を紹介したり、訳詩を発表し、『文学論集』（明治33）、訳文集『みをつくし』（明治34）、『詩聖ダンテ』（明治34）、訳詩集『海潮音』（明治38）等により、文名を確立した。

詩人・北原白秋（一八八五～一九四二）は、上田敏のことを「わたしの魂の母」といい、その述作や訳詩からふかい薫染（感化）をうけたと語っている。白秋は生前に何度か、敬愛してやまぬ上田と会っている。上田は上品で、洗練された趣味と人格のひとつであったらしく、三十代のころ、すでにその風貌には、大家らしい沈静と重厚さが感じられたという。

上田は亡くなる一年前の秋——麻布の白秋宅をおとずれた。そのとき上田は、しょうやかな印象派風の背広を着、指にはエメラルドの指環を二つもさしていた（北原白秋「上田敏先生と私」『太陽』第二十四巻所収、大正7・6）。細心精緻の学風を唱えた上田は、惜しいことに、本格的な英文学の述作をのこさず、この世を去った。

夏目は「文学論」や「文学評論」などにより、また厨川は『近代文学十講』などによって名をなしたが、両人は英文学の普及に尽した。

これら三名は逝ったが、まだ英文学者としては、坪内逍遙、平田秃木、岡倉由三郎、土井晚翠、野口米次郎などがいるし、小日向定次郎、石川林四郎、松浦一、金子健二、舟橋雄、田部重治、野上豊一郎、土居光知、豊田実、沢村寅二郎、竹友虎雄、山宮允、石田憲次、日夏耿之助、矢野禾積、勝田孝興、山本與吉、長沢英一郎、松浦嘉一、杉田未来など、大正の十五年間にかなりの英文学者が輩出している（舟生平蔵「大正年間に於ける英文学の研究」『英文学研究』第七卷第一号所収、昭和2・1）。

明治維新後、海外からさまざまな新しい学問が入ってきて、その新知識がわが国の文化を裨益したのであるが、西洋史なども、従来の国史や東洋史とはちがった新しい学問であった。しかしながら、それはヨーロッパの事例を基礎にした学問であったため、日本人はそこに叙述されている以上の知見を学界に提供することはできなかった。

わが国の西洋史家にできることといえば、西洋史の名著や新著を翻訳、解説したり、ときにそういった著述を種本として、“焼直しの研究”を発表することであった。ヨーロッパの史書の大半は、文書館、博物館、大学図書館などが保管している古文書（古写本、古記録）私記、書簡などを材料とした、独自の研究である。つまり“原史料”に依拠してなした独創性に富んだ研究であったといえる。

日本史研究のばあい、ふつう国内の古文書や、古老の談話などを素材としておこなうため、独自の知見や新しい解釈をくわえることができる。西洋史や英文学にしても、本来その研究や判断の基礎となる材料は、“原史料”であるべきはずであり、諸家が著した書物の断片的な記事をひろい集め、つぎはぎ的にまとめること足るものではない。

根本史料によって考証した独創的な意見が出しえない以上、西洋史専攻者に“比較研究”を勧めたのは、広島文理科大学教授・新見吉治であった。新見は、日本の西洋史研究者が、国史・東洋史の知識をもとに、西洋史に新解釈をくわえ、世界史を編みなおす意気込みで研究に従事し、“比較研究”をおこなえば、出色の成果をみることはできないか、という（新見吉治「西洋史研究の使命」『史学研究』第一巻第一号所収、昭和4・10）。

それをおこなうには、基礎学力——国史や東洋史について、しっかりとした、深い知識がなくてはならない。西洋史家は、国史や東洋史の修史（歴史の編者）におわらず、読史（史書をよむ人）なる必要がある。わが国の英文学研究者も、ただ単に英米作家の各種の版本や研究書ばかりを漁（あさ）る読史に陥ることなく、日本人の独自の見方が生き生きと現われているようなイギリス文化史、イギリス文学史を著わすためにも、ときに修

史になる必要がある。

自国の歴史と世界史との連関を究めるやり方も一つの歴史学の研究方法であろう。英文学にしても、本国の専門家に對抗しうるだけの研究が生みだせないとしたら、新たに攻究法を案出するしかない。その際に役立つのは、こんにち“比較文学”と呼ばれている、わりあい新しい学問分野である。

わが国では“比較”の文字から判じて、それを何ら史的関連のない、文学作品の比較作業と理解する者が多いが、比較文学は、二国文学の史的関連、国際的関係などを究める学問である。英文学の研究において、日本人は乏しい語学力、鑑賞力、批評力からいって本国の専門家とは勝負にならないが、比較文学的方法を用いれば、取りあつかう材料も自国のものであるから、独自の観点から、独自の見方がおのずと生まれ、独創が発揮できるのである。

竹友藻風（一八九一―一九五四、大正から昭和期の詩人、英文学者）は、昭和初期に日本人は英文学をどのように理解したらよいかについて小論を発表した。それはある意味では、日本人の英文学研究の基礎条件のひとつを示したものといえる。竹友の命題（題目）は、日本人に英文学はわかるか、ということであった。

英文学を学ぼうとするには、その言語（英語）を識らなくてはならぬし、文学の背景にある“文化”や“伝統”をも知識として知っておく必要があるという。すなわち――英語そのものに加えて、風俗・文学・科学・社会・政治やすべての文化現象を知らねばならぬという。

英語をまなぶには、日本語をわすれ、英語で考える。イギリス人になりきって考えることが必要だといっている、が、それははじめから無理な注文である。このことは口でいったものの、本人もわかっていて、日本人が英語に加えて、イギリスの文化と伝統――日本人とイギリス人との間に共通に存在する“背景”を広くすれば、英文学の理解もまた広くなる、といっている（竹友藻風「日本人の立場より」『英語青年』第六十五巻第二号所収、昭和6・4）。

大正時代の官立大学の英文科における卒業論文のテーマは、古典的なものが多かったようだ。それもわれわれの生活から、かけ離れたもの、非現実的かつ非現代的なものが多数を占めていたが、徐々に現代作家を取りあげる者も出てきた。問題は、論文を書く側の学生のテーマの“取りあつかい方”である。

矢野峰人（本名・禾積、一八九三―一九八八、大正から昭和期の詩人、英文学者）の「卒業論文」『英語青年』第六十六巻第八号所収、昭和

7・1)によると、筆者が独創的見地から、縦横に批評したものというより、いかに多くの参考書を明示したものが多いという。つまり博引傍証を旨とするもの、そうでなかったら訓詁註疏(本文のくわしい説明)に重きをおいた文献学的なものを尊ぶ傾向があったという。

すなわち、特自の見地などまったくみられぬ、ただ勉強量(?)を示したり、参考書を仰々しく挙げた、はったりを利かせたものが横行していたということであろう。

一面において、無責任な印象批評を排した訓詁流の取りくみ方も研究方法として必要であることに論をまたない。矢野によると、文学専攻の学者がもっとも力を入れてなさねばならぬことは、文学にたいする“見方”を基礎づけることだという。そして“読書力”を涵養し、文学理論の研究をおこなう必要があるといっている。

一方、教授の責任はおもい。教授は“講読”において、古典を新しく読むことに苦心し、“文学の味い方”や“批評の方法”などを学生に教えねばならぬからである。

市河三喜の随想「所感」(『英文学研究』第十三巻所収、昭和8・2)は、過去一、二年における日本の英語英文学界の業績と今後のその発表のあり方についてのべたものである。一言でいえば、業績のほうは“目覚ましいもの”があったという。

ただし注文がないではない。英語英文学の研究者は、英米の国と国民の研究者であってほしいという。——英米両国の歴史、政治、経済、宗教、教育、国民性ばかりか、この二つの国を“全体として研究”ほしいという。そしてイギリスの日本学者バジル・ホール・チェンバレン(一八五〇―一九三五)が著した *Things Japanese* やジョージ・ベイリー・サンソン卿(一八八三―一九六五、イギリスの外交官、日本研究家)が執筆した『日本文化史』に相当するような、イギリスについての書物が、日本人の手で書かれねばならぬという。

文科系の人間——ことに歴史や文学などを研究している者にとって、“史(資料)”(文献や文書)は生命である。専門的にやるには、まずそれを蒐集することからはじめねばならない。ところが研究の材料となる資料は、往々にして一カ所にあつまっていないのである。大学図書館にしても、われわれが必要とする各種の参考文献や資料を豊富にもっているということはまずない。

資料あつめは、あてのない犯人さがしの旅のようなもので、現地に行ってみなければ手がかりは得られないし、その搜索には時と金がかかることが多い。研究テーマを設定しても、関係資料がじゅうぶんに集まらぬために、“資料難の門前で足ぶみ⁴”を余儀なくされたり、あげくの果てに研究そのものを放てきせざるをえなくなるばあいもある。

文献資料の裏づけなく、世間には作品からうける印象だけをたよりとして、感想文めいたものを書き、それを研究論文として発表して、すずしい顔をしている者がいるが、そんなものは何の価値もない駄文であり、学問でもなんでもなし。研究は文献資料を用いながら、一つのテーマを論証する作業であるから、作者にはするどい眼力と思考力、証明能力がもとめられる。前提もしくは仮説から論をすすめて結論にいたるプロセスは、数学の証明となんらかわるところはない。研究のよしあし、その研究の権威といったものは、第一級の文献資料の裏づけがあってこそ成立するものであろう。

資料あつめは、研究の補助手段であり、目的でない。それはあくまで研究の予備作業である。資料は真正な、役にたつものでなくてはならず、偽もの⁽⁵⁾であってはならない。かりに一定ていどの資料があつたとき、つぎの段階は、それをどう料理し、どう使うかということであらう。できあがった論文のよしあしは、資料の質とその取りあつかい方によって決まるといっても過言ではない。

資料に関連しておもうことは、大学は「研究のできる大学」と「研究のできない大学」に、はっきり二分されるようにおもう。研究のできる大学とは、その研究所なり図書館が収蔵している資料を用いて研究することが可能などころである。参考図書や稀覯本や文書（かきつけ）などを豊富にもっている大学は、私見によれば、「研究型大学」である。そのような大学は、国内に十指とばかりではないはずである。国立大学では、五、六校、私立大学ではせいぜい二、三校であらう。研究型大学でないばあい、それは単に「教育型大学」であり、学問的に寄与するところはすくなく、生産性はいっさいに低い。

昭和十年代——英文学研究法や英文学研究のあり方について、学会誌や専門誌はいくつか試論を掲げた。たとえば『英文学研究』（第十七巻第一号、昭和12・1）は、当時台北帝国大学文政学部講師であった島田謹二の「英文学研究法に関する一考察——仏蘭西派英文学に就て」といった論文をかかげ、ついで『英語青年』（第七十八巻第八号、昭和13・1）は、「英学者の態度」（市河三喜）、「英文学研究の態度」（斎藤勇）、「わが国に於ける英文学研究」（島田謹二）を、さらに同誌第七十九巻第十号は「英文学研究方法考」（島田謹二）を矢つぎばやに掲載した。

これまで見てきたように、日本人の英文学研究はどうあるべきかについて、何人かの先達の意見を紹介してきたが、確固とした方針にもとづく徹底した方法論は、あまりみられなかった。が、おなじ外国人の立場から、英文学をみつめ、数々のすぐれた業績を生みだしているフランス人の英文学研究に注目し、その研究の精神と方法とを紹介した島田謹二の解説は、ひじょうに適切であり、刺激剤になりうるものである。

フランス人の英文学研究は、いったいに「個人研究」が中心であり、かれらは往々にしてじつに大部なものを書く。フランス人は大作家主義者

である。書物の大きさは、かならずしも内容がよいことや充実をしめすものでないにしても、日本人が書くものはるかに見おとりのする小冊が多い。フランス人の研究態度は、徹底して文献資料に目を通し、その生涯と作品を精査し、作者の心理の底まで行き、感受性・想像力・人生感を働かせて“心理解剖”をおこなうやり方であり、原作の“芸術的意味”に到達しようとする。

このような方法によって成った業績は、エミール・ルグイの名著『若き日のワーズワース』やオーギュスト・アンジュリエの大著『ロバート・バーンズ研究』（上下の二冊本）である。フランス人の“批評研究の方法”は、どこから生まれたものか。その淵源をたどると、英文をフランス語に訳すことによって、おもむろに原作の世界に入って行き、「作品の文芸的意味やその特性を分解叙述」する。そして研究者の心が原作と“結合”するところから生じる“新しい意味”を問わんとした（島田）。

要するに研究者の主目的は——作品の意義と価値を明らかにし、それを批判することであった。

島田の解説文は、それまで闇路^{やみじ}のなかで方法がわからないまま、うろちょろしていたわが国の英文学研究者に一条の光を投げかけたことはたしかだが、その後フランス人の方法を踏襲して、すぐれた業績をあげた日本人のことは聞かない。

島田論文は、日本の英文学界に一石を投じたことはたしかであろうが、市河三喜や斎藤勇の小論になると、問題を回避しているような印象をあたえる。両人は、ほとんど参考になるような意見をのべていない。市川は「英学者の態度」の中で、「かういう題で何か書くやうにとの御注文であるが、英学者の態度といっても、それがどうあるべきであるか、といふやうな事を論ずるよりも、実際の吾々の態度或は自分自身の過去及び現在の態度を自省的に顧みつ、書いて見た方が適切では無いかと考へる」と、詭弁を弄している。

また斎藤は「英文学研究の態度」において、『只この一筋につながる』^{ただ}「いやしくも志を立てたからには、時を得ても得なくても、我々は英文学の研究に全力を集注して、その方面から人生の真理をつかまへたい。それは、代々の碩学が身を以て示してゐる態度である」とのべているだけであり、ほとんど説得力はない。

しかし、島田謹二の「わが国に於ける英文学研究」だけは、わが国の英文学研究者が求め、欲している点に幾分か解答をあたえてくれるものである。島田は、わが国で英文学を味読考究することがはじまった明治二十年代あたりからの英文学研究の小史について語り、ついで日本の英文学研究の進むべき路についてのべている。

約言すれば、日本人がモデルとする英文学研究の先蹤国は、フランスではないかということ。英米本国の学者の“所説の請け売り”におわるこ

となく、日本人として“独自の見方”をあくまで掘りさげ、独自の分野を拓かねばならぬこと。日本文学と英文学との交渉関連を究める、いわゆる比較文学も一つの方法であるという。

おなじ著者の「英文学研究方法考」では、具体的方法にふれ、ルネサンス以降の大物作家を取りあげ、フランス人がよくやる“個人研究”——“個人作家”の研究から取りかゝるよう勧めている。日本における英文学研究の方法には二つあり、ひとつは日本文学と英文学との関係を究める“比較文学研究”、もうひとつは、日本人の立場から、英文学そのものと四つに組んで考究するやり方である。

前者の比較文学的方法は、英米人も容易に手染めることができない、日本人のひとり舞台である。後者の正攻法はある意味でいちばんむずかしいやり方である。が、日本人の国民的特性をしめすことによって、英文学作品の一面を明らかにするものである。

日本における外国文学研究のうちでも、ドイツ文学について簡単にふれてみたい。明治・大正・昭和とわが国におけるドイツ文学の研究は、長足の進歩をとげ、紹介・鑑賞の域から研究の段階にいたり、英文学畑にみられるような各種の大作があらわれるようになった。たとえば、ニイベルンゲンの歌、ドイツ思潮史や文学史、ゲーテやシラーといったようなスケールの大きな研究がおこなわれ、大部な書となって市中に出まわるようになった。

が、茅野蕭々（二八八三—一九四六、明治から昭和期にかけてのドイツ文学者）によると、概観的にいって日本でおこなわれているドイツ文学の研究法には、なにか著しい“新味”も“特殊な創見”をも発見することができないという。そして研究者が、諸家の説を引用して、そのよしあしを批判する場合も、単なる“主観的感情”だけを標準としない周到な用意が増加したという。

これは主観的断案をくだすことを排して、諸家に語らせる客観的叙述がふえたということであろう。

また観察叙述の方法、思想探求の視点をみても、研究者そのひとの創意はみられないという。そこで今後の反省として、日本におけるドイツ文学研究のあり方について語るのだが、茅野が力説揚言（よつげん）しているのは、こういうことである。——日本のドイツ文学研究者は、自国文学（国文学）にたいする知識と関心をふかめること。すでにドイツにおいておこなわれている“比較文学的方法”（放出体の立場からみた、文学的成功や影響をきわめる。受容体の立場からみた、材源の問題などをきわめる）を実践する。そうすれば、ドイツ本国の人間が見いだすことができなかったものを、われわれ日本人の研究によって、新たな知見として加えることができる。

いっばんに外国文学を研究するのは、ひろく世界文学の理念（イデア）に到達するためであるから、そのさい自国の文学をつねに念頭におくことは矛盾を

きたさなという（茅野蕭々「最近我国に於ける獨逸文学研究の概観」『日独文化』第三卷第三号所収、昭和17・10）。

太平洋戦争ちゅう、外国文学の輸入が途だえ、洋書が入らなくなった。そして英語は、中等学校において敵性語ということで教えられなくなったり、授業時間を削減されたり、また同志社大学や関西大学のように、英文科を廃止するところもあらわれ、英語・英文学の地位はたちまち失墜した。しかし、江田島の海軍兵学校では、終戦時まで英語をおしえた。

戦争中、外国文学を職業としていた者は、あくびをしていたかというところ、そうでもないらしい。それぞれ勉強していたということである。ある者は翻訳したり、いままで読まなかった古典や洋書をよみ直したりした（福原麟太郎「外国文学について」『新潮』所収、昭和18・4）。

太平洋戦争は、開戦当初、緒戦においてこそ勝利をおさめたが、ミッドウェー海戦からじり貧となり、やがて無条件降伏受諾へと追いこまれ、敗戦をむかえた。戦後わが国は民主主義国として再出発した。

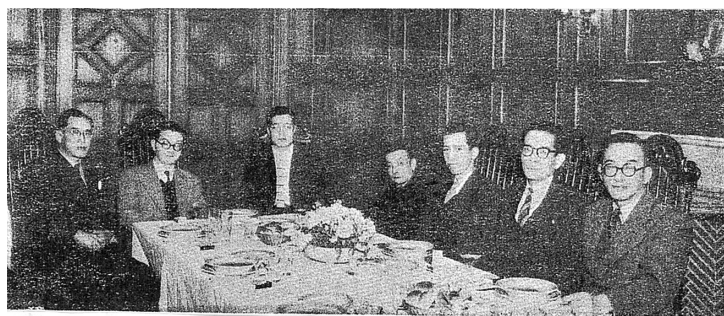
戦後しばらく、偏狭な（せまい）日本主義が漂っていた。戦後逸早くあらわれたのは、西洋文学をなりわいとする者にたいする注文である。吉川幸次郎（一九〇四〜八〇、昭和期の中国文学者）は、「芻議（いやさしい者の意見）一篇」（雑誌『人間』所収、昭和21・5）のなかで、日本人の西洋文学研究は、日本的な趣味の浸潤（しんじゆん）（しみこみ）をうけている結果、対象が“日本的に歪曲されて理解されてはいないか”といった疑問を提起した。

すなわち、西洋文学というものが、他の西洋の事象との関係、ギリシャ・ラテンの古典、キリスト教などに顧慮されることなく、孤立的に研究されていないかということである。

敗戦とともに英米文学の古典的作品の翻訳出版が企てられ、またアメリカ文学の翻訳や研究がさかんになるとともに、昭和初期にみられたような“純学究的態度”⁽⁶⁾が復活しはじめた。

昭和二十九年（一九五四）十月、雑誌『芸林間歩』は、「鷗外と柳村に捧げる記念号」と題して、特集号を刊行した。この中で矢野峰人は先師・上田敏について一文を草している。「上田敏先生のこと」（四三頁〜五十頁）がそれである。上田は大正五年（一九一六）の四月以来、ひどく健康を害し、休講がちであった。矢野は半年ほど上田の講筵に列することができ、シェイクスピアの「ソネット」、シェリダンの『恋がたき』などを教わり、読書会ではボードレールの『悪の華』（上田は“妖華”と訳した）などを読んでもらった。

上田の講義は、ノートをみながら、ゆっくり、筆記できるように語る、といったやり方ではなく、むしろ“談話風”であり、平々淡々と洗練さ



(写真：向って右より 加納秀夫・小川和夫・大沢実・吉田健一・高村勝治・富原芳彰・小酒井研究社社長)。『英語青年』第百巻6号、昭和29・6より。

れたことばと調^{しらべ}をもつて語ったという。

上田が講義において目ざしたことは、学生に「刺戟をあたえ、好奇心をおこさせること」であった。そして文学研究者が陥らぬようにせねばならぬ点は、多読・濫読の弊^{へい}(風)、註釈者になりやすいこと、文献学と文学とを混同すること(訓話・考証に陥りやすいこと)であった。

上田が文学研究者の取るべき最上の方法とかがえたのは、つぎのような点であった。

一 概観をつくること。二 古典をよむこと。三 外国文学の研究。四 比較研究の方法を用いる。五 人文地理、文学地理学の研究。六 神話の研究。七 文学の形式——詩形、リズムの研究。八 傑作を重要な文学運動にむすびつけてみる——等であった。

上田は「受け売りの学問」を排斥し、ヨーロッパ人の後塵を拝することをいさぎよしとはしなかった。それでは学問や研究をどうやれといったのか。講義のなかで、「学問には長安^{ちやうあん}(西安市の古名)の大道はない。我流でやれ。文学史にかいてある、わかりきったことでも、自分で発見すれば、じぶんの発明である。独学者にはとにかく僻見^{きけん}(片よった見方)が多いが、型にはまったものより、その方がましである」と語った。

そして一作家の作品の個性を感得するにはどうしたらよいのか。その答は、「洞察の力をもって天才にふれる。直観^{ちくかん}するより、ほかに道はない」というものであった。

明治・大正時代のわが国の英文学研究は、紹介的・解説的であったが、昭和に入ってそのやり方も学究的になってきた。戦後、各大学において英文学の教育と研究が学問としてさかんにおこなわれるようになると、その研究のあり方にたいして反省が芽ばえてきた。

『英語青年』(第百巻第六号、昭和29・6)は、「座談会 英文学をめぐる」を掲載した。この座談会は、昭和二十九年(一九五四)三月二十三日の夕刻「アンバサダー・ホテル」で開催された。

出席者は——加納秀夫、小川和夫、大沢実、高村勝治、吉田健一らであり、富原芳彰が司会をつとめた。

このときの主要なテーマは、「日本における英米文学研究の可能性」といったものであった。ひじょうに学問的な英文学の研究が、はたしてこの日本で可能かどうかということであった。以下、各発言者

のことを摘記すると、つぎのようになる。

富原 日本にいては、英米の学者のやっておるようなことは、どうも出来そうもないような気がしてきた。その大きな理由としては、ひじょうに単純な理由ですが、まず資料がそろわない。(中略)

ぼくは要するに、はじめからイギリス人の学者と純粋に学問的な場において競争しようということは考えてもいないわけです。(中略)

英文学をやる以上は、英語を正確に読まなくてはしょうがない。しかし、そこだけにいつまでもいたんじゃ英文学といってもつまらない。語学力が基礎であるということは認めますよ。だけれども、そこにのみ^{きよくせき}踞踏(抜き足であるく)することは、やはりちょっと文学としての英文学を見失なうことになって惜しい。(中略)

今日の結論になると思いますが、^{スカラーシップ}学問ということにおいて成功するには、やはり^{クリティシズム}批評の精神がなければいけない。(中略)

小川 日本人が英文学をよむと手数がかる。一生かかっても沢山よめないかもしれない。最後にものをいうのは感受性で、ふつうのイギリス人がキーツを読んだときと、どちらが感ずるかというところ、向うの感受性が鈍い^{にぶ}のより、日本の鋭いほうがよくわかるだろう、そういう点では、文学は引け目を感じない。(中略)

受け売りの習慣がつくと、受け売りがふしぎじゃないし、いちばんいけないのは^{クリティシズム}批評であるかのごとく装って、それが全部むこうでいっているとか何とか……。(中略)

高村 学者としての立場に立つか、批評家として感受性で作品そのものにぶつかって行くかということですね。(中略)

たとえば、ポーをやろうとすれば、日本で手に入るのはむこうで本の形になっているものでしょう。しかし、たとえばポーの編集した雑誌などというものは手に入らない。むこうにいるより手がない。むこうにいれば、日本人でもやり得るだろうと思う。こっちへ帰って来たら、資料的にとても追っつかない。(中略)

むこうにいて一番それを感じました。図書館に行けば雑誌がそろっている。ぼくのいた所などでは、ポーの編集したのがずっとある。ポーが埋草に書いたものまで見られる。そういうことを本格的に研究するんだったらかなわらない。(中略)

資料だけでは、文学の本質がつかめないという。それからもちろん社会的な方法とか、そういうことに叛逆している。どうもさっきから考えているが、資料をあつめてやって行く方法は悪くはないが、何もむこうのものと対等になって喧嘩する必要はないかも知れないが、ただ行詰りがある。(中略)

ただ作品そのものと取り組むほうが、日本の状態としてやってゆけば、何とか結果が出てくるのじゃないですか。(中略)

大学における英文学の先生の立場とすれば、文学史の事実を教えるということより、批評眼をつくるということに重点を置いて行くのが必要じゃない



矢野禾積教授

かと思う。(中略)

大学の図書館をよく設備すればいいですね。日本のような貧乏国は、せめて大学の図書館ぐらい自由に交流ができるといいんですがね。(中略)

いままでの文学研究は、印象主義的であったのじゃないですか。文学はけっきょく個人ではじまり、個人でおわることは事実ですが、しかし自分の受けた印象を客観的にコンファームしたくなるでしょう。それがとくに学者の立場にたてば、科学的なものを求めるのじゃないですか。とくに作品のデータとか伝記的な研究の場合には。(中略)

吉田 とくに資料の研究ではかなわない。本でも出された本^マだけで、いくら買ってもそこまで追っつかない。とくにどこかで何か発見されたというような場合……。 (中略)

池田潔さんが書いたのを読んだが、むこうの大学だと、先生のいったことを書くところである。ぼくは先生のいった通り書いたことがなかったから(笑声) ……。

加納 先程から話に出たような、資料がそろわないということは痛切です。(中略)

新制大学がたくさんできて、各大学が紀要とか論集を出す、あいつは紙くずをつくるだけだ、その点はあると思う。だけれども、読んでみると、若い人に一つ二ついいのがある。(中略)

大沢 大学の卒業論文は、書きたいものに書かせるようにしたらどうかと思うのです。卒業論文亡国論が出てくると思う。(中略)

31・11) このような座談会がおこなわれて数年後、矢野峰人は「研究の国内版と海外版」と題する小論を『英語青年』(第百二卷第十一号所収、昭和

それはまたじぶんの研究の欠陥と価値をすなおに告白したもので、その勇気と謙虚さは大いにたたえられてよい。矢野によると、最近関係している大学の雑誌(紀要?)に、なにか研究を載せる必要が生じ、旧稿(特殊講義のノート)をひっぱり出してきて、その整理をはじめたという。そして英文のレジュメをつけて投稿の段になった。

しかし、論文の要旨をどうかくべきかを考えるに及んで行詰った。じぶんの論文のいかなる点が「新研究」であり、海外の研究者に主張するものがあるかどうか考えたとき、何も新しいものがないことを知り、その講義草稿を閉じてしまった。

この論文を発表することによって、世界の学界に何か寄与するところがあるかと、反省してみると、何もないことを認めざるをえなかった。その講義案は、大小の文献をよみ、じぶんにとって重要とおもわれた箇所を抜粋し、まとまった形にしたものにすぎなかった。すなわち、既知の資料をただ再整理したものであり、作者の創見は皆無であったからである。結局、比較文学の資料を紹介することにしたという。

矢野はこのとき改めて研究の「学術的価値」について考えてみた。もしじぶんの研究が、長い歳月をかけ博搜精査したものであったとしても、「斯学（英文学）」にたいして、何んら新たに付加するところのないものであるならば、それはついに海外版たるの資料なきものといわざるをえない」とおもった。

矢野が考える「研究」の定義は、こうであった。研究とは、資料を蒐集調査することである。閲読した文献が多いほど、それは「学問的」である。とくに「珍奇」「稀覯」「斬新」な文献を利用したものは、学的価値が高い、と。

他人のやったしごとや研究にたよって、「研究」をおこなおうとする——いわゆる「他力本願型」の人間は、たえず古書や新刊書を追いもとめ右往左往し、その読破に忙殺され、他人の意見にひっぱりまわされ、いつしか「自分」を見失ってしまう。

そのような人間は、じぶんが読み抜いた書物の「抜書」をつくり、その冊数が多いほど学問的価値が高いとおもっており、目にふれたあらゆる文献、ときに見たこともない文献をあたかも見たように語示羅列している。

資料の調査は、研究の基礎作業とはなりえても、文学の研究そのものではないのである。このような欧米依存主義は、いまなお残存している。矢野によると、研究というものは、他からの「引用」ではなく、独自の批判にもとづいてなされた「原作からの引用」なのである。

わたしは生前の矢野峰人のけいがいに何度か接した。あの明せきな、歯切れのよい語りくち、そしてえらぶらず、高ぶらない、恭謙な人がらをいまもいとおこす。

矢野がじぶんの研究は、日本国内しか通用しない「国内版」であって、「海外版」（外国に通用する研究）と標榜するに足らず、と、へりくだったとき、そのことばの客観性に異をはさんだのは石田憲次（一八九〇～一九七九、大正から昭和期の英文学者）であった（『世界に生きる道』『英語青年』第百三卷第一号所収、昭和32・1）。

石田は海外にも通用する研究ができない第一の原因は、文献資料の不足にありと思った。資料がじゅうぶんにないと、トコトンまで研究を推めることができず、よい加減で打ち切らざるをえないのである。

『海外版』を出すことは、たしかに重要なことではあるが、日本語を用いて同胞を相手にしたりつばなものを書くのが、しぜんの順序ではないかと思った。もしその国内版がほんとうに国際的水準を抜くものであれば、外国人もほっておかないはずである。名前は知られるし、翻訳の話もおこるはずである。

世界の学界がみとめる業績とは、ふつう「知識の現状に何ものかを寄与する」ことであるが、そんな大それた野心をもたず、ましてや国内で有名になろうといったけちな根性をもたず、裸になって「いのちの通ったもの」を書きえたらそれでよしとせねばならぬのである。

要は背伸することをやめ、じぶん以上のもの、じぶん以外のものを表現しなければよい、というのである。

昭和四十年代、わたしは院生であったが、各大学の研究論文の発表は、いまよりも盛況であつたろうか。広島大学教授・小川二郎（一九〇四～一九八一）は、「英文学に対する私の態度」〔『英語研究』第五十五卷第十二号所収、昭和41・12〕において、英文学界の反省、英文学研究のあり方について、示唆に富んだ発言をおこなっている。小川によると、研究論文の発表が大はやりであるが、それは必ずしも学運の隆盛を裏がきするものではないという。

文学作品をたんねんに味読しないでは、独創性のある論文は書けない。研究テーマの選び方により、（研究）方法もいろいろあるだろうが、個性のない、おもしろくない論文がどしどし公刊されている（中略）

参考書にたよりきりでは、一人前になれない。現物（原典）に当って歯がたたないうちは、論文など書くべきでない。どれに当っても歯がたたないのなら、学者になろうなどとは考えないのがよい（中略）。

英文学を勉強するには、どうしたらよいかということであるが、文学がわからなくても英文学者にはなれるらしいが、やはりわかる方がいいにきまっている。文学はたのしいものだ。それなのにたのしさを覚えられぬようでは、何を苦しんで文学など研究する義務があるろう（中略）。

実感（生き生きと感ずること）の伴わぬ論文は、書かないことにしている。『研究者の不在』の論文は、砂をかむより味気ない。

日本の大学で英文学がおしえられて百二十年ちかく経つのに、わが国の研究者のあいだに、公認され確立された「英文学研究法」は存在せず、ただやみくもにそれがおこなわれているだけである。それがいつまで経ってもうち立てられないとしたら、いまも根本問題が何らの形で揺曳しているのであらう。

明治維新以来、わが国の文化は、外国のすぐれた文化を輸入し、かつ模倣することからはじまり、やがて独自のものを創りあげるに至った。外国文学も渡来物であるが、英米の文学を味わい、研究する萌芽は、明治二十年前後にさかのぼる。外国の文学を味読したり、研究したりするには、語学の素養が必須である、というのが諸家の一致した言である。しかし、語学はあくまで研究するうえでの一つの「方便」⁽⁸⁾にすぎず、目的ではないのである。

外国文学を研究するには、まず語学に通じることが先決問題であるが、能力は人によってまちまちであるから、なかなか一様にはゆかない。語学力がないとたしかな研究はとうていできない。また文学研究の補助科目として、外国の風俗や人情や習慣をいうにおよばず、美術や絵画、彫刻、建築、音楽などの知識が必要になってくる。また歴史、言語学、美学、心理学、社会学ばかりか、諸般の科学をもまなぶ必要がある。英文学といっても、詩歌・小説・戯曲・随筆・評論などがあるが、いずれも作者がじぶんの想像力をはたらかせて創作したいわば虚構の世界を芸術化したものである。

装備としての語学力についていえば、わたしの世代が英語のイロハをはじめて習いはじめた昭和三十年代の英語の教授法といえば、文法と訳読が中心だった。英単語を一つずつ、文法の項目も一つずつおぼえ、やがてやさしい文章からむずかし文章の訳読をおそわるのが一般的であった。英作文は教科書に出てくる練習問題を反訳するていどであり、英会話に至ってはまったく皆無であった。

いまおもうと、まったく変則的な教え方であった。そういった教授法で、英語そのものの力はいったかと尋ねられると、否定的にならざるをえない。語学力は、学校において訓練によって身につけるのが、いちばんよい方法であるが、教師の力や資質にもいろいろあるから、一概にいえない。わたしにとって、英語は比較的すきな科目であったが、とくに語学の才があったわけではなく、そこそこできたていどである。

日本語はまったく英語と語脈を異にしているから、おなじ欧文脈のフランス人やドイツ人などが英語を学ぶ以上に、日本人は不利な立場に立たされている。何年まなんでも英語を習得できないし、大方の人間はかじり語学のレベルのままで一生をおえる。実感としてよくわかる、といった段階に達することはないし、辞引がないと、何もできない。そんな語学力で英文学を研究しようというのは無謀であり、じっさい現物に当たってまったく歯が立たないのがふつうである。そんな貧しい力で、なにを好き好んで論文をかくのか、といった疑問が生じる。が、何か書きたいといっ

たはげしい衝動やおもいがあるからである。わたしのように日本国内の劣悪な教育環境のなかで英語をまなんだふつうの人間が、文学作品をよむときどうするかといえば、まず単語の訳語を頭のなかからひっぱり出してきて、原文の語に当てはめてゆく。もしその訳語が的中し、意が通じたときはよいが、まったく意味が通じないときは辞引をひく。こうして一字一句ひろい読みしてゆくのであるが、その解釈や読み方、原文からうける印象は、英語を母語としている者と、大きなずれがあるかもしれない。

研究を志す以上、当然原作は早く正確によむことを要求されるが、その力を身につけることは、日本国内で生まれ、大きくなってからふつうの英語教育をうけた日本人には無理な話である。原作の世界にはつねに濃霧が立ちこめていて、おぼつかない足取りで一步一步のろろと進まねばならない。ときどきつまづくし、穴の中に落ち込むこともある。……

わが国の英文学研究者は、じつに長いあいだ、研究の手引や教科書、拠るべき物差しをもたず、くらやみの中を手さぐり状態ですすみ、じぶん独自のやり方で研究をつづけてきた。それは言い換えると、無為無能の作戦によるでたらめな闘いであった。いま日本人がなんらかのテーマについて研究をおこなうとしたら、どのような方法がありうるか、いくつか卑見をのべてみたい。その方法は、単に英文学だけに適合するものではなく、ヨーロッパの文学ぜんたいにも当てはまるものである。

外国文学について研究論文をかくということ、あるいは書かねばならぬということは、何らかの必然性があつてのことであろう。が、研究活動というものはじつに孤独な作業であり、それをとことん愛しぬく、はげしい情熱がないと、ながつづきしない。

さて英文学を具体的にどう研究するのが最良の方法なのか。それに答えることは容易ではない。各テーマによってその攻究法も変わってくるからである。英文学の研究法には、大別して二つあろうか。そのうちの一つは、研究対象とする作品（散文、韻文）からうける自分の印象を基礎とし、それを精査し、その特質（性）をあきらかにする——いわゆる主観的な“批評研究”である。それをおこなうためには、可能なかぎり文献資料を博搜し、研究者じしんの意見を添えなくてはならない。

それはいうなればことばによって表現された芸術作品の分析もしくは解剖である。作品の特質といってもいろいろあるが、作者の想像の所産を視覚的、直観的にとらえなくてはならず、するどい言語感覚と鋭敏な感受性が要求されることはいうまでもない。

その研究には、小話的な小論、人と芸術のすべてを考究した本格的な研究——換言すれば、徹底した“個人作家の研究”がある。

もう一つの研究法は、英文学と日本文学との連関を究めるやり方。いわゆる“比較文学的研究”である。ことば、趣味、思想、文化を異にする

日本人が、文学作品の受容と波動——相互にみられる特性や類似現象や影響などを科学的に研究する態度である。日本的な材料の取りあつかいや日本人としての見方からいっても、比較文学は、独創の發揮できる分野である。旅順の二〇三高地をたよりない兵力で、まっ正面から突貫攻撃するより、たしかな成果の期待できる攻略法である。

要はじぶんの性^{しやう}にあったやり方で研究を進めるしかないのである。定評ある良書を数多くよみ抜いて、よいところを学びとるしかないのである。そしてそこから個々が研究法を会得するしかないのである。しかし、“研究”を誇称する以上、それが意義や価値をもつものでなくてはならず、説得力のない、またひとの共感をうることのない、独善的な研究であってはならぬであらう。

好きな作家とその作品を好きなように愛し、好きなように読み味わい、本質的な何かを原作のなからつかみとることができれば、研究の目的は一応達成したといえる。“印象研究”や“比較文学的研究”は、やる気と努力しだけで、凡庸な人間にもできる攻究法である。

しかし、外国にゆかねばできない研究もある。それは伝記事実の調査とか原作の異文、本文校訂である。この種の分野で、ゆらいすぐれた成果をあげたのは、本国の研究者であった。当面、われわれ日本人は、“研究の国内版”を出すことに努め、余力と研究内容に自信があれば、“海外版”を出すことにはげめばよいであらう。

こんにち研究の“^{グローバル化}世界化”が叫べられ、日本人も海外の学会に出かける機会もふえた。が、研究の成果を英文で発表して国際的な高い評価をうけたといった話を聞くことはほとんどない。また海外の大学に留学して学位を取る者の数はこんなに多いのに、その研究成果が書物となって刊行されたという話も聞こえてこない。日本人の英文学研究の社会的評価は、けっして高くない証左であらうか。

いまは昔とちがって外国に行くことは容易であるから、原地におもむき、秘庫や図書館、文書館を漁り、未知の文献資料をさがすことも可能である。できれば本国の研究者とおなじ位置にならび、かれらとおなじ土俵で勝負してみたい。それはできない相談ではないが、そこまでやる日本人はひじょうにすくない。

要は、日本人の英文学研究は、日本的であってよいことである。まじめな研究を“我流”でやればよいのである。研究対象の妙味や本質にふれるには、洞察力と直観力をじゅうぶん働かせるしか道はなく、会心の作が生れたとき、じぶんの解釈や印象をなるべく欧文にまとめ、どしどし発表し、国際的に進出することが望まれる。

*

人がふつう論文を発表するということは、何か新しい発見があるからであろう。世間周知の事実を活字にすることはありえないし、それを印刷に付すことはまったく無意味なことであるからである。

何んのために、われわれは外国文学を研究するのか。きっとそこに目的を意識した衝動があるからであろう。文学研究というものは、抽象的または科学的方法によって、何かについて真理を知るための行為であり、それは骨をおって作ったものでなくてはならない。英文学研究についていえば、イギリス人が芸術的に昇華させた文学作品を味わい、理解することによって、われわれ日本人は、その真意に迫ろうとする。われわれは独自の観点から、独自の感性をもって問題点を論じようとする。

これまで人があまり気づかなかった点に、人の注目をあつめようとする。かくして研究テーマが定まり、それを独自の監識と主観的批判により論評しようとする。研究をおこなうには、研究対象にはれ込む必要があり、義理でいやいややるといいうわけにはゆかぬ。無我夢中になれることがいちばん重要な要件である。

英文学がわが国に伝わってゆうに一世紀以上になり、この間に先進学者により、何度も研究方法について反省や建設的な提言がなされたが、いずれも打ちあげ花火におわり、先導的な研究の見本は、いまだに生まれていない。世界の学界に打って出ることもなければ、またそれだけの実力や業績をもった学者も育っていない。日本人の英文学研究は、まさに「井の中の蛙大海を知らず」であり、この小さな島国の中で、ちまちまとやっているにすぎない。

日本人は、まともな研究をやる能力に欠けているのか、それともっと根本的な欠陥があるのか、わたしにはよくわからない。わが国の多くの研究者がやっている英文学研究は、どちらかといえば趣味的なものであり、けっして本国の研究者と拮抗^{きっこう}しうる本格的なものではない。日本人の中には、外国のことを何か調べたり、読んだり、書いたりしておれば偉い気になり、いっばしの学者を気どる者もいるが、かれらはじぶんのやっていることの意義と価値についてまったく自覚がないのである。

そういったえせ学者の研究の多くは、本国の研究者や批評家の口を借りたものであり、あたりさわりのない発言をおこなない、あたりさわりのない結論を出している。じぶんの意見をはっきりと述べる自信と勇気がないからである。自己の鑑賞にもとずく、ひとりよがりの、独善的、主観的

批評ならまだしもよいが、西洋人の口まねをした、ひとを瞞着させるものが多いようだ。

日本人の英文学研究のあり方について参考となるのは、近隣の国々、東南アジアの国々でおこなわれている方法であるが、この方面の情報はすくなく、現状についてはよくわからないし、世界に通用する顕著な業績をあげているといったニュースも入ってこない。おそらく、日本人がやっているのと同小異であろう。

一方、ヨーロッパに目をむけると、ゆらいドイツは英語学、フランスは英文学畑で、本国をしのぐほどの研究成果をあげた。ゆえにフランスの英文学研究は、われわれ日本人になにか研究の手法や方向に指針をしめしてくれるかもしれない。フランスの英文学者がたどった道程は、何かを示唆してくれるかもしれない。なぜなら、フランス人にとっての英文学は、われわれ日本人にとってと同様、外国文学であり、研究の出発点はおなじだからである。

ガリア人の末裔であるフランス人は、俗ラテン語から派生したロマンス語（フランス語）を用いている。フランス人は、極言すれば、イギリス人と異文同種の民族である。フランス人は、われわれ日本人がまったく言語系統や語形を異にする英語をまなぶさいに困難をおぼえるのと同じがって、英語の字母二十六と、その組み合わせからなる単語、さらに基礎的英語を修めれば、比較的みじかい期間内に、一定でいどの英語をものにする。

ところが、日本語は英語とは似ても似つかぬ言語であるから、われわれはそれを学ぶとき、たいへん苦勞を強いられる。その困苦たるや、フランス人が英語を学ぶときの比ではない。フランス語は、文の構造や語形変化をべつにすれば、語いなど英語と似たものが多く、英語との類似性が顕著である。

日本人がヨーロッパの言語を修得できない主な理由のひとつは、発想法が異なるからであろう。ヨーロッパ人は、民族が異っても、その体内には似たような血が流れており、思想や感受性に共通するものがあるはずである。フランス人は、幼ない時分から横文字に見なれているから、英語を見ても違和感をかんじない。

一方、ひらがなとカタカナ、漢字の組み合わせによって構成されている日本語を母語とするわれわれ日本人は、横文字と対峙したとき、はじめから違和感をもつ。かくしてわれわれは英語学習の出発点から、不利な立場に置かれている。英語ひとつとっても、われわれはフランス人に先んじられている。われわれの頭の中にあるのは——脈絡のないこまぎれの単語であり、あるいは短い文章である。英語を読むときは、そのこまぎれ

の単語の訳語をひっぱり出してきて、一つずつ原文の単語に当てはめていき、一語一句、判じ物を解釈するようにして、読んでゆく。

このようなおそまつな英語力では、とても学問的に英文学の研究など、真っ正面からできるわけがない。原作の真意にとってもふれえないし、まやかしの批評しかできない。結論的にいえば、われわれの日本人は、フランス人と同じように研究はできないということである。日本人の英語力、にぶい感性、ひくい言語能力や、鑑賞力や批評力からいって、英文学の研究など歯が立たない。

西洋人の物の見方や表現法が、ときに日本人の感性や思考性に何もうったえないことがあるし、原作全体から受けるイメージがヨーロッパ人と異なることもあるかもしれない。われわれはとても欧米の研究者と勝負にならないから、当面かれらが見落したものの、気づかなかった点の発見に努めるしかない。その間隙をうめることができれば、一応その研究は成功したものといえる。

非力な日本人学徒にできることは、作者の字句の選び方やことばの配置に細心の注意を払い、かつ作者の感情なり考え方に注意をむけるようにし、作品ぜんたいを情緒的（ふんいき的）にとらえ、その印象をじぶんのことばで綴ればよいのではなからうか。要は西洋の学者の口まねをして、むずかしい理屈をならべたてるのではなく、じぶんが感じたところのもの、じぶんの鑑賞を伝えればよいのではなからうか。そのために、恩師島田謹二は、「原文をよくよめ」と強い調子でいったことをおもいだす。

*

英文学者の卵をそだてる大学院の制度と教育についても一考せねばならない。国立私立を問わず、大学院の英文学教育は、教育と研究の実をあげていない。不断に研究をおこなっている教師はすくなく、また研究のやり方を知っている者もすくない。半可通の教師が、知識の乏しい学生にえらそうに講義しているだけであり、講義の中心は、テキストをよんで訳しているだけである。原作のふかい味わいに迫るような評釈や解説がほとんどないのがふつうである。

そして英文学研究法についての話や、修士論文や博士論文作成の指導もない。指導教授にしても、じっさい研究らしい研究をやっていないから人さまに差し出がましい指導などできないのである。

東京の田んぼの中にある、ある私立学校の文学部英文科のばあい、たしかに明治以来有為の人材を多数世に送りだしてきたが、これといった学者はあまり育っていない。だいたい伝統的に学生をきびしく鍛えぬく風土がなく、閉鎖的で世間知らずのこの学校には、情、気（なまけ心）のよう

なものが横いつしている。この学校を出て、情実によってそのまま英文科の教員におさまった者は、他流試合をしたことはないし、実力のほどをためされたこともない。

かれらはただぬるま湯につかり、先輩教師の顔色をうかがい、かれらにへいへいしてきただけである。およそ勉強らしい勉強をせず、研究らしい研究をせず、顕著な業績をあげず、いったい何をしているのかわからない。教師三流といわれる所以である。さみしい業績で、おく面もなく、えらそうに授業をやっているだけである。もし大学院の教師であれば、学生の範^は（てほん）となるために、営々として学び、精魂を込めたしごとをし、大著の一つでもあらわさねばならぬのに、そんな大きな著述をなせば同僚に不安をあたえ、かれらを意気消沈させるだけである。

わたしの友人は、英文専攻のひじょうにすぐれた院生であったが、修士論文の口頭試問のとき、質^{たち}の悪い、知ったか振りの教授（業績は、数冊の翻訳と若干の論文しかない）に、さんざんしぼられたあげく、わるい評価をつけられ、博士課程への道を閉ざされた。これは最悪のケースである。いまかれは豊橋の古利の住職をやるかたわら、私大のフランス語の講師をつとめている。

国立大学と私立大学の院生をくらべたばあい、国立のほうが一般的学力がやや高いかもしれないが、業績面ではそれほど大きな差はないはずである。なぜなら、年齢や学校に関係なく、まれにみる筆力をもつ才人が、私学にもいるからである。

田んぼの中の学校のばあい、同輩はとくに目立った研究をしていないから、じぶんも何もしない。惰眠をむさぼるのが一般的風潮として定着しており、世間がみとめる顕著な業績をあげることなく、七十歳までだらだらと働き、名誉教授の称号をみやげに学校を去ってゆく。

まともな研究者が育たない理由がこれである。院生はさんざんなまけ、学業をなおざりにする懶惰^{ろんだ}な空気になれているから、楽をして学校を出ることを考える。大学院の科目は、他大学なみに、むずかしい文字が麗々しくならんでいる。それは名ばかりで、中味は大して実体がない。

そして博士課程にいたっては、有名無実であり、課程博士はおろか論文博士も出さない。じぶんたちが学位をもっていないから——いや顕著な業績がないから——たまに博士請求論文が出て、なんのこうのと難癖をつけて出さないのである。またそのような論文をもって来られると、たいへんめいわくなのである。

一般学生は、英文科の実体を知らず、末をたのしみに、毎年大学院に入ってくる。名ばかりの実質のない英文科であることを知らずに……。のちにかれらは幻滅と悲哀を味わうことになることも知らずに……。この種のインチキ大学院が、いまや時代おくれであることを知らず、また実体を知らずに大学院に入ってくる学生はあわれである。

この学校の英文科の教員は、人をあざむき、じぶんでもよくわからぬ外国語をふりまわしているだけといえる。この学校の最大の利点は、日本有数の図書館をもっていることだけである。

二 日本におけるオーギュスト・アンジュリエ

二十代のわたしは、よくわからないままに、語学の勉強をかねて、ヨーロッパ文学の英訳本をじつにたくさん読んだ。が、いまところ原作の風景がおもいだせても、細部となるともう記憶にはない。いまおもえば、よんだというより、横文字を目で追っていたにすぎない。英文学の主要作品は、ほとんど読んでいないし、また古典にせよ、現代物にせよ、身を入れてよんだことはなかった。いったいに学校の授業は、どれもおもしろくなく、また興味を覚えなかったから、わたしの学生生活は、ただすきな本をよんでおわたただけである。

三十ちかくになり、たまたま季刊誌『比較文学研究 15』（東大比較文学会、昭和44・4）を手にとったとき目にふれた島田謹二の「オーギュスト・アンジュリエの業績——『フランス派英文学研究』の一章」（二段組、九三頁〜一八三頁、これは『台北帝国大学 文政学部文学科研究年報 第三輯』『昭和12・4』に発表した「仏蘭西派英文学の研究——オーギュスト・アンジュリエの業績」五頁〜一〇二頁を増補改訂したもの）に心をうばわれ、ひといきに読んだ。それはフランスの英文学者が、スコットランドの田園詩人ロバート・バーンズの人と芸術について著わした論著を解説したものである。フランスの学者が得意とする「個人作家」の抱括的な研究の生成の秘密や英文学の教師としての箴諫^{しんかん}について解説したものであった。島田の簡潔な文体。晦渋なところがすこしもない文章。息がかよい、生彩に富んだ叙述。文章から情景がはっきりと浮かんでくる、力強い描写力。

息のながい、しかも何度も行きつもどりつしなければ前に進めぬ、おもしろ味に欠けた文章を読まされてきたわたしには、島田論文は目がさめるような述作であり、われを忘れてよんだ。そこには一篇の小説をよむようなたのしさがあり、読みおえても、知的興奮がいつまでもさめやまなかった。島田の入魂の一作である。

わたしは島田のもと受講生でもあったから、その口吻と人となりを思いおこしながら、その長編論文を味読することができた。ああ、どうしたらこんな絵画的な文章が書けるのか。どうしたらこんな研究ができるのか。いったいどういった文献資料を使えばこのような作品が書けるのか。ぜひその製作の秘密を知りたいと思った。しかし、論文のなかには、参考書目はほとんど挙げられておらず、手がかりを得ることはむずかしかつ

た。

あれから数十年の歳月がたった。その間にとまどきこの論文を何度か再読し、むかしとおなじような感興をもよおした。あれは数年前の初夏のころか。ときどき早稲田大学中央図書館の帰りに立ち寄る古書肆「早稲田進省堂」の主人に、たまたまオーギュスト・アンジュリエの『ロバート・バーンズ研究』の有無をきいたら、「あります」といった思いがけない返事が返ってきたのでおどろいた。主人はほこりにまみれた書棚のいちばん高いところから、淡い空色の大部の二冊本をとりだすと、それをわたしに示した。

わたしは数十年のあいだ渴望して止まなかった『幻の書』を手でふれることができたので感慨無量であった。すぐそれをもとめると、満ちたりた気持で家路についた。その後、アンジュリエの著作のすべてを蒐集することに取りかかった。神田の古書店を通じ、世界中に探索の綱をはってもらった。やがて搜索の返事がひとつずつやってきた。やっぱりフランスは文献がいちばん多く、ついでイギリスから意外なものが見つかった。アンジュリエのとくに絶版となっている珍しい論著や詩集などのほかに、名刺や書簡などが見つかった。わたしは、金に糸目をつけないですべて注文し、購入した。

つぎなるわたしの最大の関心は、そのアンジュリエそのひとの生涯の足跡をたどることであった。そのため一夏ひとなつをかけて、イギリスはロンドン郊外のグリニッジ、北仏はフランドルの地——ダンケルク、ブローニュ・シュール・メール、ドゥーエー、リールのほか、エタープル、ベルク・シュール・メール、パリ、ルーアンその他を訪ね歩いた。その間、各地の文書館、図書館で珍しい資料を偶目でき、予想外の収穫をうることができた。つぎに記すアンジュリエの記述に、読者が何か新鮮味を覚えるとしたら、それはひとえにそのときの取材の成果のおかげである。

*

“フランドルのペトラルカ”の異名をもつ、学匠詩人アンジュリエは、わが国ではほとんどその名が知られていない。アンジュリエの名前が活字となって日本の文献にあらわれたのがいつのことか、判然としない。ただだれも日本におけるアンジュリエについて、書誌的な研究をおこなっていないからである。

わたしの乏しい知見では、島田謹二は当時台北高等学校の講師であった昭和二年（一九二七）の夏、内地に帰ったとき京都帝国大学助教授・石田憲次宅を訪れた。そのとき石田よりフランス語で書かれた英文学の研究書についての話を聞き、その談話筆記を島田は「仏蘭西人の英文学研

究」と題し、石田の名で雑誌『書物の趣味』（昭和2・11）に発表するのだが、その中に、¹⁴“Auguste Angellier の Robert Burns”と出づる。これこそアンジュリエの名前の初出ではないかとおもわれる。

ついでアンジュリエの名が紙面に現れたのは、中村為治の『バーンズ』（研究社英米文学叢書 32、研究社、昭和9・5）である。巻尾のバーンズ文献のなかに、¹⁵Angellier, A.: *Étude sur la vie et les oeuvres de Robert Burns*. Paris, 1892とある。

そのつぎにこのフランス人のことが出てくるのは、雑誌『愛書 第二輯』（昭和9・8）である。この中に、市河十九の「学匠の歌——アンジュリエの詩書」といった小論（六五頁〜七四頁）が載っている。市河十九は、島田謹二のペンネームである。

執筆者が東北帝国大学の二年生のとき、土居光知教授が英文学史を講じて十八世紀末に入ったとき、ロバート・バーンズに至った。そのとき「バーンズの歌謡を楽譜と仏訳とを併せ録したプリントを配って話を進められた」という。そのプリントに記されていた仏訳者の名がAuguste Angellierであったという。

島田はアンジュリエの名を脳裡にきざんだまま学窓を巣立つのだが、そのひとがどういった人物であるか明らかにしえたのは、その後何年かたち、フランスの英文学者の著作を組織的によむようになってからのことであった。

邦人が学匠詩人アンジュリエの名と学問的業績（『バーンズ研究』と処女詩集『別れた女人に』^{ラミューベルデュ}）について語ったのは、島田がはじめである。このあとアンジュリエの名が出てくるのは、つぎの諸文献である。

- (一) 島田謹二「英文学研究法に関する一考察——仏蘭西派英文学に就て」『英文学研究』第十七卷 第一卷所収、昭和12・2
- (二) 島田謹二「仏蘭西派英文学の研究——オーギュスト・アンジュリエの業績」(台北帝国大学文政学部『文学研究年報 第三輯』所収、昭和12・4)
- (三) 阪田勝三訳『バーンズ詩選』（新月社、昭和24・3）
- (四) 矢野峰人著『文学史の研究』（松柏社、昭和33・11）
- (五) 島田謹二「オーギュスト・アンジュリエの『ロバート・バーンズ研究』」大和資雄編『詩人バーンズ』所収、松柏社、昭和36・3）
- 島田謹二「私の英語・英文学修業」(『白山英文学』第七号所収、昭和36・11）
- (六) 島田謹二「オーギュスト・アンジュリエの業績——『フランス派英文学研究』の一章」(『比較文学研究 15』所収、昭和44・4）



島田謹二教授

- (七) 島田謹二「フランス派英文学に打ちこむ」(『英語研究』十二月号所収、研究社出版株式会社、昭和44・12)
- (八) 島田謹二「フランス英文学者の跡を尋ねて」(『英語青年』第二二四号第七号所収、昭和53・10)
- (九) 島田謹二「フランス英文学者のあとを尋ねて——オーギュスト・アンジュリエの故里」(『英語青年』第一二五卷第一号所収、昭和55・2)
- (十) 矢野峰人著『飛花落葉集——古今東西文苑散步』(北沢書店、昭和63・2)
- (十一) 島田謹二著『フランス派英文学研究 上巻』(南雲堂、平成7・8)

三 島田謹二先生をおもう。

この先生は明治三十四年(一九〇一)三月二十日、日本橋区本銀町に生まれ、平成五年(一九九三)四月二十日、脳梗塞により亡くなった。享年九十二歳であった。学歴は、当時お茶の水にあった私立・京華中学から東京外国語学校英語部に進み、ついで東北帝国大学法文学部英文学科に入学し、そこを卒業したのち台湾に渡り、台北高等学校教授となり、台北帝国大学文政学部講師を兼任した。

戦争中は香港大学図書館管理のため陸軍司政官(大佐相当)となり、現地に赴任した。しかし、日本の敗戦とともに捕虜となり、五ヶ月間スタンレー半島の収容所でくらしした。のち、内地送還となり、リュックサック一つ肩に背おい、鹿児島に上陸した。昭和二十一年(一九四六)五月、第一高等学校講師(のち教授)、ついで新設の東京大学教養学部教授、さらに大学院が開設されると、比較文学比較文化課程の主任となり、後進の育成に献身した。

その間、都内の官私立の大学で英文学を講じた。学問的には、『ロシアにおける広瀬武夫』(弘文堂、昭和37・6)、『アメリカにおける秋山真之』(朝日新聞社、昭和44・7、日本エッセイストクラブ賞)、『日本における外国文学』(上下の二巻、朝日新聞社、昭和50・12、51・2、日本学士院賞)、『ロシア戦争前夜の秋山真之』(朝日新聞社、平成2・5、菊池寛賞)などの大作をつぎつぎと世に問い、平成四年(一九九二)文化功労者として顕彰された。没後、『華麗島文学志——日本詩人の台湾体験』(明治書院、平成7・6)が刊行された。

またこれらの述作とはべつにフランス派英文学の研究——『ルイ・カザミアンの英国研究』(白水社、平成2・3)があるし、遺著としては『フランス派英文学研究』(上下の二巻、南雲堂、平成7・8)がある。

この教師は、学問をするために生まれて来たような人であった。が、家庭的にはめぐまれていなかった。子息を山でうしなったり、連れあいと離別するといった家庭の不幸を味わった。けれど生前になしえた研究の多くは、榮譽にかがやいたから、別なみで幸福なひとであったといえる。またかれにたいしては毀譽半ばするが、たしかに稀世の学者——まことに異色ある学者であった。その講義をよるこんで聴いてくれる者にたいしては、だれかれの区別なく愛情を注いだ。

わたしはこれまでずいぶん多くの教師と出会い、その教えを受けたものだが、どの授業もうわのそらで聞き、勉強そのものに興味をおぼえたことはなかった。だが、この教師の授業だけは、身魂をふるわせるに足るものであった。はたちすぎの小僧が、この教師の授業をはじめてうけたときの印象はまことに強烈であった。

そのころこの教師は、ちょうどいまのわたしの年齢——六十台なかばであったろうか。目鼻立ちのとなつた顔。やや厚い、口びる。眼鏡をかけていたが、ビンの底のように厚いレンズがフレームにおさまっていた。背丈は、高からず低からずといったところ。装いは、学者らしく地味であった。口跡ははっきりしており、音吐（声の出し方）は朗朗としていた。天性の美声のもちぬしであったといえる。

渾身の精気をこめて語った、あの熱っぽい語り口を、四十年以上もたたいまもありありと思いおこすことができる。おもしろ味の欠如したもそもそ授業にうんざりしていたわたしは、この教師の第一声を聞いたときから、生の気力を感じるおもいがした。

大学三年生のとき、この教師の授業を三コマ受講した。その内訳は、ルネッサンス英文学（シェイクスピアのソネット）が一コマと、英文学特講を二コマであった。後者はポールの「アッシャー家の崩壊」とワーズワースの『プレリユード』の購読であった。『プレリユード』の授業をのぞくと、記憶はだいぶうすれている。ルネッサンス英文学においては、プリントを用いたろうか。黒板にチョークで何やら文字を書いたような記憶がある。

ポールの短篇「アッシャー家の崩壊」は読了することができず、二度ほど補講をやったが、それでも終らなかつた。この授業の印象と想い出は稀薄であるが、「アッシャー家の崩壊」(The Fall of House of Usher)を、「アッシャー家、崩れ倒るるの記」と訳されたことを憶えている。⁽¹⁰⁾

ワーズワースの『プレリユード』の講義は、いちばんおもしろかった。わたしは毎時間、この教師の口からでる片言雙語をも聞きもらすまいと耳を傾けた。先生はいつも始業から十二、三分おくらせて教室にやってくる。教科書と「淡いレンガ色の本」を手にして教室に入ると、出欠をとらず、おもむろに原文をよみはじめる。

われわれの教科書は、大阪大学教授・竹友^{とらお}庸雄（藻風）が解説と注をつけた版本“*The Prelude*” by William Wordsworth（研究社英文学叢書、上巻、昭和39・6）であった。“淡いレンガ色”の本は、われわれに示すことはなく、どんなものか判らなかったが、わたしは昭和四十一年の三月、東大赤門前の古書店「大山堂」でみつけ、早速求めた。それはパリのオービエ社から刊行されている、英文学の古典の対訳叢書ちゅうの一冊（Wordsworth: *Le Prelude ou la croissance de l'esprit d'un poète*, Introduction, traduction et notes de Louis Cazamian tome 1）であり、著名な英文学者ルイ・カザミアンがくわしい解説とフランス語訳をつけたものであった。

昭和四十三年（一九六八）三月、わたしは、辞引をひきながらこのオービエ版を読みはじめ、約一年かけて翌年の春四月読みあげた。が、わたしのフランス語の力では、内容をじゅうぶん消化できなかった。『プレリュード』といったワーズワースの長編詩は、一種の自伝でもある。われわれは第一編^{ブック・ワン}をすつとんで、いきなり第二編^{ブック・ツー}の“学校時代”（School-Time）から習った。そして一年かけて、この第二編（二四頁〜三九頁）だけを読みおえた。この章編は、ワーズワースの故郷ホークスヘッドの学校生活を背景とする、十歳から十七歳ごろまでの精神史である。

毎回、十五行ほど進んだであろうか。学生に訳をつけさせず、教師の一方的な独演であった。原文を独特の節回^{ふしまわ}しでよむと、それに独特の訳をつけていった。なかなか味のある訳しぶりであったが、訳語を教科書に書き入れておかなかったことが、いま悔^くまれる。テキストの朗読の調子は、や、や、声^{こゑ}を長くひいて、読み手の感情を表そうとするものであった。

BOOK SECOND

SCHOOL-TIME—(CONTINUED)

Thus far, O Friend! have we, though leaving much

Unvisited, endeavour'd to retrace

My life through its first years, and measured back

The way I travel'd when I first began

To love the woods and fields;

これを教師は、詠嘆調で読んでゆく。その声は朗々と教室内でひびいた。「ザス、ファー、オーフレンドノハブ ウィ（……）ゾウリーヴィン

グマッチ アンヴィズィテッド(……) インデヴァード トゥー リトゥレイス マイ ライフ スルー イッツ ファーストヤーズ……」。

文中に人称代名詞——人称複数主格の“*We*”が出てくるが、この語を「われわれ」と訳すことなく、つねに「われわれ学友は……」と訳した。そして文章を解きほぐして説明するとき、よく「この語は一行すつとんで、……にかかる」といった。

ときどき原文から脱線して、雑談に興じることがあったが、われわれ学生には、授業そのものより、そっちのほうがおもしろかった。当時のわれわれの語学力では、とてもワーズワースの詞華をよみ、それを解し、味わうことはできなかったから。

あるとき、少年ワーズワースにひっかけて、じぶんの少年時代のことを語った。

——子どものころ、「謹ぼう」「謹ぼう」と呼ばれた。上野の「^す挿^{ぼち}鉢山」であそんだ。栗金団^{くりきんとん}が好物であった。

と、いつてみたり、湖畔にたたずみ、朝日をながめたり、山あい^{やまあい}に沈んでゆく夕日を愛^めでる少年ワーズワースを評して、

——こんなませた子どもは、「父^とつつあん小僧」である。

といって、われわれを爆笑させた。また何かのついでに、授業中に、“*ゴロツケ*”が出てきたのを覚えている。四月中旬にはじまった講義は、五月に入った。そのとき「いまの時候をフランス人は、*Joli mai*^メ（すばらしい五月）というのです」といったのをおぼえている。また授業中にこんなことをいった。

——外国語が読めるということは、たいへんなことなのである。会話とか作文はむずかしい。勉強^{けんぎょう}は、コツ^{コツ}やるものである。生きている作家を識り、つきあわなくてはならない。外国の景色を想いうかべることができないときは、国内の景色から連想するがよい。大学を出たとき、ひとり立ちするために、ノートをすべて焼いた。カザミアンは、パリ風の発音では、“*ギャザミアン*”となる。

試験（学年末に一度だけおこなった）の問題も変わっていた。ぜんぶで二問とくのである。うち一問は英文和訳。もう一問は「わたしの講義について感想をのべよ」といったものであった。和訳問題は、少年ワーズワースが“*日の出*”や“*入日*”を見たときの感動を歌ったもので、つぎのようなものであった。

問一 つぎの英文を和訳せよ。

(I love him)

But, for this cause, that I had seen him lay
His beauty on the morning hills, had seen
The western mountain touch his setting orb, (その沈みゆく球体＝入日の意―引用者)
In many a thoughtless hour, when, from excess
Of happiness, my blood appear'd to flow
With its own pleasure, and I breath'd with joy.

注・出題者は、研究社の教科書の三〇頁から抜いて出題したもの―引用者。

またあるとき、オービエ版のフランス語訳をひらいて、音読したことがあったが、それも独特の発音であり、詠嘆調であった。当時、奇異の感に打たれたあのふしぎな英語とフランス語のことをいまわたしはなつかしく憶いおこしている。

ポーの「アッシャー家、崩れ倒るるの記」の補講がおわったとき、七、八名の学生を連れて、中華料理店に行き、五目そばをこちそうになった。その道すがら、恐る恐る先生に話しかけてみた。

―先生はフランス語をいつ勉強なさいましたか。

―少年のころから……。初等文法を修めたら、単語を覚えねばなりません。英語しか読めないのは、片目だ。

―クセジュの……訳の『英文学史』には、訳されていない箇所がありますが……。

―あんなものといっしょにされてはこまる。

―教育大学の比較文学のF先生は、どうなんでしょうか。

―まだ力を込めて書いたものがないね。

院生のころ、いちど高円寺の住居（アパート）を訪ねたことがあった。“源氏の会”が催される日であり、四名ばかりの来客（うち二名は女

性)があった。先生の座卓のうえには文庫本が山のよう、に積んであった。紅茶がふるまわれ、一杯のんで帰ろうとすると、「もう一杯飲んでゆけ」といった。

新装になるまえの新宿の「中村屋」(レストラン)へは、われわれ学生は、よく立ち寄り、「中華まんじゅう」を食べたものである。友人とたまたま入ろうとしたとき、美しい女性を連れ先生と会ったので、われわれは同席することになった。先生は「かれはぼくの講義をきいた」といって、わたしをその女性に紹介した。

その女性は、講談社の佐藤春夫全集を担当した編集者だったかも知れない。先生はわたしに財布をわたすと、「中華まんじゅうを買ってきてくれ」といった。ウエートレスに食券をわたし、まんじゅうが来るあいだ、われわれは緊張し、無言であった。「司馬遼(太郎)のあの本を買ってきてくれたかネ」といった声がした。

やがて餡まん^{あん}と肉まんがきた。先生はいった。「ぼくは支那^{しな}の習慣で、餡まん^{あん}と肉まんを両手にもって、交互に食べるんだ」といって、実演してみた。

またあるとき、山の手線のなかで、座席にすわった先生のすがたをみた。おそらくどこかの学校での講義の帰りであろう。

——荷物を持ちましょう。

といわれ、わたしはたいへん恐縮した。

——これから外国人の先生の講義があります。とわたしはいった。この先生は、いったいに外人講師の講義には敬意を表していたようである。

——ご講義……。ワセダの弱みは、語学ができないことである。(……)は英語が読めるのかな。

——読めるとおもいます。

わたしは学窓を出て、ある大学の専任講師になった。何年かたって六月ごろワセダの文学部で講演会が開催された。先生は淡い青緑色の高級な夏服を着ていた。演題はたしか「私と比較文学」ではなかったであろうか。二百名ほどの聴衆があつまった。当時、先生は七十を過ぎていただろうか。声には往年のころの張りはなかったものの、澄んでいた。講話の細部についてはいま思い出せないが、印象に残っているのは、開口一番「ワセダでおもいだすのは、吉江喬松^{たかまつ}(一八八〇—一九四〇、早大仏文科、創設者)と佐藤輝夫(一八九九—?)、フランス文学者・早大教授)である」といったこと、書いたものには「いのちの部分」がなくてはならぬ、というものであった。「島田はどう考えるかといいますと……」とか

「島田は……なのです」といったことが耳にのこっている。講演がおわって大隈会館で昼食会となったが、庭園をみながらカレーライスを召しあがっていた姿をおもいだす。

晩年、この先生はひとからはめそやされ、その著作が賞の対象になり、また国家がその業績を嘉するにつれて、知名度は、あがっていった。同時に驕慢の風が目につくようになった。和服を着て、新宿の紀ノ国屋書店の洋書部で知りあいと、話をしている姿を目撃したことがある。そのとき先生は高ぶった人のようにみえ、鼻息が荒く、昂然として「ふむ」「ふむ」といつていた。そこにはかつての恭謙な姿はなかった。……

わたしは昭和五十七年（一九八三）の盛夏——信州飯田市の日夏耿之介（二八九〇～一九七一、本名・樋口閑登、大正～昭和期の詩人、英文学者）宅を訪れた。その蔵書を拝見するためであった。約一万二千冊の蔵書の多くは「蔵」「書庫」のなかに収められていた。

日夏夫人は、突然たずねたわたしを心よく迎え入れてくれた。蔵書を拝見したのち、茶菓子、昼食（ちらしずし）を供され、たいへん恐縮した。そのとき、こんな話を耳にした。

——東京の古書店の人がきて、蔵書の値ぶみをしたが、三人とも評価額がちがっていました。先日、慶応の先生が硯（宋代のもの）をわざわざ見においでになりました。

——若いころの島田謹二先生は、お宅によく出入りなさったようですが。

——あの方は、おえらくなられた。主人は翻訳をたのんだことがありますが、気に入らなくてね。……かあちゃん（妻）がいばってネ……。

外国語学校の生徒のころ、先生は仏語学科の学友安藤更生（一九〇〇～七〇、のち美術史家）の父親がワセダでフランス語を教えていた関係から、西条八十（一八九二～一九七〇、大正から昭和期にかけての詩人）や日夏耿之介を知るに至った。

日夏耿之介が島田に依頼した翻訳とは、エドワード・ウィリアム・レインが英訳したアラビアン・ナイトの物語である。それは大正十四年（一九二五）二月、『アラビヤンナイト』と題して、世界童話大系刊行会から刊行された。

日夏は「国訳者之凡例」のなかで、「発兌者から委託されて翻訳に着手して間もなく、かの大震災火災に遭遇し 元来の虚弱なる身心が一方ならぬ打撃を受けた上 職務のため繁忙に迫はれたため、三月中旬一夜つひに仆れて爾来十ヶ月以上重態の病床にあったため、友人市川十九君（島田謹二のペンネーム―引用者）の夥しき助力を覓めねばならぬ必要に迫られた。寔に本書第一巻の辛くも世に出でたのは 同君の篤実な下訳的助力にまつことが多い」（三二頁～三三頁）とのべている。

昭和四十八年（一九七三）四月のある日曜日のこと、わたしは就職にさいしてお世話になった中林徳三郎先生（一九〇五―一九七六、もと東大教養学部教授、京華中学、第一高等学校をへて東大英文科卒）の練馬の自宅をたずねた。中村教授は、ネクタイをしめ、背広を着、わたしをバス停まで迎えに出ていた。休日であれば、普段着のままでひとをむかえるのが当然のように思っていたから、みだしなみの良さと礼讓におどろき、身がちぢまるほど恐れ入った。

中村教授は、岩波文庫に入っているスティヴンソンの『南海千一夜物語』や『オシアン―ケルト民族の古歌』などの翻訳者として知られている。江戸ッ子であり、たしか本郷の生まれである。「勉強がしたくなり」、三カ年間かけて、オシアンの翻訳に没頭した。ともあれ、この先生もなかなかの人物であった。このように礼儀正しいひとと会ったのは、高校のとき担任だった国漢の宇井義三郎先生とこの先生だけである。

いちども面晤したこともない、しかも素性の知れないわたしを、中村教授はたった一枚の履歴書を見ただけで、「この人を後任に……」といったあとがまにすえていったのである。

——島田さんもそこにすわり、にぎりずしを食べて行きました。

と、語った。そのとき兩人のあいだで、どのような会話がおこなわれたものか知るよしもない。が、二人とも中学はおなじ、職場もおなじの同輩同士であった。

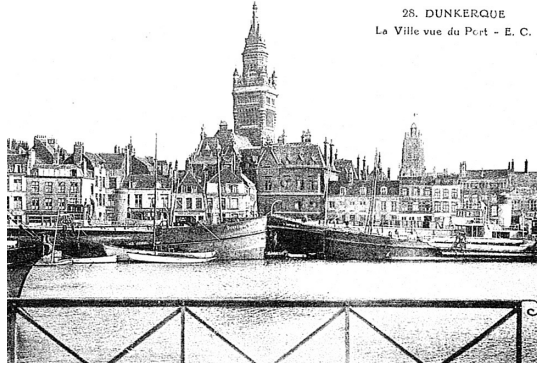
昭和二十九年（一九五四）の真冬——島田は西穂高^{ほたか}のいたで、猛吹雪のなか、愛児・敏彦^{としひこ}（当時、都立戸山高校生徒）をうしなった。その子息と中学のとき同級生であったのが、練馬在住の共立女子大学名誉教授・内田市五郎氏である。島田敏彦は、小柄の少年であったという。ませた少年であり、あまり人望はなかった。あるとき、中学の教師が、「解^げせない」を「解^{かい}せない」と誤読した。そのとき、「これは解^げせない」と読むのが正しいのです」といったのは、島田教授の息子であった。

どうも島田敏彦は、こなまいきなことをいう少年であつたらしい。内田少年（のちに都立北園高校にすすむ）は、遭難事件のあと、島田教授宅に電話したが、通じなかったという。わたしは、このエピソードを内田教授から直かに聞いた。

*

四 オーギュスト・アンジュリエの人と業績。

26. DUNKERQUE
La Ville vue du Port - E. C.



ダンケルクの町。〔筆者蔵〕

島田教授が執筆したアンジュリエに関する論攷^{（9）}には参考文献がいちいち挙げられていないので、それについて知ることは容易なことではなかった。が、わたしはアンジュリエに関する目ぼしい文献をすべて入手した結果、“種本”がつつぎと明らかになった。

何んといっても先生がたえず手元に置き、参考にしたと思われる文献は、アンジュリエの弟子であったフロリ・ドゥラトル（リール大学名誉教授、ソルボンヌ大学教授）が執筆した『オーギュスト・アンジュリエの人となり』二巻本（*La personnalité d'Auguste Angelier*, Librairie Philosophique J. Vrin, Paris, 1939, 1944）である。

*

地^{（11）}でうまれた。その生家は、いま残っていない。近くに古い家がすこしは現存するが、おそらくかれが生まれた家は、第二次世界大戦のとき、空襲によって失なわれたものであろう。

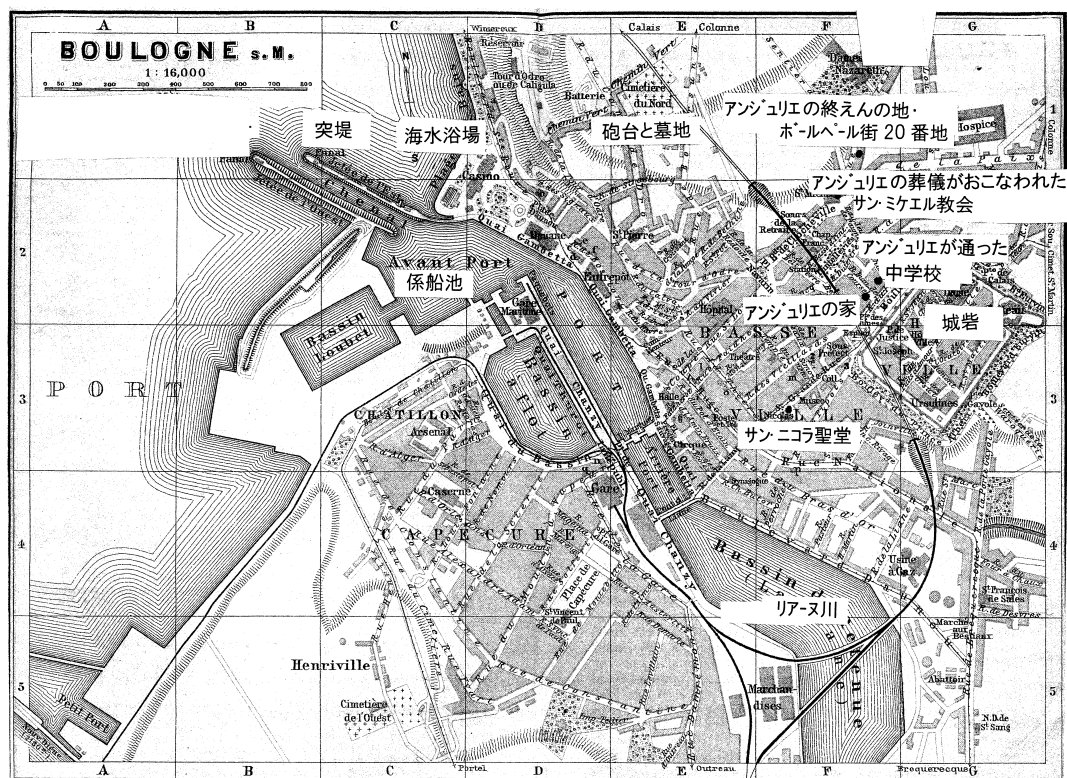
ダンケルク（Dunkerque）は、リールの北西七十九キロのところに位置するドーバー海峡にのぞむ港町である。ダンケルクという名称は、フラン語の「砂丘の教会」の意であり、七世紀に建てられた教会に由来する。一八五〇年代の人口は約二万四千ほど^{（12）}である。

この町は中世において六回も侵略者の包囲と略奪をうけ、十四世紀から十七世紀にかけて、フランス・スペイン・イギリス・オランダなどの支配をうけた。ルイ十四世はここにとりでを築いたが、一七一三年ユトレヒト条約により取りこわさざるをえなくなった。

この町が一躍して有名になったのは、第二次世界大戦ちゅう、イギリス、フランス、ベルギーの兵約三十三万八千名がドイツ軍の追撃をうけて、海岸からイギリス本土へ撤退したことである。いずれにせよ、この古い港町は、こんどの戦争で町の四分の三が破壊された。

アンジュリエが生まれた家の跡地には、いまアパートのようなものが建っている。

アンジュリエは、父ジャンとおなじ名であった。母ルイザの実家の姓は、ラクールという。母はパドカレー県の漁港ブローニュ・シュール＝



プーローニュ・シュール・メールの地図（1910年代）

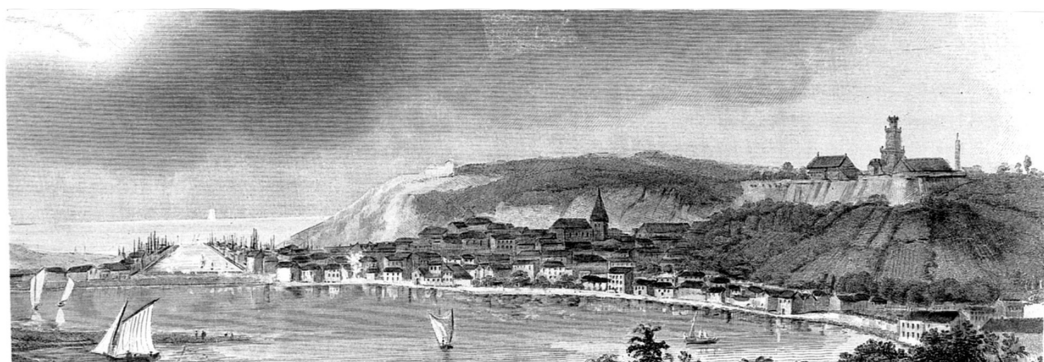
メールの人である。アンジュリエの出生届によると、かれが生まれたとき、両親はともに二十六歳であった。フロリ・ドゥラトルの『オーギュスト・アンジュリエの人となり』（上巻、二十五頁）には、父親は「製材所」をダヴィド・ダンジェ街六番地で営なみ、その騒音のために、近所の住民はたいそう迷惑したように書いてある。

著者のドゥラトルは、ダンケルクに出かけ、戸籍を調べて書いたかどうか判らない。が、おそらく実地調査はしなかったものと思われる。

ダンケルクの文書館に保管されている「出生登録簿」（一八四八年）によると、父親の職業は、「天井の漆喰塗り職人」とある。また証人のひとりとして、役所に出頭したアンジュリエの祖父（当時、五十三歳）J・A・アンジュリエは、「建具屋」の親方とある。

いま文書館に残る公的な記録をそのまま信ずるとすれば、アンジュリエは職人の子として生まれたことになり、島田論文（「オーギュスト・アンジュリエの業績——『フランス派英文学研究』の一章」『比較文学研究第十五号』所収、昭和44・4）にみられる「家は、製材工場を営み、大へん豊かであった」といった記述はだいぶん怪しくなる。

いずれにせよアンジュリエは、幼くして父をなくした。父はあ



ブローニュ・シュール・メールを描いた19世紀の銅版画。〔筆者蔵〕

まり体が丈夫ではなく、しごこのほうもあまりぱっとしなかったようだ。父は一八五二年五月三十一日に亡くなった。やがて母は、第二子（娘）が生まれる前に、ダンケルクを引き払い、実家のあるブローニュ・シュール・メールに居を移すのである。

ブローニュ・シュール・メール（以下、ブローニュとする）は、ドーバー海峡にのぞむ港町である。パリの北北西二四二キロに位置し、ローマ時代に軍港が築かれ、*“ゲーソリアクム”*（のちに*“ポノーニア”*⁽¹³⁾）と呼ばれた。

シーザーの『ガリア戦記』の第五巻のなかに、この町の港のことが出てくる。シーザーは第一次イギリス遠征を計画し、「一同がイティウス港へ集るように命じた。大陸から約三〇哩のブリタンニアへ渡るのはこの港からが最も便利であることを知っていた」（近山金次訳『ガリア戦記』岩波文庫）。

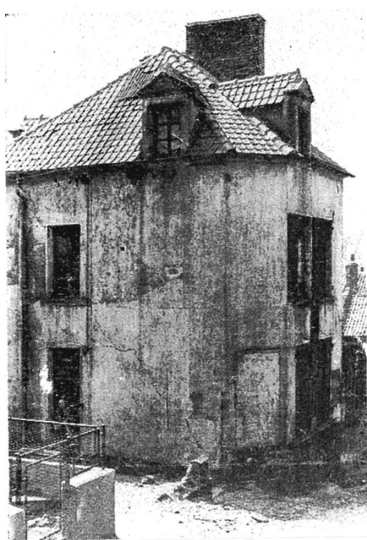
紀元前五十四年ごろ、イティウス港（*Itius portus*）は、ブローニュの町のほぼ中央を流れるリアーヌ川の河口にあり、規模は大きく、水深もあった。

この町はいまフランス第一の漁港として栄えているが、八八二年ノルマン人によって破壊され、九一二年に再建された。中世の伯爵領時代をへて十五世紀に王領となったが、十六世紀にはしばらくイギリスに占領されたことがあった。ナポレオンがイギリス遠征を計画したとき、その基地になったし、第二次世界大戦ちゅうは、ドイツ海軍のUボートの基地として用いられた。

ブローニュの町の景観はどうであろうか。この町の中心は、何んといっても十三世紀に築かれたという城砦^{ランバール}（じょうさい）である。

その要塞城壁は、威風堂々と眼下の街を見おろしている。町中の道はふぞろいで、小さきまざまの家がそのわきに立っている。

町は「山の手」と「下町」^{オットヴィル}にわけられ、前者はリアーヌ川の東岸にあつて旧市街を形づくり、後者は城砦のふもとに位置し、近代的な町並みを形成している。こんにちいちはん賑やかな街区は、この下町な



アンジュリエ親子が住んだ家
(ブローニュ)。

のである。その他の歴史的建造物としては、十五世紀から十八世紀にかけて造られたサン・ニコラ聖堂、十八世紀に創建された市庁舎などがある。城砦から街路が何本も市街地にむけて伸びている。数ある大通りの中でいちばん大きいのがリアヌ川にむかって下っている「大通り」である。ちなみに、このリアヌ川は、ヨーロッパの河川によくみられる「係船池」や「港」の役割をはたしている。当時、そこにはニシンやサバをとる大小の漁船がいつもやっていたし、対岸のイギリスとの連絡船が出入りした。

リアヌ川の河口には、のちにアンジュリエがたびたび海を見に出かける「突堤」が二本、外洋に突きでている。町の北側——外港のそばに砂地の海水浴場があり、そこにカジノもあった。砂丘もある。その海岸の後背地は、丘陵と崖であり、砲台や墓地などがある。そこに散歩にとってつごうのよい小道が何本も走っている。目の前には茫洋とした海がひろがっている。

また城砦からリアヌ川の左岸の先をのぞめば、緑の丘陵が目に入った。ブローニュは、自然の雄大なけしきに取りこまれた古い、静かな町である。

寡婦となった母は、実直な女性であった。幼ない子どもを連れてブローニュにくと、兄の持物である小さな家に入り、兄の帳簿を手伝いながら、小じんまりと暮らしはじめた。アンジュリエにとっておじに当たるオーギュスト・ラクルは、実業家（建築請負業者）であり、生活にとりがある町の名士のひとりであった。おそらくアンジュリエの一家は、この「オーギュストおじ」から生活の援助をうけたものであろう。

おじには娘シュザンヌとむすこオーギュストがいたが、のちに兩人とも若くして逝ったので、おいのアンジュリエをわが子のように愛し、一八九五年アンジュリエは、おじの遺産と宏壮なる家をうけ継ぐのである。

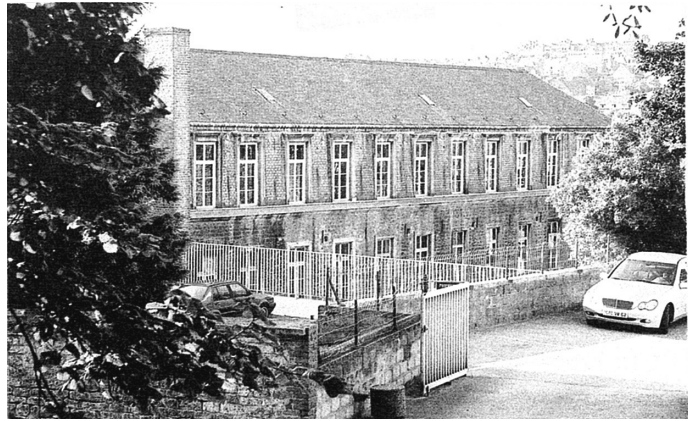
ともあれ、アンジュリエ一家の新たな住所は、デュモン・ドゥ・クルセ街二十番地であった。家は城砦の「デュヌ門」に近いところにあった。かれらの住居の写真が一枚残されているが、その家はいまはない。

母の故郷に帰ったからには、学校にも通わねばならない。アンジュリエは、一八五八年から一八六五年までの約七年間、ブローニュの町の「中学校」に通った。

この学校は、かれの住居のすぐ近くにあり、いまは「美術学校」になっている。島田謹二教授は、昭和五十三年（一九七八）六月中旬——フランスの友人B氏夫妻の案



アンジュリエの学友、
ルイ・オヴィヨン医師



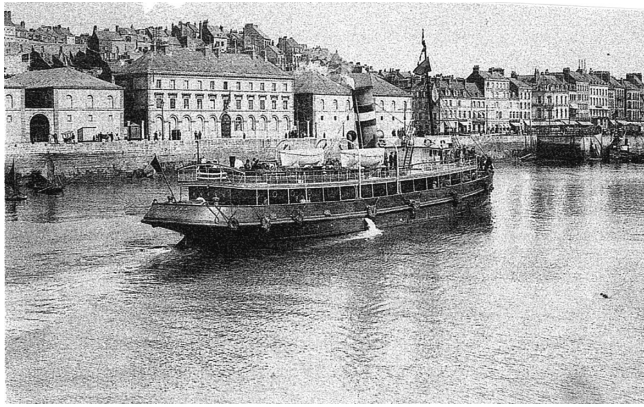
アンジュリエが通った当時の中学校、いまは「美術学校」。うぶ
〔筆者撮影〕

内でブローニュを訪れたとき、「アンジュリエの学んだ中学をたずねあてた。今ではアンジュリエ中学校と改称されて、何の変哲もないありふれた校舎だ」「フランス英文学者のあとを尋ねて——オーギュスト・アンジュリエの古里」『英語青年』第二二五巻第十一号所収、昭和55・8）と記しているが、この記述は誤りである。わたしは同中学校の校長と会ったときに、「いまの美術学校が当時の中学校である」と教えられた。一八五八年十月にいちばん低い第八学年生となり、ついで上級のクラスへと進んだ。中学校に在籍ちゅうは、すなおなよい生徒とはいえず、どちらかといえば奔放な子どもであった。学校の課業にいらする生徒であった。いろいろ本をよんだが、気に入ったものだけを熱心によんだ。勤勉な生徒ではなく、気がむけば深夜まで勉強するタイプであった。

のちにアンジュリエの終生の友となる学友ルイ・オヴィヨン（医師）の回想によると、アンジュリエは通学生であり、どちらかというと、教師を当てにせず、みずから学ぶタイプの生徒であったという。当時の教師は、教養に欠けるものが多く、その心情なり知性が尊敬できるものでないかぎり、けっしてその教師のことばに従うことはなかった。

ときどきラテン語の宿題をやってこぬときもあった。が、よくフランス語で『詩』をかいていた。その気になって一生懸命、課業に精をだしさえすれば、クラスのトップになることも難事ではなかったが、かれはガリ勉でなく、勉強にもむらがあったようだ。

アンジュリエは、宿題をおえると、家のそばにある城砦に遊びに行く。ときにデュモン・ドゥ・クールセ街の坂道をくだって波止場の突堤のほうまで散歩に出かけ、夕日をながめたりした。また学校が夏休みになると、海で泳いだり、リアーナ川にボートを浮べて船あそびをした。またあるときは、田野をひとり思うままに歩きまわる。人嫌いであったわけではないが、じぶんもちがった感性をもつ人間がそばにいと、その者に気持をかき乱される。じぶんひとり



ブローニュ・シュール・メールの町とリアヌ川。〔筆者蔵〕

の印象をもとめ、それを味わうためであった、と友人オヴィヨンは追憶している。アンジュリエには、すこしも孤独をおそれぬ、真のつよさがあった。また故畔詩人ワーズワースがそうであったように、アンジュリエも「自然」を友とするませた子供であった。自然と孤独を愛するへんな少年だった。

年齢のわりにおとなびたアンジュリエは、いつしか恋愛感情を散文や韻文にたくして詠いあげる少年になっていた。マリーという女性に詩篇をはじめて献げた。一八六三年六月ころのことであり、ときにアンジュリエは十五歳であった。

そして二年後の一八六五年一月から日記をつけはじめるのだが、恋心をよんだ文字がたびたび日記にしろされるようになる。かれの初恋の相手というのは、どうやらかわいいイギリス女性であったようだ。そもそのなれそめはこうであった。

復活祭の日に教会のミサに出かけたとき、ノートルダム街ですれちがいさまにお互いの姿を見たのが最初である。何の屈託もないアンジュリエ

の歩きぶりが、相手の女性におかしかったらしい。そのイギリス女は子守であった。体のがっしりとした、黒い目をした娘であり、いつもえみを浮べていた。

このイギリス女のことは、やがて母の知るところとなる。母は息子が女にうつつを抜かすあまり、学業がおろそかになることを恐れた。

恋愛に心がゆれうごいている間にアンジュリエは、いつしか十七歳になっていた。そろそろ将来の方向を定めなくてはならない。いくつか選択肢はある。商人になる道。あるいは流浪者として外国をさまよい歩く道。しかし、流浪生活はいかにもあぶない生き方である。かれは修辞学科（中学最高学級）にいた。「バカロレア（大学入学資格）をとったら、どうしようか」（一八六五年一月九日付）と日記にしろしている。

一時はパリにある理工科学校に進むことを考えたが、母にいろいろ経済的負担をかけることをおもうと、しりごみした。ともあれ、バカロレアの資格だけでもとっておこうと、一八六五年八月一日ドゥーエー（フランドル地方ノール県の都市）で試験をうけたら、難なく合格した。



ルイ・ルグラン高校の寄宿生であった
ころのアンジュリエ（20歳）。

*

やがて大学に進みたいと思うようになり、ブローニュからパリに上り、ルイ・ルグラン高校の寄宿生となった。かれがこの進学校に入りたいとおもったのは、ゆくゆくは高等師範学校に進学する肚があったからである。

アンジュリエは、この高校で第一級の教師について学業に精をだす一方で、少年のころからはじめた詩作を試みたり、高等師範学校の受験を念頭に入れて、ラテン語で詩をかくこともはじめた。けれどかれの人生を根底から狂わすようなある事件がおこる。一八六九年七月

のこと——よくある賄^{まかない}に関する生徒の不満がいきよに爆発した。エコール・ノルマルの試験がはじまる数週間まえのことである。いつものように固い、しかもよく煮えていないインゲン豆が食卓に出たことから、うつ積した生徒の不満がいきよに爆発した。大さわぎとなり、食堂の会計係はさんざん罵倒された。三日のあいだ学校は生徒によって占拠され、窓ガラス、テーブル、胸像などが破壊された。地下室にたてこもる者もいて、「ラ・マルセイーズ（国歌）」をうたって氣勢をあげた。

アンジュリエは、当局の者とはげしくやり合っていたから「反抗的な人間」とみられていた。暴動の張本人のひとりとみられ、同年九月三十日六十三名の生徒が退学処分をうけたが、その中にかれの名前があった。かれにとっても天からふってわいたような大事件であった。

アンジュリエは、寄宿舎のまかない事件では、さんざん騒ぎをおったひとりであり、その名は当然ブラックリストにのせられていた。しかしエコール・ノルマル側は、まさか受験資格までうばわないであろうと高をくくっていた。筆記試験をうけたところ感触もよかったので、これならだいじょうぶだろうと思って、のびのびとすごしていると、数日後、教授のひとりから試験に落ちた、といった知らせが入った。エコール・ノルマルの校長は、今回のさわぎでルイ・ルグラン高校から閉めだされた生徒は、入学させない、といったきびしい方針をうちだしていたからである。

青春すなわち挫折の時代、というが、かれは生まれてはじめて大きな挫折をあげわった。こうなると、ギリシャ語やラテン語を教える教師の道は、あきらめるしかない。が、現代外国語や現代外国文学の教師の口ならあるやもしれなかった。当時のフランスの学校制度では、現代外国語の



アンジュリエがフランス語を教えた「イースト・ハウス校」(グリニッジ)。〔筆者撮影〕

教師の地位はひくく、図工や体育の教師の地位とおなじように權威はなかった。おまけに待遇はわるいし、受講する生徒の頭数によって俸給が支払われた。

八月の初旬——かれは故郷のブローニュに帰った。そして数年前にできた英語塾に出かけ、その教師に思いあまって相談を試みた。するとあなたは、古典語の先生になれる見込みはありませんな。どうです、いっそのこと現代外国語の先生、たとえば英語の先生にでもなってみたらいかがです。イギリスへ行ってフランス語を教えるかたわら、英語や英文学をまなんでみてはいかがでしょう、といった。

その教師は親切な男であった。ロンドン郊外のグリニッジで私立学校を経営しているのが、わたしの友人です。いまちようど『フレンチ・マズター』を捜しているところです。もしご希望があれば、紹介してさしあげますよ、といってくれた。

アンジュリエは、渡りに舟とこの申し出に飛びついた。そして、したくをととのえ、一八六九年九月はじめに、対岸のイギリスにむけて出発した。

この年、アンジュリエは二十一歳であった。かれに提供されたのは、フランス語の助手の地位である。住込みの無給の雇人である。食事と部屋はあたえられるけど、月給なしで働かねばならぬ、きびしい労働条件であった。

かれがフランス語のイロハを教えた学校は、グリニッジのブラックヒースの丘にある「イースト・ハウス」と呼ばれた私立学校である。校長の名は、ジョン・ベリーといった。わたしはこの学校にひじょうに興味をおぼえたので、ロンドン滞在ちゅうに調査を試みた。校長はどのような経歴の人であったのか。学校はいまどうなっているのか。アンジュリエの痕跡は、何かあるのか。

当時、グリニッジには私立の進学準備校のようなものが、いくつもあったようである。「イースト・ハウス」もそのような学校の一つであった。『グリニッジの住所氏名録』(一八六九年)の三八頁と九一頁に、この学校の小記事が出ている。——校長は、ロンドン大学で学士号を取得した人で、ジョン・ベリーという。イースト・ハウス校は「紳士のため

の学校」⁽¹⁵⁾とある。

この学校は、いまあるグリニッジの鉄道駅から北西の方角に位置し、駅から歩いて二十分ぐらいの所にある。ブラック・ヒル通りを北西に行くと、小高い丘に「ブラックヒース公園」があり、そのうしろにあるレンガ造りの校舎が、イースト・ハウス校である。この建物は、いま売りに出されている。ブラック・ヒル通りに面して校舎があるのだが、その裏手はふつうの住居となっていて、アンジュリエはかつてその一つで寝食をとりにしたものであろう。

グリニッジに来てみると、すべてに幻滅した。新しい仕事に身が入らない。かれに与えられた仕事というのは、二十名ほどのいたずらっ子にフランス語の初歩を教えることであるが、読み書きや、数のかぞえ方まで教え込まねばならない。

*

一八七〇年の夏休みをブローニュの母のそばですごしている間に、祖国フランスとドイツとのあいだの関係が悪化し、ついに普仏戦争（一八七〇〜七二）がはじまった。二十二歳のアンジュリエは、いとこのオーギュスト・ラクール（十八歳）とともに志願兵となった。

アンジュリエは同年九月上旬——ブローニュを立ち、サントメール（パドカレ県の町）に赴くと、そこで初年兵教育をうけた。はじめての軍隊生活に感覚が鈍磨し、思考力がなくなるおもいをしたが、暇のときネルヴァルやスタンダールの小説をよんで、みずからを慰めた。兵舎のまわりの景色はすばらしい。牧草地が果てしなく広がっている。田園風景は、古代ローマの詩人ウェルギリウスが描いた静けさの世界だ。

牛が牧場でのもんぴりと草をはんでいる。樹木は静止している。夜中に牛の鳴き声がきこえてくる。小川の水は、静かに流れている。

アンジュリエは、兵士となるべく基礎訓練をおえると、リヨンに駐留している連隊に合流せよ、といった命をうけた。かれはいとこと共にリヨンを目ざして出発した。アラス、アミアン、ルーアン、ル・マン、トゥールを経て、リヨンにたどり着いた。

リヨンの連隊に入隊したアンジュリエは、その年の十一月上旬、ボルドー（フランス南西部の都市）に転属になり、オーヴェルニュ（フランス中央部）を経て目的地にむかった。その移動中、かれは風邪をこじらせ、十日ほど入院せねばならなかった。

年が明け、一八七一年の一月下旬、病いがぶり返した。こんどはミライユ街にある尼僧院の病舎に入院するはめに陥った。

かれが入れられた場所は、白い、小さな清潔そのものの部屋であった。そこから庭がよくみえた。患者は大切に扱われ、尼僧たちは骨身をおし

まず、よく世話をしてくれる。かれはここで閑余をぬすんでは、ボシュエ（一六二七〜一七〇四、神学者、作家）のものを讀んだりした。が、読書とは別に、いつしかある尼僧に淡い恋心をいだくようになっていた。その若い、うつくしい女性は、静寂と聖愛に満ちた病舎で病いをいやしているアンジュリエの心のなかで、清らかな愛情をはぐくんでいた。彼女との別れは、つらく哀しいものだった。

アンジュリエは、とうとう免役除隊となった。これで晴れて故郷に帰れる。ブローニュには、息子の帰りを待ちわびている母がいる。

故郷へもどるに際してアンジュリエは、あわてず、のんびりと帰ることにした。三月十五日、ポワティエ（フランス中西部の町、パリの南西三三九キロ）に着いた。町のサン・ピエール大聖堂をおとずれた。夜、その印象を克明に日記にしるす。

ここは古いだけを取りえの町である。教会や家や通日も古色をおびている。男と女も醜悪である。女性についていえば、ボルドーのほうが、かわい、きれいな娘が多い。翌日は古代からの都市トゥール（フランス中部、パリの南西二三四キロ）に着いた。ここもポワティエとおなじようにローマ時代からの古い町である。

ゴシック式の大聖堂や古城がある。これまで訪れた町とはちがって、住んでみたい気持になる町であった。通りの家の壁は白いし、清潔だ。ちよつと故郷のブローニュと似たところがある。女性もきれいだ。

ここからふたび汽車にのるはずだった。しかし、乗りそこねてしまった。やむなく時間つぶしに町中や郊外を歩いてみる。澄みきった空。小川の青々とした水を見、そのせせらぎの音に耳をそばたてる。ポプラの並木が、遠くまでずっとのびている。樹木はまだ芽をふいていないのに、木の間にはすでに小鳥がいて、何やらさえずっている。

お昼ちかく、トゥールからオルレアン行の汽車にのる。オルレアン（フランス中北部の町、パリの南南西一一六キロ）で下車し、十七世紀の大聖堂を見物するつもりだ。

切符を買わず、オルレアンからパリ行の汽車にのった。無賃乗車である。おなじ客車に若い女性がのっていた。ブロンドの髪の色さく美しい女性である。いい旅の道ずれができた。横顔がとても美しい。人にたいする態度に、やさしさやせん細さを感じられる。

目は碧い。声はよくひびく。r^{アール}の発声に気をつけるところは、女優のようだ。会話がはじまった。オペラ座のおどり子だそうである。年齢は二十二。名前はブランシュ・B^ベだという。素性のよさそうな女のようだ。住いはメイン街三十番地だという。結婚していて、夫は五十二歳。職業は彫像師だが、いまは別居している。

二人の会話は、ますますうちとけたものになっていった。女性はとても疲れているとみえて、いつしかアンジュリエの肩にもたれると、すやすやと眠ってしまった。かれはそうされるのが、まんざらいやでもない。その美しい横顔を見ていると、その額にそっと口づけしたい気持ちになった。いつの間にか、彼女の手がアンジュリエの手の中にあった。……

とうとうパリに着いた。包囲中のパリで、ふたりは食事をした。そしてそのあと、かれは馬車をやとい、女をその家に送り届けた。あす会にくると、彼女はいった。

アンジュリエがパリに着いた翌日——一八七一年三月十八日——コミューンの内乱が勃発した。反共和主義者の国民議会に反抗する王制主義者らは、『革命自治体』を宣言した。そのためパリのいたるところで小ぜり合いや戦闘がおこり、また銃殺刑などの殺りくがおこなわれていた。おまけにパリは、プロシャ軍に包囲され、窮乏にあえいでいた。人は食べられるものなら、何でも口の中に入れた。

十八日、朝から砲声がきこえる。モンマルトルの丘のあたりで大砲をうばうための戦闘がはじまった、という。アンジュリエは軍服を身につけているから、危くて街路をうろうろできない。ヴァヴァン街のサント・マリー・ホテルにひきこもっていた。

彼女がやってきた。夕方の六時には失礼するという。暖炉の火のそばで話をする。手は手のうちに、目は目のうちに……。やがて彼女は立ちあがり、帽子を手にし、帰ろうとする。それをアンジュリエは、引きとめた。小さなテーブルで夕食をとる。テーブル越しにキスをする。

女は包みかくさず、何でも語りだす。家族のこと、結婚のこと、じぶんの人生のこと、失くした子供のこと、世間からどう見られているかといったことなどを……。そのことばは、一つずつ、アンジュリエの心にしみ込んでゆく。

あたしのことをどう思っているの、と女はたずねる。それにたいして、アンジュリエは愛していると答える。二人の会話は、暖炉のすみに置かれたテーブルのうえのローソクの火のかげの中で、ひそひそとおこなわれた。突然、ドアをノックする者がいた。ホテルのボーイである。ルコントとクレマン・トマの両将軍が銃殺され、あちこちでバリケードが築かれた、といったニュースを知らせてくれた。

ときどき街中を歩いてゆく、兵隊の軍靴の音がきこえてくる。外の喧騒にくらべて、この部屋は何んと静かなことか。ここにあるのは、静寂と愛と、接吻と、ため息である。二人はなにもかも忘れて、没我のさかいにいた。やがて真夜中の鐘が鳴ったとき、アンジュリエは女を家まで送ってゆく。別れぎわに見た、赤いストッキングをはいた彼女の足は、すばらしかった。

*

このほのかな恋は、長くはつづかなかった。二十日には、アンジュリエはブローニュの町にもどって行った。かれはシーブルカン街、ウィソック街を息をはずまながら登ってゆく。やがてデュモン・ドゥ・クールセ街の角をまがり、さらに小さな坂道をのぼってゆくと、目ざすわが家が見えた。わが子の無事なすがたを見て、母は息子をかく抱きしめると、泣きだした。程なくむかしの恋人マリーや叔母などがやって来た。久びさの再会——抱擁とキスと祭のような騒ぎがしばらくつづいた。夜には叔父オーギュストの家を訪ね、帰還のあいさつをした。その夜、ひさしぶりにじぶんの小さな部屋で安眠をえた。

一八七一年の春から夏にかけて、アンジュリエは将来について不安の気にみたされていた。が、いつものように教会のミサに出かける。また街中に出ると、そこにくり広げられる日々の光景に目をとめる。市場の活気にみちたありさま、ゆき交う人波、なかでもきれいな女性にすぐ目がつまる。

夕食後、港や突堤のあたりをさまよう。海岸にたえず打ち寄せる波。ひろく大きな海を飽すにながめる。

将来のことがいろいろ気になる。これからどう生きてゆけばよいのか。ルイ・ルグラン高校での一件以来、大学へ進学することにはうんざりしていた。その代わり、ジャーナリズムの世界に関心をもつようになり、夏の間ブローニュの雑誌『ラフランス・デュノール北 仏』に『ハムレット』のペンネームで記事がのり、ついで国内の諸雑誌もかれのために誌面を提供するようになった。しかし、記事をかいても、糊口をしのぐには十分とはいえず、将来のことをいろいろ考えると、意気消沈した。

ある日のこと、グリニッジのイースト・ハウスの校長と町中ではったり再会した。そのときもういちどフランス語を教えてみないか、といった誘いがかかり、アンジュリエは渡英する決心をした。しかし、恋人マリーと母は、かれのイギリス行に反対した。そんな国に行っても、うだつが上がらないから、止すべきだ、という。それよりも高校リセの助教にでもなることを考えてはと勧める。

アンジュリエは、家族の懇願に負けて、パリ大学副区長に手紙をかき、パリの高校の復習教師レクティートル（リセの自習監督）の口でもないか、依頼した。その返事がくるまで、ぶらぶらしていてもしょうがないので、一時しのぎとして、グリニッジの例の学校でフランス語を教えることにした。

一八七一年七月末——アンジュリエはロンドンに着くと、グリニッジのむかしの古巣にむかった。やがていたずら子を相手の授業がはじまった。

こま切れのフランス語をかれらの頭の中に詰め込んでゆくのだが、わんぱく小僧どもは消化不良をおこしている。きょうも一日おわった。将来がとても不安だ。

八月中ごろ、かねて詩人のアルフレッド・テニソン（一八五〇〜九二、イギリスの桂冠詩人）に手紙をだし、詩をフランス語に翻訳してもよいか許可をもとめていたが、ようやくその返事が届いた。返事は好意的なもので、遠慮なく仏訳なさってもよい、といったものであった。

またパリからも吉報が届いた。それはデカルト高校の校長から来たもので、年俸八〇〇フランの復習教師の口があるというものだった。アンジュリエは、この申し出に飛びついた。そして直ちにベリー校長から暇をもらうと、フランスに帰った。

ルイ・ルグラン高校は、『賄事件』の一年後に名称を変更し、『デカルト高校』になっていた。かつて苦杯をなめた母校に、こんど教師として舞いもどるアンジュリエの心境は複雑であつたろうが、背に腹は換えられない。かつて好意をしめてくれたむかしの恩師、紛争のときさんざんやり合った相手もいた。が、学校側は恩讐をこえてこの新入り教師を迎えた。アンジュリエを受け入れるにあたって、恩師の哲学教授E・シャルルの取りなしがあつたようである。

アンジュリエは二十区に居をさだめると新しいしごとについた。こんどのしごとは、一時的なもので、かれは学士号リサインスを取りたいと思うようになっていた。そのためには、あきらめず、根気よくコツコツと勉強せねばならない。けれど一カ月ほどすると、生徒の課業や宿題のめんどろをみると、食堂でいっしょに食事をしたり、日曜日には教会へつれて行ったり、散歩に連れだしたりする復習教師のしごとがいやになってきた。あれはどうとましかつたイギリスの生活が、秋もふけて十一月ごろになると、なつかしく思えてきた。

ともあれ、アンジュリエは、元氣あふれる年ごろの二十代である。青春のまっ盛りである。ひとなみに街の中をうかれあるきたい年齢である。

その年のクリスマスには、カルチエラタン（パリの学生街）の友人らとパーティを計画し、女の子たちを呼んで大さわぎをした。誘いに乗ってやって来たのは、どちららかといえは尻軽の町娘である。飛び切り上等の美人はいなかった。ふつうのきりょうの明るい女性たちだった。多くは美校生、医学生、法学生といった連中の恋人だったり、愛人であった。そういったあまり品行のよくない、若い娘たちと乱痴気さわぎをやった。

そうかと思うと、目や耳をこやすためにコンサートに出かけたり、ルーブルの美術館に出入りする。アンジュリエは、人を愚かにする高校の助教のしごとに息苦しさや陰うつさを覚えながら暮らすうちに、ゆきあたりばったりの生活から脱け出て、のびのびとした、まともな生き方を考えるようになっていた。助教のしごとは、一時の雨宿りのために、軒にたたずんだだけのものにすぎなかった。が、知らず知らずのうちに知識が養

われ、力がついていた。

一八七二年四月、ソルボンヌにおいて文学士リサンス・エス・レトリクの試験をうけたら、運よく合格した。一八八〇年の学制改革まえの文学士のための試験は、それほどむずかしいものではなく、難易度はバカロレアの上のクラスでいどであつたらしい。ともあれアンジュリエは、おのれひとりの意志と力と運とで、この難関を突破した。そしてそのくさぐさの思いを日記にしろした。

——文学士リサンス・エになったぞ。とてもできないことをやったぞ。夢だとはかり思っていたことを。ソルボンヌの文学部に一あわ吹かせてやったぞ。

ラテン語で小論文を書いたのは四年ぶりだ。出来ばえはどうであつたろうか。フランス語の作文やギリシャ・ラテンの反訳も出題された。

第一次試験に合格したものは、五十名ちゅう十七名であつた。引きつづき、第二次の口頭試験をうける。古典語もフランス語も、まったく準備していない。が、きびしい口頭試験につきづきに答えたが、中には答弁のできぬものがあつた。そんなとき、もうよろしい君は、といった試験官のことが胸に突き刺さつた。いずれにせよ、アンジュリエは、晴れて文学士の称号をゆるされた。

バカンスがやってきた。一八七三年八月十三日、アンジュリエはブローニュにむかう。文学士となつてからののはじめての帰郷である。八月中旬から九月中旬すぎまで故郷ですごした。夏季休暇ちゅうの日常は、その日記が余すところなく伝えている。

——朝は九時ごろおきると、朝食をとる。そのあと散歩に出かける。知人と会ったりすることもあるが、たいていは一人でぶらぶら歩く。家から海岸まで一キロほどの距離である。大好な突堤の上や砂浜をあるく。天気がいよいときは、突堤のベンチに腰をおろし、海や港に出入りする船などを見てたのしむ。

またときには、明るい洋服を着、本を小脇にかかえ、パラソルをさした若いイギリス女性を流し目にみる。その若い娘さんたちは、対岸の国からバカンスに來た連中である。

イギリス女性に色目をつかうことにあきたら、海水浴である。アンジュリエは、およぎが得意であつた。よく沖合いまで泳いだ。お昼ちかくになると、ふたたび坂道を登りながら家路へといそぐ。家族そろって静かに食事をとるためである。

昼食がすむと、食堂にある後ろに反ったひじ掛けいすにすわり、葉巻をふかしたり、図書館から借りだした本をよんだりする。

三時半ごろになると、ふたたび外出する。行く先は浜辺や突堤である。ときたま叔母さんやマリーが海岸に來ていることがある。彼女たちは、折り畳みイスにすわると、日光浴をする。アンジュリエは、夕ぐれどき、ふたたびひと泳ぎする。夕食は、オーギュスト叔父の家でとることもあ

る。そのあと、サーカスや芝居をみることもある。帰宅する前に、月光に照らされた海をみるために、再び突堤に出かける。

夏休みがおわると、ルイ・ルグラン高校での陰うつな生活にもどらねばならない。かれはガレー船の囚人の「見張り番」のような仕事に、いや気がさし、そこから逃げだすことを真剣に考えるようになっていた。

文学士の称号をえたいま、つぎは英語教師になろうと決心した。ひとたび肚がきまると、公共教育省にイギリス留学のための休職願を提出した。かれは、英語教師になるために、まず中等教育教員適性証書を得、ついでもっとも難関の高等教育の「教授資格」^{アグレガسیون}を取得することを熱望していた。

役所から、ハカ月の休職を許可する、といった許可が届いたのは、一八七三年一月末のことだった。

アンジュリエが、イギリスの土をふむのはこれで三度目である。この霧の国でのかれの生活は、一八七三年二月から翌年の八月まで、およそ一年半にまで及んだ。勤め先は、例のジョン・ベリー氏の私立学校である。

いまは文学士の称号をもっているで、待遇も大きく変わった。食住を提供されるためにフランス語を教えることは、これまでと同じであるが、以前のように一日に五時間おしえなくてよく、朝九時から十一時まで二時間だけ子供たちの相手をすればよかった。残りの時間は、どう使ってもよく、勉強に当てることができた。

アンジュリエは、グリニッジに滞在ちゅう、大いに本をよみ、またさかに詩をつくった。ロンドンまでは一時間とかからぬから、たびたび出かける。好んで行くところはストランド街（ホテル、劇場、商店などが多い）にちかい、路地である。そこに古書店が軒をならべている。かれはその古本小路をぶらつくのが大好きであった。古本屋めぐりは、愛書家だけがひそかに享受するよろこびである。

かれは古書をあさるだけではない。週に一度は、ブルームズベリーの大英博物館の図書室にでかけ、本をよむ。本をよむときは、ゆっくりと読む。かならずペンを手にもち、感想などを手帳^{カルネ}に書き込む。

一八七四年四月の下旬——シェイクスピアの『ベニスの商人』をよみはじめる。読み進むにつれて、すっかり魅了されてしまう。この詩人は、じぶんのために語っている。しなやかさ、多様性、奥深さ、力強さ、どれひとつとってもすばらしい。

ついでベン・ジョンソン、ドライデン、スターン、ブラウニング、ディケンズ、などの作品へと読み進み、さらにギリシャ・ラテン文学の勉強も再開した。やがてかれは読書を通じて内省的になってゆく。フランスの芸術は、十分に心理的でない。われわれフランス人は、内部の情緒^{サンティイマン}をと

らえないで、表出された形ばかり捉らえる。これからは、“心理観察”をやらねばならない。

人間とその心理を知るには、人間そのものをよく観察する必要がある。バルザック、シェイクスピア、サン・シモンなどの著作は、人間を知るための宝庫である。かれらを研究のモデルとして学ばねばならない。

それだけでは駄目である。人と接し、人と恋をすることも大事であり、またいろいろ小説を読まねばならぬ。そして生あるものすべてに思いやりと共感、愛情をもたねばならない。

読書は、かれを空想の世界に運んでくれはしたけれど、じっさい外国でひとりで暮らしてみると、心細さやわびしさから逃れることはできない。毎日、うつうつとして日を送っているわけではないが、日曜日がくると、限りなくわびしくなる。学校のまわりは、静寂に閉ざされ、聞えてくるのは教会の鐘の音だけである。どんより曇った空は、春から夏にかけて、明るさをます。気持ちがすこしは晴れる時節である。

五月の末のある日曜日、かれは大きな編み上げ靴をはき、ステッキとシェイクスピアの本をたずさえて野原を歩いた。陽気はあたたかく、小道は乾いている。空には大きなちぎれ雲がぼっかり浮んでいる。ヒバリがさかんにさえずっている。ヒバリこそガリアの本物の鳥だ。

やがてアンジュリエは、Jという若い純粋な女性と知りあいになり、たびたび逢瀬^{おうち}をかさねるようになる。運命は皮肉なもので、二人の恋をじやまするかのように、男が帰国する日が近づいていた。

かれの心の中では、懊悩のみが大きくなりつつあった。一八七四年七月二日——二人はハンプトンコート（ロンドンの南郊）にピクニックに出かけ、夜帰路につくとき、馬車にのった。ふたりは無言のまま、手をにぎり合っていた。七月二十日にも会い、手をとりあっていなかの小道を歩いた。そしてその年の八月五日、かれはこの娘にさいごの別れを告げた。Jは、すすり鳴きながら、かれのもとを去って行った。……

アンジュリエは、いつの間にか二十六歳になっていた。かれはしみじみと自己を省みる。おれはいままで何をしてきたか。今後、どう生きるべきか。顧みると恥しいことばかりやってきた。おれはよこれている。悪に手を借してきた。これからは、ちゃんとした男にならねばならぬ。母や友人たちにとって、恥しくない人間にならねばならぬ（一八七四年六月三十日付日記）。

*

アンジュリエは、帰国した。今回は故郷のブローニュに立ち帰らず、パリに直行した。一八七四年八月七日（金）の夜、パリに着いた。

翌週の月曜日、あわただしく中等の英語教師の適性試験をうけた。初日は英文仏訳のテスト。『エディンバラ評論』から抜いた「シェイクスピアの芝居に現れた自然を歌った詩について」を、フランス語に訳す問題。二日目は、仏文英訳。筆記試験を通り、つぎは口頭試問があった。高校の諸学級で教える英文法を実演してみせたり、慣用表現、同義語、韻律法などについての説明をおこなった。試験の結果が発表になった。フタをあけてみたら、思いもよらず、アンジュリエは一番で合格していた。

英語教師の適性試験に通ったアンジュリエは、願い出さえすれば、田舎の高校の先生になることは造作もなかった。が、都会での暮らしが板についてみると、田舎なんかに行きたくなかった。かれはパリの暮らしが気に入っていた。

パリはにぎやかで、たのしく、粋な町である。おまけに女性も美しいし、洗練されていて、上品である。かたいなかに行き、その教師として一生を送りたくはなかった。

じつはかれは、もう一つ上の国家試験——教授資格——に挑戦したいと思っていた。そこで有給休職の期限がきた一八七四年九月三十日、パリのどこかの高校に代用教員の口がないものか搜したら、シャルマーニュ高校に勤め口が見つかった。かくしてかれは、その年の秋から正教授として週八時間の英語の授業をうけもつことになった。

かれは余暇をみいだしては、英文学やギリシャ・ラテンの文学作品を読みふけた。とくにイギリス以来の習慣で、出校するまえの二時間をギリシャ語を勉強することに当てた。そして本をよむときは、いつもペンを握っていた。

かれはアグレガシヨンの受験勉強をおさおさ怠ることはなかったが、一八七五年度の受験を見送ることにし、一八七六年度を目ざすことにした。シャルマーニュ高校における仕事になれていなかったからである。

一八七六年度のアグレガシヨンの試験は、八月六日から二十六日にかけておこなわれた。

試験問題は、つぎのようなものであった。

英文仏訳……………ポーブがジョン・アーバスノット（一六六七—一七三五、スコットランドの医師、作家）に宛てて出した書簡。

仏文英訳……………レス枢機卿のラ・ロシュフコーの人物批評。

フランス語論文……………ベーコンの『隨筆』に現われた文体について。



ロバート・バーンズの研究をしていたころのアンジュリエ（30歳）。

英語論文……………《Nothing is so difficult as a beginning》

《In poetry, unless perhaps the end》といったバイロンの考えについてくわしく述べ、かつ論評せよ。

この筆記試験の合格者は、七名であった。かれは一番で及第した。数日後、こんどは口頭試験がはじまった。

シェイクスピアの『リア王』の一節とベーコンの『随筆』のなかの一節についての評^{エッセイ}積^{リカク}。この試験では、よくない印象を試験官にあたえた。その翌日は、文法問題の試験。関係代名詞について英語で説明する問題。この方もあまりよくできなかった。試験官から間違いの訂正をうけた。週末にはフランス語の試験。「シェイクスピアの女性」について、皆のまえで説くのである。この方はうまく説明でき、試験官たちをよろこばせることができた。

フタをあげたら、三名合格しており、アンジュリエは最下位であった。けれどかれは晴れてアグレガスヨンに合格したのである。かれは地方へ行けば、新たな地位につくこともできたが、シャルマーニュ高校にとどまることにした。

かれは相変わらず、英文学の本をいろいろ読みふける。そして読後感を手帳に書きこむ。ラム、ポープ、ジョージ・エリオットの著作など、何んでもよむ。図書館のギリシャ文献学の講義にも出席するし、博物館、美術館、オデオン座にも出入りする。交友の輪もひろがり、芸術家たちともつきあう。

一八七六年のはじめ、かれはヴァヴァン街にちかいブレア街六番地の下宿屋に住んでいたが、恋にうき身をやつす女性もたくさん現われた。

一八七七年の春——隣りの女と知り合いになる。かれの注意を引いた女は、気品ある女性だった。投げキスをしたら、にっこりほえんだ。

「ギリシャ語。となりの女にキスを送る。授業。カフェ。また授業を。またカフェに行く」（五月四日（土）付、日記）。

一週間ほどして、アンジュリエは「となりの女」とクラマールの森に散策に出かけた。ふたりは草のうえにすわる。かれは本をよみ出すと、女はかぎ針で編物をする。

パリの町女とたわむれながら暮らすうちに、グリニッジで恋仲になったJのことを想いだす。彼女からは便りがくるが、返事を書かずに放つてある。かれはふたたび内省的になる。うつろな暮らし。疲れてきた。もういちど、わが身に清新の気を吹き込まねばならない。故郷への帰還は、かれにとって元気をとりもどす唯一の源泉であった。

古里のブローニュに帰って、母に会おう。かれは休暇のたび、なるべく田舎に帰るようにした。なじみの古い坂道を登って我が家へと急ぐ。なつかしい街路とその脇の古い家。多くの顔なじみとも会う。母はうれし涙を流しながら息子を家に迎え入れる。ときには、母がすでに床についている深夜に、こっそり帰宅することがあった。

——夜十一時に帰宅する。母は寝ている。何か食物をさがす。腹ぺこだから。何もない。火をおこし、卵を三つ割って、オムレットをつくる。上できた。母をおこさずに、床につく。けさフライパン、コップ、卵のからなどを見たときの、母の大きなおどろきようといったら！（一八七七年九月六日付、日記）。

田舎に帰ってもアンジュリエは、いつも孤独を愛し、孤独を友とする。夜、突堤へ出かける。あたりはすでに漆黒のやみだ。波が間断なく、海岸を洗っている。ときどき灯台がその光を静かに投げかける。明りをつけた船が沖合いを通過してゆく。……

またあるときは、ボートをこいでリアーヌ川の川上のほうに行く。日曜日になると、山野を跋涉して、小さな村の教会に出かけ、坊さんのお説教をきく。僧侶は見えない顔を会衆のなかにみつけ、びっくりしていた。またときには、子供のころいっしょに遊んだり、駆けっこをした仲間——いまではもう一人前の女になっているが——こちらの姿をみかけると恥かしそうにする。

一八七八年の夏、田舎に帰ったとき、めでたい知らせと接した。妹のマリー・アンジュリエが、マルセル・ロランジュという青年と婚約したという。

休暇がおわると、ふたたび陰うつなパリへもどらねばならない。あのむっと息がつまるような高校の教室へ。ほこりだらけの大通へ。ともかく、元気を出してやるしかない。

*

アンジュリエは、一八七七年ごろより博士論文のテーマを捜していた。が、ロバート・バーンズ（一七五九〜九六）が、じぶんと共通点があることから、このスコットランド詩人を学位論文の対象にすることにした。そもそもこの北国の詩人に関心をもつようになったきっかけは何であったのか、わからないが、一八六九年——二十一歳の暮——グリニッジのイースト・ハウス校の教員および生徒一同から、“フランス語の先生”にと、バーンズ全集を贈られたことがあった。

が、何がかれをバーンズにむかわせたものかわからない。

一八七七年五月中ごろ、アンジュリエはこの詩人の伝記をよみ、その天才ぶりに感嘆している。また同じ月の十八日にソルボンヌのアルフレッド・ジャン・フランソワ・メジエール教授（一八二六〜一九一五、文芸批評家）を訪れ、バーンズを学位論文の対象にしたい、という、それはけっこうなテーマだね、といった。運命のさいは投げられた！

メジエール教授のことばに勇気づけられたアンジュリエは、以後このスコットランド詩人の魂を徹底的によみがえらせようとする。かれはバーンズ研究にむかって周到に構想すると、その準備にとりかかった。

当時パリではバーンズに関するじゅうぶんなる文献に接しえなかった。またあっても貧弱であった。バーンズその人をじゅうぶん知るには、その生れた国や社会についての知識やイギリス文学全体の教養は欠かせないものであった。そのため、かれは改めて留学を願い出たところ、一八七八年十一月から翌年の九月末まで奨学金をもらうことができた。そして万節祭（十一月一日）の前日——シャルマーニュ高校に別れをつけ、故郷のブローニュにむかった。

オーギュスト叔父は、むすこを亡くしてから、ポールペール街の大きな家で暮らしていた。アンジュリエは今回は母の家でやさしいならず、この叔父の家で数週間すごし、十二月十一日にイギリスにむかった。折しも雪がふっていた……。

イギリスに着くと、首都は相変らずにぎやかであり、活気に満ちていた。かれはルイシャム（テムズ川南岸の住宅地）に住む友人の家にすこしの間やさしいになった。グリニッジにもどったのは、その月の十三日のことだった。イースト・ハウス校のままで一瞬立ちどまる。この学校ですごした日々が想いだされる。むかしの恋人Jのことが、ふと心をよぎる。その家の前を通りすぎたい衝動にかられる。

グリニッジに着いた翌週の土曜日（十二月二十一日）、かれはJが住むロチェスター（イングランド南東部の町）にむかった。Jは数ヵ月まえに船舶仲買人と結婚したという。暗くなるのを待って、彼女が住む家のまわりをうろついた。

グリニッジからロンドンまで、汽車を利用すれば、一時間ほどの行程であるが、運賃は安くない。かれは大英博物館の図書室に通うのが目的であるから、なるべくそこに近いところに住みたいと思った。

友人にいろいろ下宿を捜してもらったところ、ノッティングヒルのランドブローック・グローブ四十一番地に下宿屋がみつかり、年暮れの二十七日に引っ越した。賄い付の下宿屋である。さまざまの階級の男女が住んでいた。

——夕食がすむと、女性はラウンジに行く。男はパイプをふかしたり、女性の仲間に入ろうとする。植民地のインドから来たというD夫人という、若い未亡人がいて、そのかたわらにすわったとき、かれはいっぺんにのぼせあがってしまった。

その女性は、褐色の髪をしている。目鼻立ちのすっきりとした、なかなかの美人である。頭はよさそうであった。声が大きく、早口であった。男性の気を引きたがる、あだっばい女である。

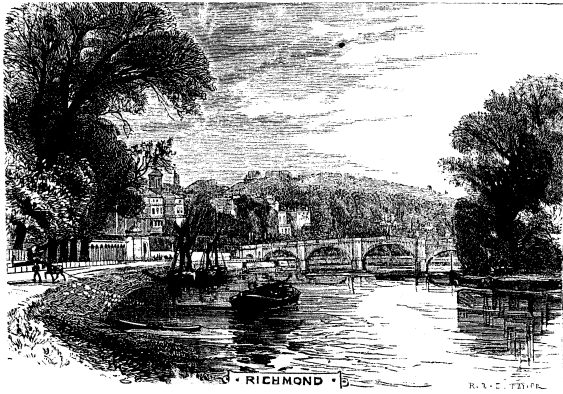
この未亡人とは、チームズ川がみえる居酒屋でいっしょに食事をしたり、散歩に出かけたこともあったが、やがて相手の女性の心の持ち方がふつうでないことがわかり、かれのほうから遠ざかるようになった。

アンジュリエは、女にうつつを抜かしている暇はなかった。せっかくイギリス留学の機会をえたのだから、しっかり勉強して成果をあげる必要がある。いままでおれは何をしてきたか。大したことはしていないのである。うんと勉強し、どんどん物を書かねばならない。ああ青春は足早に過ぎてゆく。もうとくに三十をすぎた。

アンジュリエは、勉強家であった。一日六時間、大英博物館の図書室にかよい、午前十時から午後四時まで、もうれつに勉強する。そして早朝の二時間は、つねにギリシャ語の勉強にあてた。ギリシャ文学の目ぼしい作品は、すべて読むつもりであったから。

かれはバーンズを研究の中心にすると、その周辺から攻めることにし、まわりにいるイギリス作家をむさぼるように読んでゆく。本を読むことだけに没頭せず、ときに頭をやすめるために、自由を謳歌する。文学研究の補助として、イギリス人とその社会を究めようとする。

かれは本の世界から飛び出ると、ロンドンの街中をあちこち歩きまわる。そしてイギリス人をよく観察し、よく研究しようとする。かれはイギリス社会をおっている空気をはで感じ、そこで生を営んでいるさまざまな階級のひとびとをじっくり見すえる。人間や社会だけを観察するの



リッチモンドの図。〔筆者蔵〕

ではない。ときには、劇場や美術館に出かける。さらに科学の教えるうけるために、学術研究機関の講演会に顔をだす。いやそればかりではない。労働者の集会にも出かける。

夏になった。大英博物館の図書室でようと思っていた書物は、あらかたよみおえた。それはいわばバーンズ研究に入るまえの下準備でもあった。つぎは第二段階に入らねばならない。

そのためには、バーンズと関わりがある土地を余すことなく訪れ、じかに見てみたい。それをおこなうには給費が切れる九月末までにやっておかねばならぬ。折からアンジュリエは、胸いっぱい新鮮な空気を吸い、解放感にひたりたかった。

頭の中で描いた計画では、ロンドンからエディンバラまで行くのだが、その行程はなるべくリュックサックを肩にして、徒歩でいきたい。たまに旧友のウージェーヌ・デュゲがイギリスに来ていたので、その者を誘って、いっしょに出かけることにした。旅程はこうである。

まずテムズ川の流域からオクスフォードまで出る。ついで、シェイクスピアの生誕地ストラットフォード・オン・エーヴォン（イングランド中部）を訪れる。そこから中部の都市——バーミンガム、リバープール、マンチェスターなどを訪れる。さいごは湖水地方の市場町ケジックに出る。ここでフランスから来た友人と別れる。

アンジュリエは、旅立つまえに周到な準備をした。

一八七九年六月末——アンジュリエは、サレー州の州都キングストンアポンテムズのグリフィス・ホテルに滞在した。ここがかれの旅行の発足点である。徒歩で^{かち}イングランドやスコットランドを踏破しようというのは、今回がはじめての企てである。六月二十四日、まずキュー（ロンドン西郊）まで汽車にのる。その居酒屋で昼食をとったのち、リッチモンド、トウィッケナムをへて、引き船道をキングストンまでゆく。

これから毎日、二ヵ月のあいだかれは日々の出来事、旅の印象や反応などを、克明に日記につけてゆく。かれはこまやかな観察者であり、文字を使う画家でもある。その筆は絵画的な正確さをもって

いる。

二十五日、朝六時に宿をでて、ハンプトンコート（ロンドン西郊）にむかう。雨がふりだし、どぶネズミのようになる。夜になるころ、ステイズ（ロンドン北西部にある古い町）に着く。翌日も天気はわるい。空は青灰色をしている。細雨がふりだした。十時ごろ、ウィンザーに着く。公園の番人から、物ごいか浮浪者とまちがわれそうになったので、ポケットから本を取りだし、旅行者をよそおった。

雨がますますはげしくなってきたので、オクスフォード（イングランド中部、ロンドンの西九二キロ）まで汽車にのることにした。

オクスフォードには、一週間滞在した。この間に街のすみずみまで、くまなく歩きじっくり観察した。この学都にあるものは、人家や商店街にくわえて学寮、小聖堂、図書館、博物館などである。神聖にして、静寂な古い町である。いささか冷やかな感じのする、ひっそりとした学生街である。

アンジュリエが得たこの町の第一印象は、安寧と静けさと快適さに満ちた街のそれであった。

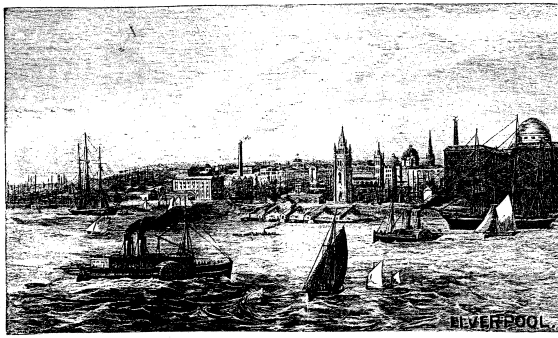
六月二十七日（金）——昼食をとったのち、コルプス・クリスティ学寮のまわりを一周する。そのあと大通り^{ハイストリート}をくだり、モードリン学寮の塔や庭に感嘆する。長い壁にそって歩いているうちに、町の外に出てしまった。

夕日が沈みかけている。四角い、ずんぐりとした小さな教会がある。そこから鐘の音がきこえてくる。そのそばにあるのは、屋根の上がった古い人家であるが、どれもキズタでおおわれている。空は灰色だ。いまでも沈もうとする太陽は、さいごの淡い光で教会や人家をやさしくつつもうとしている。やがてオルガンの音にまじって、合唱の声がきこえてきた。

町のまわりには、緑の野がひろがり、ニレの木の丘がずっと遠くまで広がっている。オクスフォードには七月二日まで滞在し、この日ストラットフォード^{スト}・オン^ン・エーヴォン（イングランド中部、ロンドンの北西一六四キロ）にむかった。

汽車は、二人のフランス人をのせて、一路シェイクスピアの生地へとほこぶ。アンジュリエは、車窓にみる青々としたウォリックシャー州の景色を細かく観察する。汽車は、アデンの森の静かな葉むらの中を横切ってゆく。すばらしい森だ。これこそイギリスの自然そのものの表象だろうか。そうでなければ、イギリスの自然美そのものの粹ではないかと、ふと思った。

町に着くと、赤馬亭^{レッド・ホースイン}に旅装をといた。空の様子がすこし変である。空の表情がたえず変わる。雲と太陽がしょっちゅううごいている。ときどきにわか雨が降ってくる。そのあとふたたびやわらかい陽光が天から降りそそぐ。



リバプールの図。〔筆者蔵〕

アンジュリエらは、エリザベス朝の雰囲気があったよう田舎町を熱心な巡礼者のように歩きまわる。シェイクスピアの生家があるヘンレー街、墓地がある聖トリニティ教会を訪れる。

シェイクスピアの墓のうえに、だれが置いて行ったのかわからないが、カーネーションやゼラニウム、わすれなぐさ勿忘草などの花が見られる。シェイクスピアが、そうしたやさしい心をもった人々の心のなかで生きているあかしであろう。灰色のやわらかな日射しの中、エーヴォン川が静かに流れている。ときどき小魚がキラキラ飛びはねる。

シェイクスピアも晩年、こういったのんびりとした故郷の風景を愛したことだろう。一日、町の外に足をのばす。丘陵や牧草地があり、ところどころに小さな森がある。そこに積みワラがいくつも置かれている。

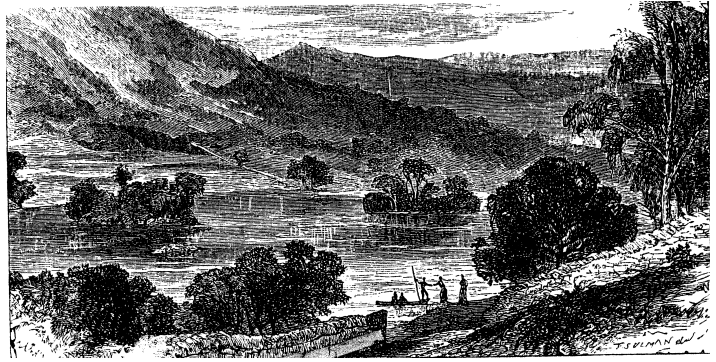
七月六日、アンジュリエたちはウォリック（イングランド中部、エーヴォン川沿いの町、バーミンガムの南東四十キロ）にむかい、そこで一泊したのち、徒歩でコベントリ（ロンドンの北西一五一キロ、工業都市）まで行き、そこから汽車にのりバーミンガムにむかった。

バーミンガム（イングランド中部、イギリス第二の都市、ロンドンの北西一七七キロ）は、それまでにすごしたうらかな田園とは雲泥の差がある、醜悪な町であった。ここは工業都市であり、工場のエントツからたえず吐き出ている煙が天をおおっていた。霧が街をつつみ、ときに雨がしとしと降る。通行くひとの顔を見ると、表情はかたく、みにくい。そして態度がとげとげしい。

下層階級のひとびとは、青白い顔をし、やつれている。若い女工は、木綿のうすよごれた服を着、腕をむきだしにしている。子供はボロを着、はだしのままぬかるみを歩いている。

ついでリバプール（イングランド北部の港町、ロンドンの北西三二二キロ）に着いた。この町はマージール川を港として使っているが、右岸と街区を時間をかけて歩く。歩くことにあきると、船に乗り、マージール川をくだる。どこに行っても人々の貧しい様子に胸うたれる。

つぎに訪れたのは、「綿花の町マンチェスター」（イングランド西北部、ロンドンの北西三〇四キロ）である。この街に着いたのは、七月十六日のことである。ここも陰気で単調な町である。陽が沈み夜になったとき、フランス領事館の若い館員に案内されて、人で混雑した場末に出かけた。が、そこで見聞したも



ウィンダーミア湖の図。〔筆者蔵〕

のは、酔っぱらい、けんか、ののしりの言葉であり、おしわけ、かけわけながら街路を進むしかなかった。この街のすべてに嫌悪感をもった。

マンチェスターでは、町のたたずまいと、そこで暮らすひとびとの暮らしぶりを見て、気がめいったが、湖水地方（イングランド北西部、直径五十キロほどの円形の地域に十五の湖がある）に来てみると、憂いがすっかり晴れるような気分になった。にこやかに笑いかけている湖水の風景が、目のまえにあったからである。

なだらかに起伏する緑の丘陵と静かな湖面が旅人の心をなごませる。青々とした緑地に、大小の湖や湖盆が点在している。ここは湖畔派とよばれたワーズワース、コールリッジ、サウジーらにゆかりのある土地である。

アンジュリエは、旅の連れをケンダル、ウィンダーミア、アンブルサイド、ライダル・マウント、コンニストンなどに連れてゆく。ふたりは夏休みに入った小学生のような、うきうきとした気分、小山をふみこえ、水を渡り、森を通り、ときにボートをこいだりして、旅をつづける。田舎の小道をすすんでゆくと、ときどき小さな教会や学校がある村に出る。ときに道にまよい、農夫をつかまえては、道をたずねる。やがて日が傾くころ、宿屋に泊まる。

七月二十九日——ケズウィックに着いた。アンジュリエは、予定どおり、ここで友人と別れる。連れはここからまっすぐロンドンに出、そこからパリに帰るのだ。しかし、アンジュリエの旅は、まだ終わっていない。かれはさらに北のスコットランドにゆかねばならない。

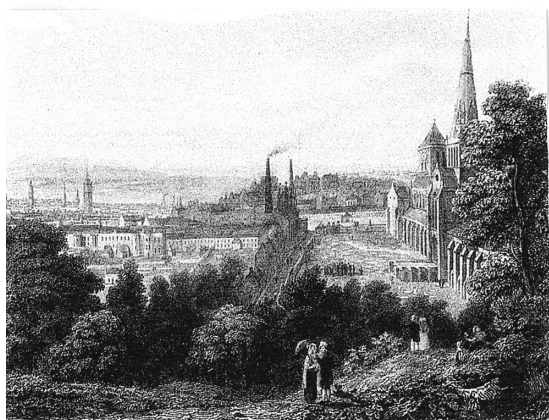
八月四日、アンジュリエは汽車にのり、カーライルにむかった。カーライル（イングランド北部、ニューカッスルの西九十七キロ、湖水地方への入口）は、古いだけを取りえの何の変哲もない町である。そこで一晚泊って、翌朝エディンバラにむかうことにした。

エディンバラは、“北のアテネ”の異称があり、十五世紀以来スコットランドの首都である。一三五メートルの小山のうえに城があることから、この別名で呼ばれたのであろう。旧市街は丘陵の斜面に、新市街は目抜きプリンス街の北側にある。

アンジュリエは、駅の地下道を通り表に出たとき、霧に迎えられた。霧の中にうすばんやりと見えたのは、記念建造物や灰色や墨をかけたよう



エディンバラの島瞰図。〔筆者蔵〕



グラスゴーの図。〔筆者蔵〕

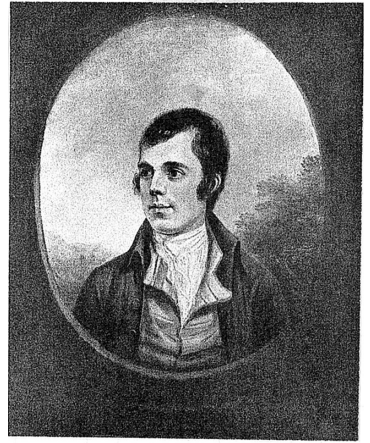
に黒々とした家である。町の建物は、ゴシックとルネッサンス式がごっちゃになっている。かれはこの町に八月いっぱい滞在し、その間にこの街を徹底的に知りつくそうとおもった。

そのため、ホーリーイルッドハウス宮殿（国王のスコットランドにおける居城）を皮切りに、十二世紀に建てられたというメルローズの古い教会、アボッツフォードのウォルター・スコットの邸宅などを見学した。ついでリュックサックを肩にせおい、北スコットランドの町ーアバディーン、セントアンドルーズ、スターリング、カランダー、オーバン、フォートウィリアム、インヴァネスなどを訪れ、九月はじめにエディバラに戻ってきた。

そして十日ほど首都で過したのち、九月十三日（土）今回の旅の主目的である「バーンズの国」を訪れることにした。ひとまずグラスゴー（スコットランド第二の町、ロンドンの北西六五五キロ）を起点に、バーンズが生まれた所、かれが働き、汗を流した所、かれが歩いた所、かれが訪れたところ、ともかくバーンズに関わりがあるところなら、どこでも訪れるつもりだ。

かれは一つずつ、バーンズの跡をたどってゆく。まずエアーシア（スコットランド西南部の旧州）におもむく。そこは大西洋に面した台地のうえにある農業の国である。多くのスコットランドの土地がそうであるように、荒れはてた、さみしい土地である。農場と積みわらと泥炭の国である。

アンジュリエは、スコットランドの濃霧のなかで生きた、百姓詩人バーンズの放浪生活を追



ロバート・バーンズの肖像画

体験しようとする。エアリーの町（グラスゴウの南西四十一キロ、クライド湾東岸に位置）の南二マイル——アロウェイ村にある粘土とわら¹⁶でできているバーンズの粗末な生家を訪ねた。一七五九年一月二十五日の嵐の晩——バーンズは、その家で生まれた。

ついでそこからさほど遠くはないマウント・オリファントの村を訪れる。一家が懸命に生活苦とたたかい、貧しさにあえいだ所である。そしてそこからロッホリアやアーヴィンの町まで足をのばす。バーンズ一家は、この町にいたとき、借金取りに悩まされ、やがてそこをこっそり逃げ出しモスギールの農場に難をさけねばならなかった。バーンズがたった一度だけ幸福を知ったところがこの農場であり、またみのり豊かな青春の四カ年を送った土地でもある。

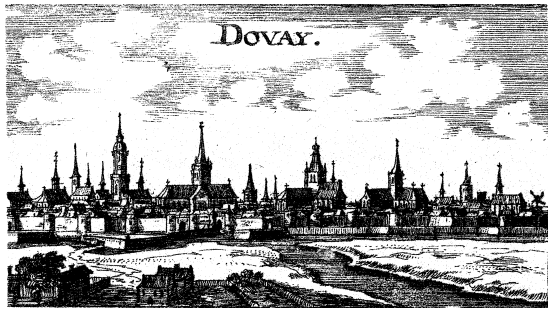
さらにエリスランドの農場——ここは破産し、永別をつげた所。ついでアンジュリエの足は、ダンフリース（グラスゴウの南南東一三〇キロ、ニス川河口より十三キロ上流沿岸の町）にむかう。ここはバーンズが、悲嘆と窮乏と破滅の人生を送った所。このいなか町の陰気くさいアパートの一室でくらすバーンズに、思いをはせる。バーンズは、この町の狭い、陰気くさい絶望という監獄のなかで、さいこの四年半をすごす。

一七九六年七月二十一日バーンズは、ダンフリースで亡くなる。享年三十七歳であった。

アンジュリエは、じっくり見てきたバーンズと関わりがある土地や建物について克明に生き生きと手帳にメモし、学位論文を書くときに、それらをあまざず利用した。

九月末になった。そろそろロンドンに戻らねばならない。が、あわててもどることはない。この機会に見たい町もある。中世の町の名ごりをとどめる、狭い街路と城郭のヨークの町（イングランド北部、ロンドンの北二九三キロ）に着いたのは、九月二十二日のことだった。

そこから翌日にはリンカーン（イングランド中部の古い町）に出、壮大な教会を見、二十四日にはピーターバラ（ロンドンの北八十七キロ、ニーン川沿岸の町）にいたり、さらに十一世紀に創建された大聖堂で有名なイーリー（イングランド東部）やケンブリッジなどを経て、ロンドンに戻ったのは、一八七九年九月二十九日のことである。すでにイングランド、スコットランドの周遊旅行を開始して、約三ヵ月になろうとしていた。この間にできるだけ、ノートを取り、資料をあつめそれらで旅行カバンをいっぱいになると、ひとまず故郷のブローニーニュに帰った。ついでパリにもどってきたのは十月十日のことだった。



中世のドゥーエーの町。〔筆者蔵〕

研究旅行のための給費は、九月三十日で切れていた。が、シャルマーニュ高校へは戻らず、ふたたび一カ年間の研修休暇をねがい出たところ、許可になった。パリにおけるかれの住所は、まえに住んでいたブレア街六番地である。かれは学位論文の勉強に熱心にはげむ。

すでに三十歳になっていたアンジュリエの風貌についてスケッチしておこう。——かれの顔は、どちらかといえば四角いほうである。ひたいは高く、まっすぐである。頭髮はみじかく、眉は濃く、目はアジア人のように、すこし切れ長であり、細い。目はぎらついていて、するどい。自信と皮肉とが感じられる目である。鼻は大きいほうである。首は太くてたくましく、体ぜんたいはがっしりしており、生気がみなぎっていた。

*

パリにもどったアンジュリエは、高校教師になることをやめ、さらにその上の学校——地方の大学に職を求めようとしたが、なかなかおもしろくなかった。生活があるから、やむなくパリの高校でふたたび教鞭をとった。が、待ちあぐねたかいがあって、かれのもとに吉報が届いた。一八八一年一月一日付をもって、ドゥーエー（フランス北部、ノール県西部の町。パリの北北東一九五キロ、スカルプ川沿岸に位置）の大学のメートルドゥ・コンフラン教授に任命するものだった。このときかれは三十三歳であった。

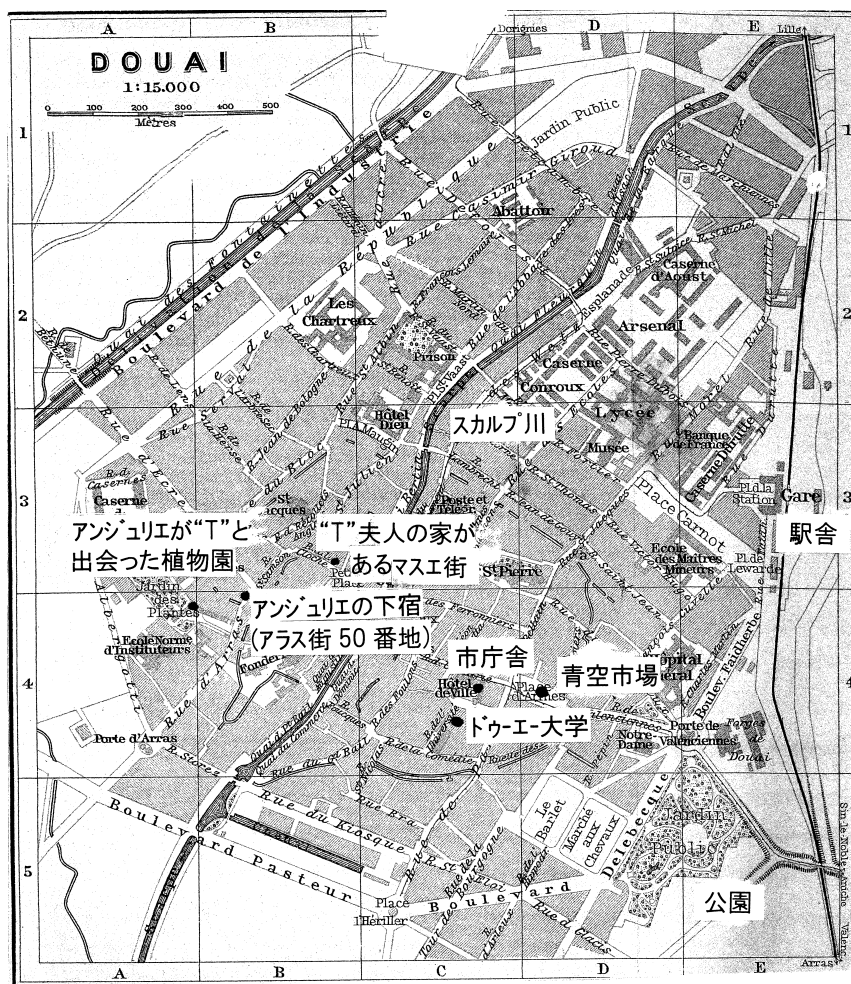
その年の二月はじめに、ドゥーエーにやってきた。以後かれは、一八八八年まで七年間フランドルのこの田舎町で暮らすのである。

ドゥーエーは、古代からの町である。もともとローマ人がここに砦を築いたのを起源とするようだ。町の歴史をたどると、イギリス人、フラマン人、スペイン人、ドイツ人ら異民族による包囲攻撃と占領がたえず、十三世紀以来自由都市となり、十八世紀にフランス領となった。十九世紀に炭田開発がさかになると、工業の町となった。

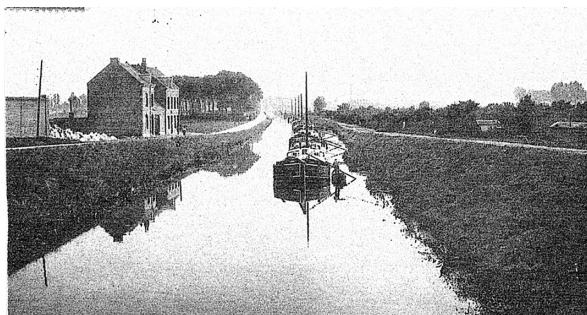
アンジュリエがいたころの町の人口は、数万ほどである。市街はスカルプ川をはさんで広がっている。町の静かな雰囲気は、いまでも残っている。スカルプ川の水はおだやかによどみ、その両岸に立ちならぶ家の影をおとしている。郊外に行けば、のどかな田園風景がみられる。

いまは昔ほどではないが、河岸のところに菩提樹がみられる。アンジュリエは、この古い町にきた当

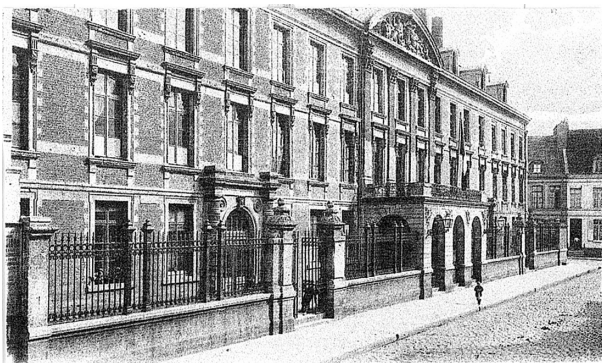
初、その魅力に気づかなかった。が、日を重ねるにつれて、だんだん街の魅力にひかれるようになる。ふぞろいのはばの狭い街路。そこに丸石が敷いてある。教会もいくつもあるし、美術館もある。町でいちばん人目をひく建物といえば、十五世紀に創られたというゴシック様式の市役所である。そのゴシックの鐘楼は高さが一三〇フィートもあって、町の名物になっている。町の第一印象は、ベルギーのブリュージュやガンのような“死の町”“幻想の町”のイメージであった。ことに秋になると、いっそうわびしい思いをした。空は灰色だし、もの悲しい。陽の射さない日



ドゥーエーの地図 (1910 年代)



ドゥーエーの郊外とスカルプ川。〔筆者蔵〕



ドゥーエー大学文学部（のちの「農工業学校」）。〔筆者蔵〕



1882年、ドゥーエー大学文学部
助教授時代のアンジュリエ（34歳）。

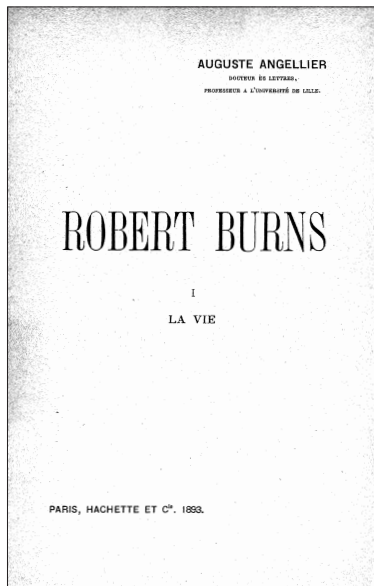
が毎日つづく。町はすっぽりと霧に包まれる。枯葉をふみながら歩くうちに、憂いに沈んでゆく。ここでの暮らしは、どんよりと曇った天気とおなじであり、味気なく、単調であり、退屈そのものであった。かれはそういった物憂い、いらだちの生活を払拭するかにようにバーンス研究に熱中した。

ドゥーエーに来て早々、アンジュリエは町はずれに下宿を見つける。アラス街五十番地にあるデュブル未亡人の家である。いまこの家はないが、当時は馬車などが出入りできるほど大きな家であった。下宿人には、アンジュリエのほか、画家や庭師などがいた。絵描きは、地下室をしごと部屋に使っていた。⁽¹⁷⁾

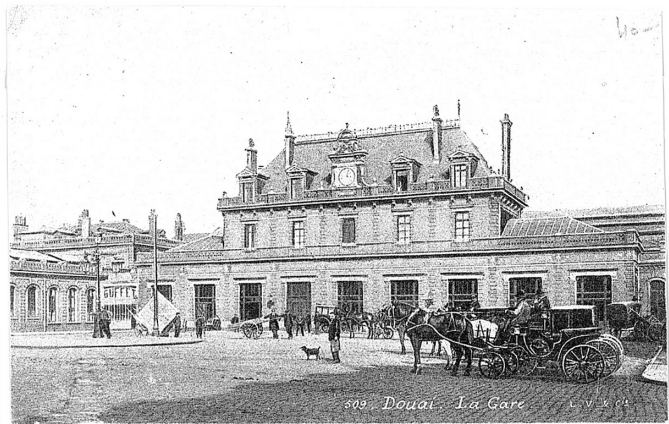
ここがかれが若い学生に英語英文学の初歩をおしえたドゥーエー大学文学部についてふれねばならぬ。文学部は一八二六年にいったん廃止になったが、一八五四年に政令により復活した。校舎は市役所の目と鼻のさき——大学街にあった。学舎はレンガと石を用いた宏壮な建物であり、のちに「レコルデザンデムストリエアグリコル農工業学校」と名称を変えるが、いまもある。

大学ははじめ英語英文学などに、大して重きを置いていなかった。当時、文学部ぜんたいの学生数は、五、六十名ほどであった。アンジュリエの受講生もけっして多いとはいえなかったが、かれの評判が広まり、また教え子のなかから資格試験の合格者が出るにつれて、だんだん学生がふえていった。

アンジュリエのこの学校での主なしごとは、英語英文学をおしえること、学生答案（英文や仏文の翻訳練習、論文など）を添削したり、バカロレアの受験生たちの答案を採点することである。それはかれにとって、どれも退屈なしごとであった。倦怠けんたいともものぐさと将来にたいする漠とした不安を感じる日が毎日つづく。そしてこの田舎町では、世間のつき合いもあり、それがじつにわずらわしい。文学部や法学部の同僚教師からしょっちゅう招待が舞い込む。世間の取りざたを気にせねばならぬ。さもしさと悪意と陋劣ろうれつさに満ちた話題。もううんざりだ。どこか遠い所に行きたいくらいだ。ときどき気晴らに、ドゥーエー



『ロバート・バーンズ研究』（第一巻）。
〔筆者蔵〕



当時のドゥーエーの駅舎。〔筆者蔵〕

の駅舎の軽食堂に出かけ、そこで食事をする。

ヨーロッパの町は、日曜日となると、いったいに静かであるが、ここドゥーエーもしんとしたもののさびしかった。教会の鐘の音だけが、ときどきその静寂をやぶる。空はくらく、通りには人影はない。ときどきもったいをつけた住民の姿をみかけるが、教会にでもゆくのだろう。

かれのバーンズ研究は、心の悩みや焦燥とはべつに着実に進行していた。ドゥーエーに滞在ちゅうも研究の必要上、いくどか海をわたりイギリス、スコットランドに赴いた。大英博物館の図書室で文献をあさり、一八八四年の三月から四月にかけて、スコットランドでふたたびバーンズの遺跡をたずねた。かれはうまずたゆまず研究をつづける。まじめな労働者が、時間がじゅうぶんあることを知っているかのように、ゆっくりと仕事をする。

苦心のかいあって、ついに『ロバート・バーンズ研究』は完成した。一八八六年の秋、内閣をこうために第一稿がソルボンヌの事務局に送られた。それを読み、報告書をかく役は、英文学助教授のアレクサンドル・ベルジャムである。この年、アンジュリエは三十八歳であった。

翌一八八七年三月ごろ、ベルジャムの承認をえ、受理される見通しが立った。が、一八九三年二月におこなわれた公開の口述審査をうけるまで、さらに六年ちかい歳月が流れてゆく。十五年の心血を注いで書きあげた『ロバート・バーンズ研究』（上下の二巻）は、一八九三年に印刷をおえて、パリのアシェット書店から刊行された。淡い灰緑色の二巻本である。

第一巻……『ロバート・バーンズ 伝記』 25.5 cm × 16.5 cm、五七四頁。
第二巻……『ロバート・バーンズ 作品』 25.5 cm × 16.5 cm、四三三頁。

目次によって、中味を瞥見してみよう。

〔第一巻〕——献呈の辞 序文 第一部 伝記

第一章 アロウエーとマウント・オリファント（一七五九～一七七七）

一 アロウエー 幼年時代

二 マウント・オリファント 教育 青春

第二章 ロッホリア（一七七七～一七八四）

一 青春 初恋

二 アーヴィン滞在

三 見習期間 はじめての過ち 父の死

第三章 モスジールとモーチライン（一七八四年三月～一七八六年十一月まで）

一 僧侶との対立

二 詩の流れ 幻影

三 心のあらし ジェイン・アーマー メアリー・キャンベル

四 突然の名声 エディンバラにむかう

第四章 エディンバラ（一七八六年十一月～一七八八年二月まで）

一七八六年のエディンバラ

一七八六年から八七年の冬——

エディンバラの社交界におけるバーンズ 勝利 不和 エディンバラの飲み屋

二 一七八七年の夏――

ボーダーズ州（スコットランド南部の州）への旅からもどり、モスギールに滞在する――エディンバラにもどる
スコットランド高地を旅する――歴史的、愛国的の印象

三 一七八七年から八八年の冬

不安 クラリンダのエピソード どうしようもなくエディンバラを立ちのく 結婚

第五章 エリスランド（一七八八年六月―一七九一年十一月）

一 エリスランドに身を落ちつける 固い決意

二 物品税 犠牲 疲労

三 悲惨 悲しみ 過ち

四 深刻なくらし 作品

五 農場を出る

第五章 ダンフリーズ（一七九一年十二月―一七九六年七月まで）

一 クラリンダのエピソードの結末

二 政治的な意見 気苦労

三 やりすぎる 悪評

四 さいごの気晴し 歌謡

五 さいごの悩み さいごのはめ さいごの光 死

〔第二巻〕 作品

序文

第一章 バーンズの文学的材源 スコットランドにおける歌謡曲

一 古い民謡

二 古い歌謡曲

三 民衆の小詩——ベルトレの卑しいジャック一世 ギールバートフィールドのハミルトン
四 要約 アラン・ラムゼー ロバート・ファグソン

第二章 バーンズのうちの人間的生活

一 直かに観察することと活気

二 バーンズのユーモア

三 バーンズの天分の成功

四 生涯の高貴なる側面 フランス革命の反響 自由と平等の詩人バーンズ 貧しいひとびとの詩

五 人生観

第三章 愛の詩人バーンズ

一 愛の詩²

二 愛の喜劇

三 要約

第四章 バーンズにおける自然についての情緒

一 バーンズが自然の中にみたもの

二 動物にたいする思いやり

三 バーンズの中にみられる自然観が、いかに現代詩における自然観と異なるか

第五章 結論

参考書目一覧

バーンズ書誌 スコットランド書誌 一般的書誌

八つ折版のゆうに千頁をこすこの大著は、どのような内容のものかについて、目次からある程度推測できる。が、これはイポリート・アドルフ・テーヌ（一八二八―九三、フランスの著名な評論家・歴史家）の『英文学史』の中にみられるバーンズ論にたいする反証が、アンジュリエの研究のテーマなのである。



テューニスの肖像

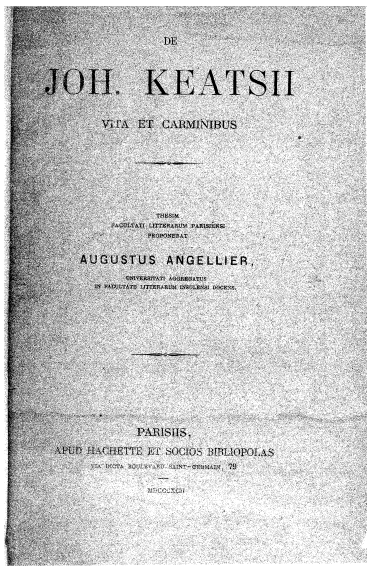
テューニスの『英文学史』は、フランスの英文学者であればだれもが手にとって読む「枕頭書」であった。何かについて研究するときの、手引書であった。テューニスはバーンズを、フランス革命に肩をもつ人間、教会や社会を罵倒する男として見ていた。本能や自然に発生するよろこびを愛し、恋愛こそ人生の最大の目的と考える男とみていた。そしてバーンズを評して、現代人の苦しいとげを痛感し、野人として生きることが望みであった、といった。

テューニによると、各作家の特性を形づくるものは、人種・環境・時代の三つの要素なのである。だからこの三大要素さえしっかり把握できれば、各作家を解明できると考えた。たしかにテューニスは、歴史や文学上の事実を体系的に配列し、概括化・体系化する能力に長じていた。が、かれのいう「法則」や「原理」では、かならずしも各作家の説明がつかないのである。

アンジュリエは、テューニスの科学的立場を疑問視した。なぜなら、テューニはときに人生において大きな意味をもつ、「偶然の出来事」や人がうける靈感の存在を無視したからである。バーンズは寒冷なスコットランドのきびしい風土のなかで暮らす、貧しい農夫の子であり、陰うつな社会で暮らしたわりには、明るさと陽気な一面をもつ人間であった。なぜかれは快活な人になりえたのか。テューニの法則では、この問題は解きえないのである。

一芸術家の精神を形づくっている多様な要素のなかには、人種・環境・時代といったものも含まれることは事実としても、もっとさまざまな要素が錯そうし、交錯しているのである。それは何かというと、読書が培ったものや人との会話、人から聞いた話、ぴんとくる靈感、空想、環境にたいする反応なども当然考慮せねばならぬものである。

アンジュリエは、上巻の「伝記」において、バーンズとの関わりがある土地を訪ねはしたが、そこでバーンズを知る証人をたずねたり、村の書庫を漁るようなことはしなかった。けれど文献資料だけは存分に使い、審美的批評によってバーンズという人間の「個性」を捉えようとつとめた。テューニは、人間の感情や思想には、「一つの系統」がある、⁽¹⁸⁾ といつて概括化しようとしたが、アンジュリエはそういった生き方から離れ、あくまで原作の特質そのものに肉迫しようとした。かれはありのままのバーンズその人を読者のまえに生き返らせ、そのペンから生まれた作品の芸術的意義をつかみ出し、審美批評により捉えようとした。



副論文『ジョン・キーツの生涯と詩篇』。
〔筆者蔵〕

アンジュリエは、テーヌ流の概括化、体系化は高圧的であり、危険だと考えた。かれは当時参考とすることができるあらゆる文献資料を博搜した。一般的な参考図書にくわえて重視したのは、事実であり、書簡であり、バーンズにまつわる証言である。アンジュリエは、それらを縦横に使い、推論し、微視的に詩人の内面の魂まで迫り、バーンズという人物を再生しようとした。上巻は、いふなれば、アンジュリエという蘇生者が資料にもとづいて再構築した、百姓詩人バーンズの一代記とすれば、下巻は純乎たる審美批評による、かれの詩篇の分析であった。

アンジュリエは、『ロバート・バーンズ研究』の膨大な原稿を主論文として、夏休み明けにソルボンヌに提出したのは一八八六年十月のことであった。そして翌八七年五月ごろより、ラテン語による副論文『ジョン・キーツの生涯と詩篇』（DE JOH. KEATSH VITA ET CARMINIBUS PARISIIS, MDCCCXCII）の執筆にとりかかり、一八八七年十月末までに完成し、一八九三年二月三日それをソルボンヌに提出した。

同書はこんにち珍本の部類に入るかもしれないが、わたしは運よく入手することができた。本は淡いカーキ色をしている。大きさは23.8 cm × 16 cmであり、一〇一頁の小冊子である。

目次によると、二部構成になっている。

第一部……第一章から第五章まで
第二部

第一章	
第二章……初期の詩篇	
第三章……エンディミオン	
第四章……ハイペリオン	
第五章……レイミア	ギリシャの古瓶（ふるいかめ）に寄せる歌
第六章	

この論文の主査——報告評定者は、ソルボンヌの助教授アドリアン・パレである。かれは提出された原稿を好意的によむと、いくつか修正を求めてきた。アンジュリ

エはそれに応じ、夏季休暇ちゅうに問題箇所を手直し、十一月はじめにパリ大学の文学部にふたび提出した。

この副論文の趣意は、キーツがギリシャ詩人のまねをしたことを明らかにしようとしたものである。キーツはギリシャ詩人について離れたりしたが、アンジュリエはキーツの模倣の性質を明示しようとした。

第一部は、五章にわたって「キーツの痛ましい、みじかい生涯」をかたり（アンジュリエ）、第二部は独創に富むキーツの詩篇について論じた。ソルボンヌに提出した、正副両論文の公開口述審査^{ストナリンス}の日がついに訪れた。一八九三年二月三日（金）のことである。論文の審査委員会は、十五名から構成されていた。

審査委員長（判士長）は、外国文学教授アルフレッド・メジエールをはじめとし、英語英文学講座の助教授アレクサンドル・ベルジャム、ドイツ文学関係からはエルネスト・リヒテンベルガーなどのほか、フランス文学、イタリア文学、美術史などの分野からも、それぞれ委員がでて、口述試問に列した。

口述審査は、まず副論文のキーツ研究からはじまった。主査は、ソルボンヌの助教授アドリアン・バレである。副査としては、アンリ・ゲルザー（古典語）、アレクサンドル・ベルジャム（英文学）、エルネスト・リヒテンベルガー（独文学）、アルフレッド・メジエール（外国文学）、ジェバール（伊文学）、セアイユ（美術史）などが審査にくわわった。

審査員らの副論文に関する一般的講評は、けっしてよいものではなかった。イギリスの若いロマン派詩人の生涯と作品をラテン語で取りあつかったのはよいとしても、きわめて近代的な文体をもつキーツの作品の多くを、ローマの哀歌詩人セクストゥス・プロペルティウス（紀元前五〇？～一五）やアルビウス・ティブルス（紀元前五四？～一八？）のことばに翻訳したことは、大胆不敵なことで受けとられた。

主査のバレは、アンジュリエのけなげな努力をみとめたが、正確なラテン語訳や意味の取りちがえがあることを指摘した。ベルジャムは終始アンジュリエにたいして好意をもたず、手きびしい質問をいくつかった。

——キーツの作品のなかで、なぜギリシャの詩だけを研究対象にしたのか。キーツは単にギリシャ詩の模倣者とみられているが、なぜ論文のタイトルとして『ジョン・キーツの生涯と詩篇』といった一般的な表題をつけたのか。キーツの伝記などは、平凡に書かれているが、主題からそれているではないか。キーツはラテン語やギリシャ語を知らぬイギリス詩人ということだが、なぜかれは古典作家の弟子になろうとしたのか。

これらの質問にたいするベルジャムの回答は、こうであった。

——キーツがギリシャ美にうっとりとしたのは、ギリシャ文学ではなくて、ギリシャの美術であった。キーツがギリシャ美にほれたのは、エルギン伯（一七六六―一八四一）が大英博物館に寄贈した古代アテネの大理石彫刻である。キーツの詩の「色彩」は、ティツィアーノ（一四七七?―一五七六、イタリアのヴェネツィア派の画家）やラファエロ（一四八三―一五二〇、イタリアの画家・彫刻家）から借りて来たものであるから、キーツはアテネ派の彫刻よりヴェネツィア派の絵画の系譜につらなる人間である。

そしてベルジャムがさいごにいったことは、こうである。

——英文学の中から、古代ギリシャに取りつかれた詩人をえらび、かれについてラテン語で論文をかくことは趣味人のやることである。公述者のこのような考えは、不幸にして歴史的誤謬に立脚している、と非難した。

このように手きびしい意見が出る一方で、古典語の助教授ゲルザーは、アンジュリエのラテン語の力を高く評価した。

ついで主論文の審査がはじまった。

まず受験者の口から、バーンズ研究の目的と方法について熱っぽく、いささか尊大に、挑戦するような調子で語られた。つぎにイムリイ学部長が、四十年のながい教員生活で、二キロ五グラムもある重たい論文を手にしたことはない、といって笑った。

ベルジャムはいった。

——このようなテーマの研究に、千頁は長すぎる。⁽¹⁹⁾バーンズにたいする讃仰の文字が極端である。文芸批評というよりも、心理小説と呼ぶにふさわしい。波乱万丈の生涯を送ったバーンズの舞台を克明に描写するのであれば、かれが用いた方言の研究もやるべきであった。方言の研究をおこなうと、かれの詩が生まれた環境も理解されよう。この論文には、何も新しいことが書かれていない。……

その他の委員からは、アンジュリエの文体や新語の使用とか映像の多用などに関してさまざまな非難が出された。いったいに審査委員たちの意見は、この論文にたいして好意的ではなかった。

ひとりアルフレッド・メジエールだけは、ひかえめな口調で好意的な意見をのべ、この大部な研究を完成させるまでに要した辛苦をたたえた。アンジュリエのバーンズとキーツ研究も、どれも審査官を満足させるものではなかった。が、ともかく十五年のながい苦勞がむくわれ、かれは文学博士の学位をさすけられた。判定成績は、「^{トレンゾラフル}優」であった。

舌戦の結果、アンジュリエは学位をうることができたけれど、このときの審査の雰囲気は、かれに苦味とあと味の悪さだけを残した。とくにベ

ルジャムの辛らつな批評は、胸に堪えたようで、終生うらみにおもった。「ベルジャムだけは、感じが悪かった」と、エミール・ルグイ（一八六一〜一九三七、フランス英文学、当時リヨン大学助教授）に報告している（一八九三年二月二十五日付書簡）。

*

一八八七年ドゥーエーの大学は、リールに移転することになり、アンジュリエもノール県の県都に移った。リール（パリの北北東二一九キロ、商工業都市）は、フランドル地方の中心である。この町はボドウィン四世によって十二世中葉に創られ、のちオーストリア人、スペイン人によって占領された。十七世紀にルイ十四世に征服され、築城家のボーバン（一六三三〜一七〇七）が要塞を築いた。一七一三年、リールはユトレヒト条約によってフランスに帰属した。

リールは十六世紀以来、フランドルの羊毛工業の中心となり発展してゆくのだが、他にリンネルや綿布、油、砂糖、化学製品などを主要商品とした。リールの町は、ドゥール川の肥沃な土地に位置し、運河が町を取りかこんでいた。二十世紀初頭の人口は、約二十万五千であった。

リールにやって来た当初、アンジュリエはソルフェリノ街の端に下宿したが、荷や書物が多いために、のちヴォバン大通り八十二番地に引っ越した。いまこの家は現存しない。

一八八一年二月、助教授としてドゥーエーの大学に赴任したとき、アンジュリエはパリ時代にラテン区のかした、気さくな女友達とうかれさわいだ生活に別れを告げていた。すでに年齢は、三十三になっていた。

そのころかれは、結婚をまじめに考えていた。相手はブローニュにいる幼なじみである。美しい女性だった。ひかえ目な、おとなしい女だった。母も妹も叔母も、結婚に賛成だった。ところがアンジュリエは、しゅん巡する。親友のオビヨンも、君は夫にはなれない、君は家庭にはむかない、という。かれはそれまで気ままに、自由を束縛されることなく生きてきた。結婚すれば家庭にしばられるし、家人のためにパンのかせぎ手とならねばならぬ。

相手の娘も、アンジュリエがみせるむっとりとした顔、結婚についての迷いを示すような言いのがれのことを聞くと、不安になった。縁がなかったものか、この結婚話はやがてさたやみになった。

相手の女性は、かれから離れて行ったけど、アンジュリエの記憶のなかには、この女性のことがいつまでも思い出として残った。

かれは愛の神の恩恵に浴さなかったが、思いがけない事件に遭遇する。こういうと、人は何かとおもうが、ある女性を知るのである。その女性、アンジュリエの後半生とじつに深いかわりをもつのである。

『オーギュスト・アンジュリエの人となり 上巻』（一九三九年）を執筆したフロリ・ドゥラトルによると、アンジュリエは、縁談がおこる前に、すでにその女性のことを知っており、恋い慕っていた。かれが幼なじみとの結婚に踏みきれなかったのも、そのあたりに理由があったものか。ともあれ、ドゥラトルが記すところによると、その女性は、つぎのような生いたちの人であった。

——彼女は田舎の有産者のうまれである。いちど不幸な結婚をした。二番目の男の子がうまれたのち、実家にもどり、母とともに暮らしていた。年齢は二十五歳。そのひとの小肖像画が残っている。

その風貌や容姿は、こうである。

——目は碧い。顔色はやや褐色である。はっきりとした、まなざし。気高い眉は、大き目のひたいの上のっている。貴族の女性のように、鼻筋が通っている。唇はうすい。あごは、ちょっと前に突き出ている。風姿には、誇りがみられたが、どこか悲しげであった。凛とした態度に、知性が感じられた。

アンジュリエは、この女性をいつ、どこで知ったのであろうか。ふたりのなれ染めの正確な時期は定かでないが、ドゥラトルによると、一八八二年七月一日付の手帳に、はじめてこの悲しげな知られざる女性の影絵が出てくる、というから、ドゥラトルに来て、二年目の夏にはじめてこの美貌の女性に会ったということか。

アンジュリエは、その日の午前二時まで、彼女に読んでもらいたい書物のリストをつくっていた。朝、市役所における講義をおえて外に出たのは、十時半であった。帰宅する前に、市場に出かけた。が、彼女の姿はまだなかった。しばらくすると、果物や野菜などを売っている小さな露店のそばにいる彼女のすがたを見つけた。

露天市では、百姓たちがマロニエの木陰で、いすにすわり、その前に野菜や果物をならべている。市場の中央にはテントが張られ、そこで競り



ドゥーエーの「植物園」のマロニエの大木。
〔筆者撮影〕



マスエ街の入口（ドゥーエー）。“T” 夫人の家は、向って右手の角地あたり。〔筆者撮影〕

売りがおこなわれている。あらゆる階層のひとびとが入り出す市場で、ひとときわ目につくのが、彼女の容姿である。アンジュリエは、市場をうろつきながら、彼女を何度となく、遠くからながめた。

古代風のその髪かたち。まじめな、落着いた表情。しかし、どこか憂いに沈んだ様子もうかがえる。ほんの一瞬、ふたりは視線を交わしたが、それだけであった。彼女は手にモクセイソウ（花から香料をとる。色は黄緑色）の花束をもっており、ときどきそれを口に近づけていた。

その日の午後、^{ジャルダン・デ・プラント}植物園に行った。ひょっとして彼女に会えるかもしれないといった期待があったからである。けれど彼女は来なかった。

アンジュリエが出かけた植物園は、かれの下宿から歩いて数分とかからぬ所にある。かれの足跡をたどると、おもしろい事実にもぐりあう。その住居の近くに、必ずといってよいくらい、緑なす公園があることである。かれは物音のしない、静かな公園で読書したり、物思いにふけるのが好きであった。

その日の夕刻、夕食をとったあと、ふたたび外出した。彼女の家の前を通りすぎた。そのときカーテンのうしろから、彼女がのぞいているような気はしたがした。

アンジュリエの手帳の中にたびたび現れる“T”の頭文字をもつ女性、どのような人であったのか、ひさしく謎であったが、わたしは文書館の記録保管人の協力をえて、ほぼ全容を解明することができた。このことについては、あとで再びふれるが、かれがひそかに慕う彼女の家は、ドゥーエーのマスエ街九番地にあった。同街は、大きな戦禍をこうむることなく、当時のままの街並みを残している。その女性の家までは、かれの下宿から歩いて、十分とかならない。

三日ののち、かれはまた植物園に行ってみる。こんどはいた。アカシヤの大木のおかげで、彼女はベンチにすわっていた。そばに母親、メイド、そして二人の子どもがいた。かれは遠くのベンチに腰かけると、彼女を眺めようとした。けっきょくかれは読書をしたり、彼女を眺めたりして二時間ほど園内ですごした。一八八二年七月四日のことである。

翌七月五日、彼女から手紙がきた。読むべき本のリストにたいする返事である。あれこれ読めといったのに、こちらをからかうような便りをよこした。

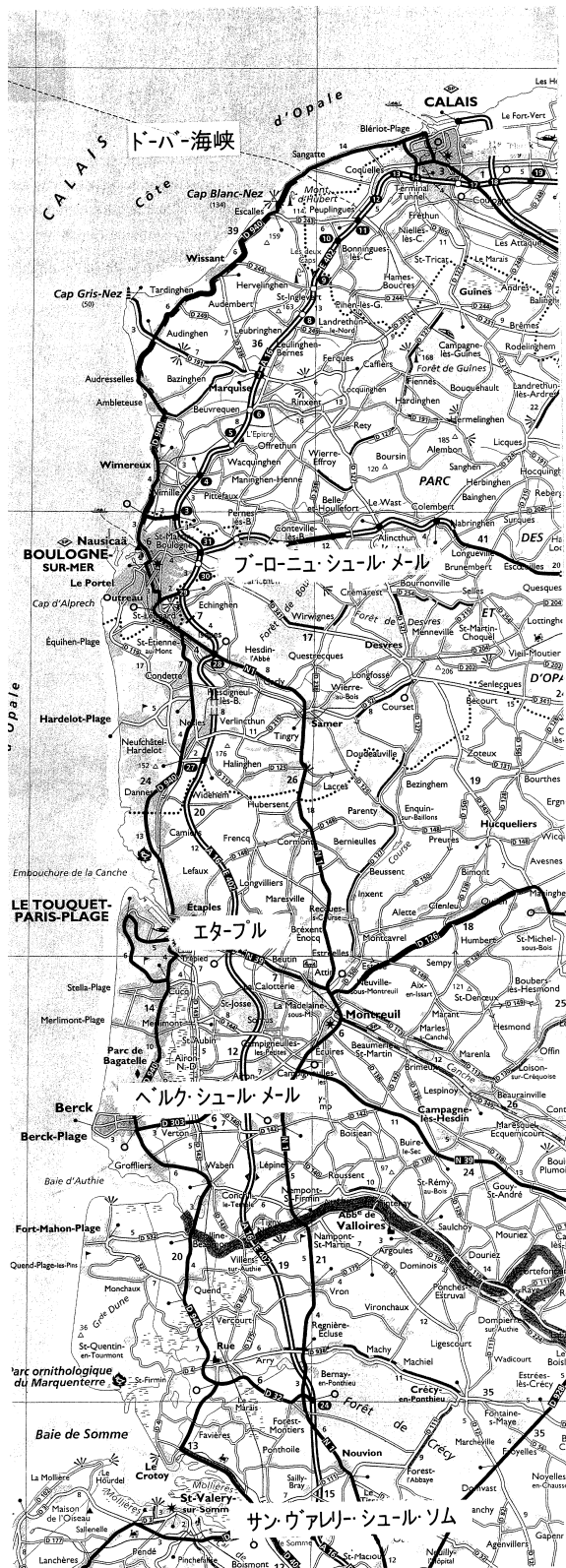
やがて二人は、たびたび会うようになる。朝は市場で会う。市場は、近郊から作物を売りにやって来る大勢の百姓でごったがえしているから、人目にあまりつかない。午後は、植物園で会うが、お互い離れてすわり、ただ目で会釈するだけである。

そのうち長い手紙のやりとりがはじまった。女から来る手紙は、分別のある、まじめなときに冷淡なものである。バカロレアの試験がおわると夏休みがやってきた。二人は別々になってしまう。女はバカンスをベルク＝シュール＝メール（北フランス、アラスの北西に位置する漁村海水浴場）ですごすという。郷のせまい田舎町だと、男と女が会っていても、すぐうわさになる。ことにアンジュリエのような、たくましい一風変わったようすの男だと、何かと人目をひく。その点、田舎のひなびた避暑地だと、男女がひそかに会っても人目につかない。

一八八二年の八月末——アンジュリエは、ドゥーエーからエタープル（パドカレ県にある漁港）に出、そこから海岸づたいをベルクまで歩くことにした。かれは砂丘にそって歩いてゆく。徒歩の旅はつらいものである。おまけに砂地は、アフリカの砂漠のように暑い。海の波は、砂地のそばまで打ちよせている。ときどき断崖が海に面してそそり立っているから、そこを迂回せねばならない。途中で大嵐にあう。砂ほりが舞い、雨が体をたたきつける。

もやの中から病院の小鐘楼がみえた。やれやれベルクに着いたか。これで彼女に会える。……

一八八三年の夏休みは、カルヴァドス（フランス北西部、ノルマンディー地方中部）の海岸で逢引した。二人は浜辺の片すみで会々と、ひそひ



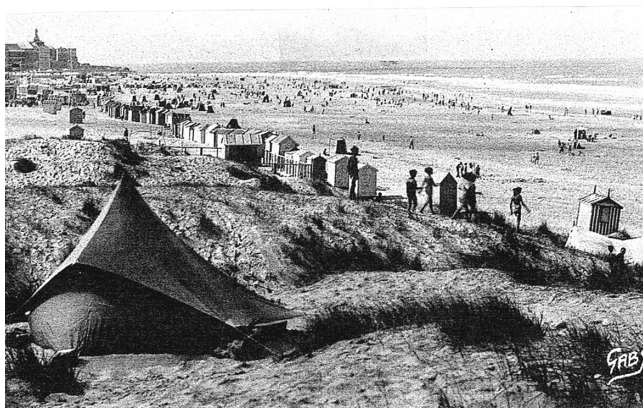
アンジュリエと「T」夫人が夏をすごした所。

そと話をする。日が沈むころ、女は男の家までついてきた。空模様がわるいときは、男が女をその家まで送ってやる。

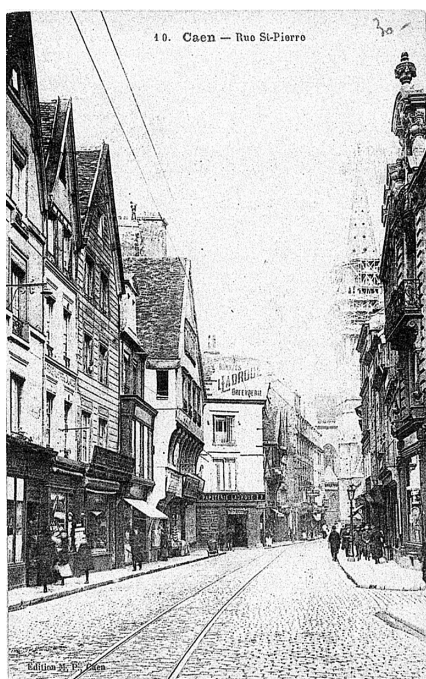
あるときいっしょにカーン（フランス北西部、カルヴァドス県の県都、オルヌ川河口より十四キロ上流）に出かけたことがある。そのとき女は、くさぐさの悩みごとを語る。やがて三週間の休暇は、またたく間にすぎて、別れの日がやってきた。さいごの晩さんを取ることにし、ある古いホテルに入った。月の明るい晩だった。浜辺まで潮が押しよせていた。

カルヴァドスで一夏をいっしょに過ごしてみて、この女が善良な性格の持ち主だということを知った。頭もよいし、誠実であり、正直である。犠牲と献身をいとわぬ女である。わたしは彼女を心から愛する（一八八三年九月十六日の記事）。

アンジュリエが、いっしょに暮らしたい気持になった女性は、このTがはじめてであった。ドゥーエーにもどると、逢引を重ねることがむずかしくなる。二人は晩秋に人目をさけて、別々に汽車にのると、近くのフリヌの森に出かけた。森はとても心地がよい。二人は出会いがしらに、駆け寄ると、何度も抱きあい、キスをする。女はうれしそうであった。子供のようにはいやいだ。読みおえたばかりの『ボヴァリー夫人』の話をさ



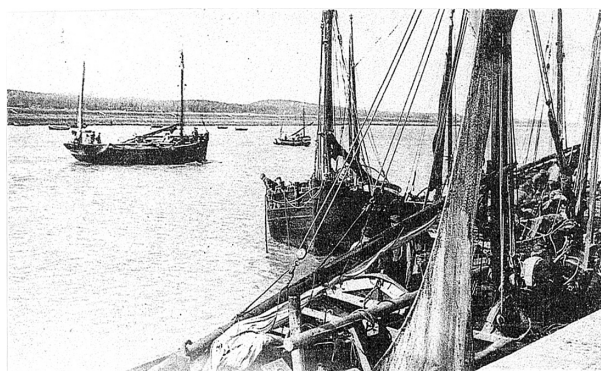
当時のベルク・シュール・メールの海水浴場。左奥にみえる建物は病院。〔筆者蔵〕



カーンの町。〔筆者蔵〕



病院の‘小鐘楼’（ベルク・シュール・メール）。
〔筆者撮影〕



満潮時のエターブルの港。〔筆者蔵〕

かんにする。二人は枯葉のうえをゆっくりと歩きながら、小声で話しあう（一八八三年十月二十九日の記事）。

冬になった。女が男の家に来るといふ。あいにく霧は出ていないし、月まで出ている明るい晩のことだった。アンジュリエは、五時には帰宅していた。よろい戸のうしろにすわり、女がくるのを待っていた。五時半すぎ、大きな黒い人影が戸口のベルを鳴らした。

女が来た。彼女は帽子をかぶり、大きな黒いショールを羽織っている。あたりの様子をうかがいながら、すばやく家の中に入ると、大広間に腰をおろした。が、呼び鈴が鳴るたびに、びくびくする。バカロレアの受験生が名刺を置きにきたのである。あつという間に一時間がすぎゆく。彼女は十時までには帰宅せねばならない。

年はめぐり、一八八四年の夏休みが訪れた。この年の夏の休暇をふたりは、エターブル（ブローニュの南、カンシュ川河口ちかくにある漁村）ですごした。アンジュリエは、漁師の家のしずかな部屋を借りて、朝と夜、バーンス研究に没頭する。午後は散歩の時間にあててあり、女と漁村のちかくにある森

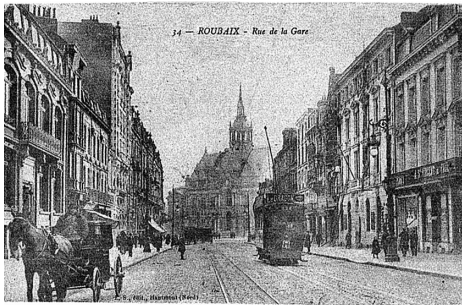
にいく。

かれは手帳に、愛人のことを記す。

——Tはとてもかわいい女性だ。肉体的にちょっと変ったみたいだ。二ヵ月ぶりの再会だ。じぶんの立場、母親とのいざこざなどを話題にする。母親は信心家である。Tはやさしい、すなおな女だ（一八八四年八月一日付）。

ふたりの関係は、ドゥーエーの町の社交界でうわさになっているようだった。彼女は人の視線が気になるし、匿名の手紙がまいこんだりすると、いら立ち、不安になる。

一八八五年の夏は、フランス北西部——ユカタン半島の海水浴場グランヴィルですごす。アンジュリエは、「日没ホテル」に滞在することにし、



ルーベールの町。〔筆者蔵〕

彼女は、そこから二キロほど離れたところにある別荘^{シヤレ}を一軒かりた。彼女は二人の子どもと老いたメイドとともにやって来た。ふたりは別々に暮らしたが、毎日午後になると浜辺で会う。日中は日射しがつよいため、女は頭に大きな麦わら帽子をかぶり、青いうす地のドレスを着ている。夕食後、月夜のなか、ふたりはふたたび逢う。海岸をそぞろ歩き、海を見おろす丘のうえに出る。そして月に照らされた海や間断なく打ちよせる波の音をきく。

女はアンジュリにもたれたまま、何もいわずにいる。ふと横顔を見ると、物思いにふけっているようだ。

数日後、ふたたび会う。しかし、あいにくどしゃ降りの雨である。男は古い、うす暗い教会のなかで、女をまつ。女はやって来たが、ずぶぬれである。いっしょに教会の中を見てまわった。のち、港のほうに行き、水夫たちが出入りする小さな居酒屋に入る。

雨はやむことなく、しとしと降っている。その音は、悲しげである。空は灰色だ。港には船のマストが林立している。ふたりはひそひそと話す。女は生まれたときの様子を男にかたる。

同年九月中ごろ、二人はアヴァンシュ（サン・マロの東にある入り海）に遠出し、さらにサン・マロ（ブルターニュ半島北岸の町）からモン＝サン＝ミシエル（マンシュ県南西部の僧院のある島）にまで足をのびした。

二人の関係は、疎遠になったかとおもったら、やけぼっくりに火がついたようになり、再びもえあがる。

一八八六年二月一日——ルーベールの町（リールの北東八キロに位置）で会い、いっしょに食事をする。女はやつれてみえる。あれこれ、よもやまの話をする。そしていつものように、六時半には帰ってゆく。

アンジュリエと女との逢引は、とぎれることなくつづく。同年四月五日（月）には、別々にサンタマン（シント・アマンズともいう。ブリュッセルの北西二十五キロ、スケルデ川の東岸の町）にむかった。ここは暗くて陰気ないなか町である。工場のおいのする町である。

春とはいえ、森はまだ冬景色のなかにあるようだ。緑はすくないが、芽びている樹がすこしはある。女がやってきた。こちらの顔をみるまで不安気な面もちだった。午後、森の中をあるく。そして歩きながら、よもやまの話をする。その間には刻一刻とすぎてゆく。そしていつものように帰る時刻になる。

先に帰るのは、いつも女のほうである。彼女は七時半の汽車でヴァランシェンヌ（リールの南東四十六キロ、



アンジュリエと“T”夫人とが密会したマールダイクの運河（ダンケルク郊外）。〔筆者撮影〕

スケルデ川中流沿岸の町）へまずむかった。陽はとくに沈んでおり、寒くなってきた。アンジュリエは、九時十一分の汽車にのりリールへむかった。

年が明けた。一八八七年五月十日（火）——おだやかな日和である。アンジュリエは、ヴァランシエンヌへむかい、町の美術館に入り、ルーベンスの絵画などを見、そのあとサンタマンに赴いた。雨のふりそうな空模様になった。が、陽光がさんと輝りだした。空にはちぎれ雲が浮び、野の景色は、青や緑の色をいっそう鮮明にした。

運河のそばで女をまつ。やがて彼女は姿をみせたので、いっしょに森の中に入ってゆく。どの草木もまだ緑色をたたえておらず、中には黄色っぽいものもある。ふたりは話をしながら、森の中をゆっくり歩く。いつの間にか、帰る時刻になっていた。汽車の鐘の音がきこえてくる。彼女は家に帰らねばならない。彼女は客車の席に身をまるめてすわった。

七月十一日（月）——アンジュリエは、この日の午後、アミアン（フランス北西部、ソンム県の県都）にむかった。当地はほこりにまみれ、黒ずんだ街とは異なり、通日も家も清潔である。女といっしょに歩いたときの喜びをいろいろ思いだす。一八八七年の夏休みは、あらかたダンケルクでおくった。九月八日の午後、郊外マールダイクの運河のちかくで女を待つ。彼女はいつものように人目を忍んでやってくる。すこしこわばった表情をしている。局留郵便をよんで、こちらを疑っているようだ。もうあたしのことを愛していないのでは、とさい疑の目でみている。何よりも、もう会ってくれないのでは、と考えている。彼女のふさぎ込んだ様子をみると、苦笑を禁じえない。

翌日も女と会う。ふたりは、マールダイク運河のそばの要塞跡を通り、砂丘に出ると、そこに腰をおろす。『両世界評論』に出ている、“自然主義の終えん”と題する、こっけいな記事をいっしょによんだのしむ。女はすこし心が落着いたようだ。

九月十日（土）——ふたたび親しく語りあう。女はふたたび不安とさい疑にさいなまれていた。夜、海岸で会う。テントの中に入ると、小さな声で語りあう。遠くで潮騒しおさいがきこえる。ふたりは昔ばなしをする。

女の心が動揺するのは、わりもない。じつは、ドゥーエーの大学がリールに移転する話が持ちあがっており、それが一八八七年十月正式にきま

った。もちろん、町の住民はこの移転問題に大反対であり、大いに腹をたてた。が、そうした土地のひとつとの反対を押し切って、リールに移転した。

アンジュリエは、リールで暮らすようになると、逢引も久しく絶えたが、文通だけはつづける。一八八九年八月中旬——英語のアグレガシヨンの審査のしごとを終えたアンジュリエは、パリからサン・ヴァレリー・シュール・ソム（フランス北東部、アブヴィユの北西——ソム川河口の南にある町）に急行した。女と会うのは一年ぶりである。相手が、早朝の約束の時間に来ないので、男は不安になる。小ホテルに入り、コーヒーをたのむと、時間つぶしにブラウニング夫人の詩集をよみだす。なんと時間のたつのがおそいことか……。

女は十時半ごろ、ついにやってきた。白い麦わら帽をかぶり、灰色のドレスを着、その上に大きな黒いマントを羽織っている。女のような昔とすこしも変わっていない。いつものように落ち着いた、やさしい表情をしている。ふたりは手を握ると、人けのない村の教会の中に入った。

女はいった。あんまり、ゆっくりはできない、と。午後四時には、帰路につかねばならない。ふたりはホテルで急いで昼食をとると、村の外を散策した。彼女は男のうでを取ると、心の中でたまっていた感情を吐きだそうとする。ふたりのいさかいの原因について語りだす。風はつよく、小雨がふりだした。

ふたりは、人けのない野原の中をゆっくりと歩いた。小川のそばに、黄色のヤナギやイグサがみられた。

その年の夏休みもおわるころ、ふたりはエターブルの近くでまたおちあう。九月末、砂丘の人目のつかない場所でお互い会う。女は砂丘のうえを歩きながら、バカンスのことをいろいろ語る。風が吹いていて、砂がときどき飛んでくる。くぼみを見つけ、ようやく砂塵（さじん）をさけることができた。

弁当をひろげ、それを食べながら、過去のもめ事について語りあう。やがてふたりは、ベルクのほうにむかって歩きだす。女は男のうでに手を入れていた。夜になると、会話はますますくつろいだものになっていった。女はしばし憂苦を忘れることができた。

一八九〇年の夏は、ふたたびベルク・シュール・メールですごした。女はふり返りぎわに、男の姿をみとめると、すこし離れた所に腰をおろした。男は女のそばに行く。女は物静かに、こんにちわ、という。

ふたりは毎日、浜辺であうと、手をつなぎながら語りあい、ときに砂丘のくぼちの中に身をかくすと、抱きあう。女は恋のゆくえをいろいろ考えると、不安になるようだった。

一八九一年と九二年の夏休みも、アンジュリエと女は、ベルクで落ち合い、密会をかさねた。一八九二年の七月末の夜——男は女が借りている別荘のそばまで行った。その家の前には、広大な砂浜がどこまでも広がっている。海岸には、黒い船がいくつも並んでいる。遠くの方でしずかな光を放っているのは、エタープルの灯台の灯である。ちなみに、ベルクⅡシユールⅡメールは、砂地の数キロにも及ぶ、素晴らしい遠浅海岸である。

*

アンジュリエの手帳は、これからさきも女の名を挙げることはない。ふたりの恋の落ちゆく先を知る手がかりの一助となるのは、詩集『別れた女人に』(A l'amie perdue) である。これは物語風の恋愛詩であり、毎篇十四行から成る詩を書きつらねたものであり、一八九六年にパリのレオン・シェレイ書店から刊行された。総ページは、二二二である。

章節は、九章までである。

- 第一章……開花期
- 第二章……青い波の浜辺で
- 第三章……山のなかで
- 第四章……いさかい
- 第五章……夢想
- 第六章……灰色の波を前にして
- 第七章……犠牲
- 第八章……悲嘆
- 第九章……納得

愛と喜びと苦悩を高らかに歌ったこの恋愛詩は、作者の純粹な感情や感動をのべたものであるが、もちろん虚構と事実とがたくみなえまぜて

ある。

第一章の「開花期」は、つぎのような詩句ではじまる。

一

四月の白い空のもと、マロニエの樹が、落つきのない暗がりの中で、はじめて緑色の芽を吹きだすとき、スマイレのさいごの花束が売れた。春は半開きの暗い期間から抜け出たところであった。

黒っぽいスマイレの花がもつれている素描画を通して、初めて彼女のすがたを見たとき——わたしは一目で、彼女のやさしい、誇り高い目のなかに、ひそかな苦悩と深い絶望が宿っていることを見とった。

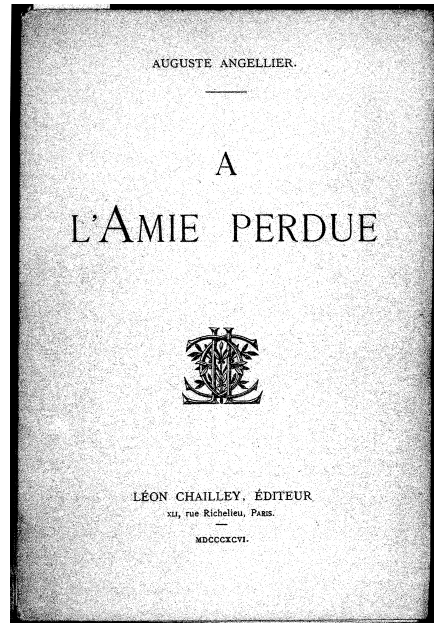
わたしの憐憫は、揺めく夢によって、見知らぬ女性の悲しみに執着した。その女性を愛したとき、夏は開花のときを迎えようとする矢先であった。五月の静かな空と青空とが一つになったとき、若々しいバラの花束がはじめて売りに出され、マロニエの樹は、さいごの密^{みつ}鍾^{かね}花を咲かせた。

二

暗い空のもと、暗い平野の奥の沼地でくらす人は、この狭い町のどこからやって来たのであろうか。青空にふさわしい、この力強い美しさは、ローマ人の堂々とした横顔をも凌駕しているではないか。

彼女はまっすぐなひだの付いたドレスを着、頭にくま^{くま}つづらをつけ、穏やかな女神で飾られた神殿から、しずかな、しっかりとした足どりで、石垣のうえを通してゆく白い行列の中を歩かねばならなかっただろう。

主人公がはじめてその若い女性をみたのは、ドゥーエーの町の植物園であつたであらう。その美しい顔には、一まつ^{ひとまつ}の憂いがあり、かれの心を惹かずにはおかなかった。彼女は家庭運にめぐまれず、いま夫とわかれて実家に帰っていることを知ったとき、主人公のあわれみの気持は、やが



詩集『別れた女人に』の表紙。〔筆者蔵〕

て愛慕の念に変わってゆく。

かれは、この女性を知ったことにより、それまで女性に感じてきた性愛の欲望が清められ、女性をしあわせにしたい、と思うようになる。やがてふたりは海や湖水のほとり、いなか家や森の中で、密会を重ねるようになる。そのうちに男を中傷する流言卑語が女のほうに聞えて来るようになり、彼女は長いこと男から遠ざかる。が、双方の愛情はふたたび燃えあがる。

女の子もたちは、ものごころが着く年ごろになってきた。彼女はわが身だけが歓楽におぼれているわけにはゆかぬ、と思うようになる。子どもの将来を考えたら、男との愛を捨てねばならない。ふたりは人気のない、水夫たちが出入りする

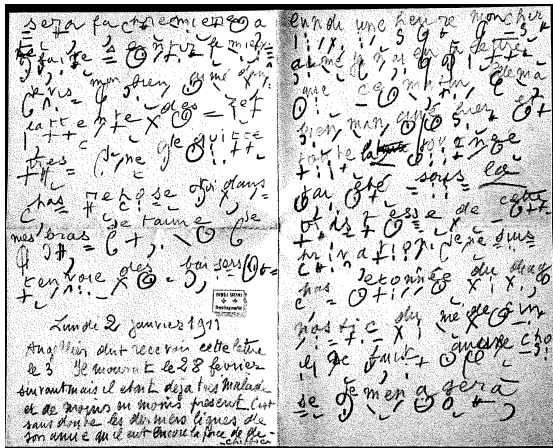
教会の中に入ると、胸が張りさけるような愛別離苦を経験する。

女は、子どものもとに帰ってゆき、しずかな生活にもどる。一方、男のほうは、彼女とすごした至福の想い出を胸に、力づくで生きようとする。『別れた女人に』は、自伝的な恋愛詩である。そこから聞えてくるものは、はげしい愛、熱した感情、嘆声やむせび鳴き、感情の浄化である。

*

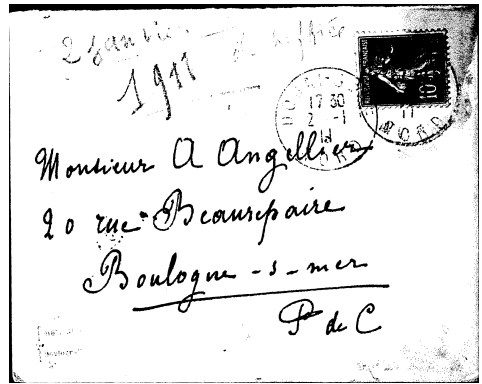
アンジュリエの後半生に深くかかわった謎の女性 “T” とは、だれであったのか。おそらく同人の評伝を書いたフロリ・ドゥラトルは、この女性がいかなる人であったのか、ある程度知っていたものとおもわれる。が、その正体についてはいっさい口をつぐんだままであった。ドゥラトルは、アンジュリエの恋人のことを明るみに出すことなく逝った。

先年、渡欧のおり、わたしはこの女性のことをぜひ知りたい、と思っていたが、その手がかりをうることをほとんどあきらめていた。リールの公立図書館でアンジュリエの著作を実見し、さらにかれに関する諸文献のコピーを取っていたとき、『ブローニョ評論』（二六七号、一九六〇年）に、「一八四八年七月一日オーギュスト・アンジュリエはダンケルクで生まれる。かれは “ブローニョ” のペトラルカ “になる” といった見出しの雑誌記事が目にとまった。



“T” 夫人が書いた暗号による文面。

[Bibliothèque Municipale de Boulogne-sur-Mer 蔵]



“T” 夫人がオーギュストに宛てて出した手紙の封筒。

[Bibliothèque Municipale de Boulogne-sur-Mer 蔵]

そこに「別れた女人“みつかる?”といった文章があり、わたしはひじょうに興味を覚えた。アンジュリエの研究者は、これまで「別れた女人」の正体について関心をもち、その女性をつきとめようとしたが、果たさなかった。ブローニュ・シュール・メールの図書館に、アンジュリエと愛人との往復書簡(暗号文)をおさめた「黒い箱」(手箱^{コフレ})が五つあり、その箱の一つに、台紙にはったアンジュリエの正面写真と横むきの女性の写真が各一枚はいつていた。女性の写真は、かれの愛人のものと考えてさしかえないであろうが、名前もなにも記してなかった。しかし、どの箱だったか、いま記憶がはっきりしないが、「マダム・フォンテーヌ」(M^{me} Fontaine)と書かれた、紙片のようなものが箱のなかにあったようにおもふ。

先の『ブローニュ評論』には、テキサスのヒューストン大学に勤務するアメリカ文学のH・W・イザード教授が、同大学の雑誌『バイユー』(ミシシッピ川の支流の意)に、謎の女性“T”について仮説を発表した、という記事がみられる。

ドゥーエーにおいて、イザード教授は、ひとりの老女をみつけた、という。「その女性はひとりのときも、家政婦といっしょにマスエ街の古い家を出て教会へ行くときも、いつも黒いドレスを着ていた」とある。彼女は背が高く、鼻筋が通っていて、目はとても碧かった、という。しかし、イザード教授の論証は、説得力に欠けるものであった。

わたしは、フォンテーヌという女性の名が心にひっかかっていて、同人についてもっと知りたいと思った。そこでブローニュに滞在中、再度ドゥーエーの文書館を訪れることにした。が、わたしのような東洋人は、文書館において、各種の機器を扱ったり、記録を調査するさいの土台となる古色をおびた分厚い台帳をくって検索することは、まず不可能である。記録保管人の女性は、わたしに検索方法をおしえても、ちがいがあかないと見てとって、わたしに代っていろいろ調べたが、ひじょうに難渋していた。

目のまえに分厚い台帳をおいてページをめくるのだが、なかなか捜すものが現れない。が、だいぶ時間が経ってから、まず第一の手ごたえがあった。ついに手がかりを得たのである。あとはいもづるをたぐると、つぎつぎと事実があらわれた。

ブローニュの図書館でみた「マダム・フォンテーヌ」とは、嫁ぎ先の家の名をとって「フォンテーヌ」としたものである。アンジュリエの手帳にたびたび出てくる「T」なる女性はいまようやく明らかになった。

ドゥーエーの文書館に保管されている「出生登録簿」(一八五七年度)によると、「T」なる女性は、つぎに記す夫婦の娘として生まれた。

父 フランソワ・フォルカン・ドゥニ

(エスケルベックに生まれ、一八〇三・四・一ドゥーエー
のマスエ街十五番地で死去)

母 アデライド・テレーズ・ドゥビュイソン

(一八二二年ドゥーエーに生まれ、一八八八・四・二
プティット・プラス九番地で死去)

娘 テレーズ・マリー・ドゥニ

(一八五七・三・二三、ドゥーエーのマスエ街十五番
地で生まれ、一九四二・五・一六死去)

すなわち、アンジュリエの手帳にたびたび現れる「T」とは、「テレーズ・マリー」(Thérèse Marie)のことである。父はビール醸造業者であったから、ドゥラトルの、「田舎の有産者のうまれ」といった記述と符合する。彼女は父が四十六歳、母は三十五歳のときの子である。父親は、五十二歳で、母は六十六歳で、ドゥーエーで亡くなった。

さて、テレーズ・マリーは、一八七四年七月七日(当時十七歳)ドゥーエーにおいて結婚している。夫婦ならびに家族関係は、つぎに記すとおりである。



“T” 夫人と考えられる写真。

〔Bibliothèque Municipale Boulogne-sur-Mer 蔵〕

夫

フェリックス・フォンテーヌ

(ソーレム在住のビール醸造業者のせがれ、二十六歳)

長男

ポール・フェリックス・フォルカン

(二八七六・一二・二〇、ドゥーエー生まれ)

妻

テレーズ・マリイ・ドゥニ

(ドゥーエー在住のビール醸造業者の娘、十七歳)

次男

マクシム・ウージェーヌ・ジョゼフ

(二八七八・五・二五、ドゥーエー生まれ)

テレーズ・マリイの夫は、“鉄”の商人であり、ソーレム(フランス西部、ル・マンの南西二六三キロ)の人である。夫婦はソーレムでくらし
た。彼女は出産のとき、故郷のドゥーエーの実家にもどった。次男を生んだのち、結婚に破たんを来たようだ。この夫婦の親は、ともにビー
ル醸造所を営んでいるところから考えて、テレーズ・マリイは見合い結婚したのかもしれない。

*

バーンス研究によって学位を得たアンジュリエは、一八九二年北国リールの大学の正教授となり、やがて評議員、文学部長、教授資格試験の委

アグレガス、オン

員長などを歴任し、多忙をきわめた。

一見すると、この人物は変な印象を人にあたえる。その風さいをみると、大学教授らしくない。大学(ゴティエ・ドゥ・シャヨン街——いまのオーギュスト・アンジュリエ街)に出かけるときは、ソフト帽をかぶり、短いマントをはおり、首に赤とか黄色の派出な色のスカーフをまき、手に折カバンをもって行く。体格はがっしりしている。夢でも見ているかのようにゆっくりと歩いてゆく。日焼けした顔、目はすこし切れ長である。あごひげをはやしている。風貌は労働者のようであり、大学教授というよりも、商船の船長のような印象をひとにあたえた。



晩年のオーギュスト。

学舎に着くと、教授室を見むきもしないで十五名ほどの学生が待つ教室に直行する。「やあ、今日は」と気さくに話しかけてから、椅子のうえにステッキ、マント、帽子などを置く。やがてひとりの学生にむかって英文をよみ、訳をつけるようにいう。その間、かれはじっと聞いている。やがておもむろに、「いいぞ^{ブラヴォー}」とか「まずくはない」といったりする。頭ごなしに、「だめ」だとは、けっしていわない。

リール時代のアンジュリエの初期の学生として、その薫陶を受けたJ・ドゥロキニによると、師が目ざしたことは、学生の自由な知性を開花させること、学生に刺激をあたえ、ときに学生を抑制することであったという。アンジュリエは、精神を覚醒させる人、思想の種をまく人であった、

とも語っている。

英文学をまなぶにあたって、言葉の形（語源、音韻、文法学）といったものは、たしかに必要なはあるが、何よりも大切なのは、言葉のもつ心もちである。師は原作にあふれる、もとの感情（気持）や人間の魂を生き返らせようとした。一種の^{サンパティ・アンテ・ユイティープ}“直感的共感”をもって原作に迫ろうとした。

レポートや論文をかくときは、まずはしっかりと構成し、じぶんの見方をきちんと述べよ、という。論文の作成は、幾何の証明の過程となんなら変るところがないからである。文章はだれがよんでもわかる平明なものでなければならぬ、と説く。

アンジュリエが養成しようとしたのは、単なる英語学者ではなく、イギリスの言語も文学も社会もわかる学徒である。その門に学んだ学生は、後年、ルネサンス時代、ロマンティズム前後の“個人作家”を研究対象にえらび、作家の生涯と作品の心理的解剖と芸術的意義の把握に鋭意つとめた。リール派の一連の英文学研究は、二十世紀初頭から約二十年間、フランス英文学の令名を大いに高めた。

たとえば、つぎに記すものは、イギリスの作家や詩人の人と芸術と思想の包括的な研究であり、フランスの英文学者の得意とする分野であった。

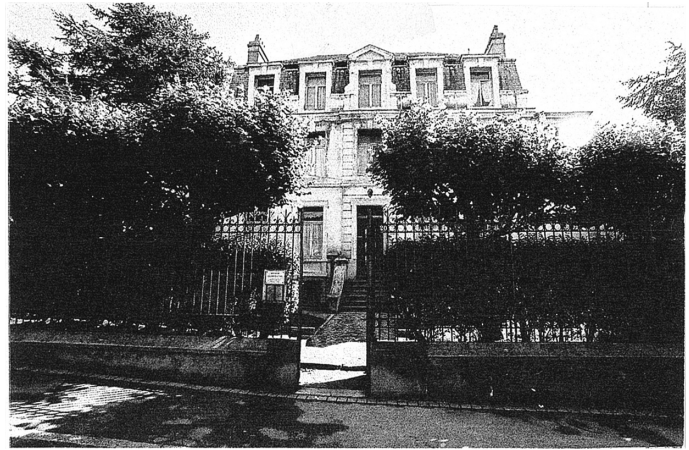
ジュール・ドゥロキニ	(一八六〇?)	『チャールズ・ラム研究』	(一九〇四年)
モリス・カストラン	(一八七二?)	『ベン・ジョンソン研究』	(一九〇六年)
ピエール・ベルジェ	(一八六九~一九三三)	『ウィリアム・ブレイク研究』	(一九〇七年)
ディムネー	(一八六八?)	『ブロンテ姉妹』	(一九一〇年)
アンドレ・コズズエル	(一八七八?)	『シェレー研究』	(一九一〇年)
フロリ・ドラットル	(一八八〇?)	『ロバート・ヘリック研究』	(一九一二年)
ジョゼルフ・デルクール	(一八七三?)	『サー・トマス・モア研究』	(一九一四年)
ドゥニ・ソーラ	(一八九〇?)	『ミルトン研究』	(一九二〇年)
ルネ・ガラン	(?)	『メレディス研究』	(一九二三年)

アンジュリエは、大著『ロバート・バーンズ研究』を著わしたのち、英文学関係の著述をおこなわなかったけれど、『四季の路』(一九〇三)、
『古代の光のうちに』(一九〇五~一九一一、五巻)などの創作詩を盛んにおこなった。

一八九七年三月(四十九歳)——アンジュリエは、リール大学文学部の学部長にえらばれ、一九〇〇年三月までその職にあった。一八九九年、
グラスゴー大学より名誉博士号を贈られた。一九〇五年一月から七月まで、休暇をえた。翌一九〇六年アバディーン大学から名誉博士号を授与さ
れた。⁽²⁰⁾

晩年、かれは健康を害した。体に変調をきたし、弱りはじめたのは一九〇九年(六十一歳)ごろからである。このころから、たえず休暇を申請
するようになり、それが許可されるつど、南フランスで休養をとった。一九一一年一月はじめ、舌がしびれ、もつれるようになり、筆談にたよら
ざるえなくなる。ブローニユのポールペール街二十番地の大きな家で、幼なじみのルイ・オヴィヨン(当時、医師)や妹夫婦の世話になってい
たが、顔色はすぐれず、体もやつていた。

かれは蔵書の処理を遺言し、ブローニユの町とリール大学図書館、リール大学の英文学教室に三分した。死期が近づいていることに気づいて
いたものか、つぎに長衣(スータン)を着た人物の絵を描いたので、教区の司祭をよびにやった。坊さんの姿をみて、アンジュリエの表情は、晴
れやかな笑顔になった。



アンジュリエの終焉の地（ボールパール街 20 番地）。〔筆者撮影〕



ブーローニュ・シュール・メールの「東の墓地」にあるアンジュリエの墓。〔筆者撮影〕

一九一一年二月二十八日——夕方の六時ごろ、かれは逝った。六十二年の生涯であった。葬儀は三月四日（土）に、家の近くのサン・ミシエル教会でしめやかに取りおこなわれ、リールから大勢の大学関係者が参列した。かれの母は、⁽²¹⁾このとき九十歳。足腰が立たぬため、デュモン・デュ・クールセの家で、最愛のむすこの運命をのろい、すすり泣いていた。

アンジュリエの亡骸は、ブーローニュの城壁にちかい、いまの「東の墓地」に葬られた。方尖柱（オベリスク）状の墓碑は、墓地のほぼ中央あたりにあり、横顔が刻まれている。

アンジュリエの遺跡は、多く残っていないが、ブーローニュには、アンジュリエ中学のロビーに胸像が一つ、先端に胸像がのった記念碑が、城壁のガヨール門のちかくに一つある。リールには、大学図書館の裏手——ジャンヌ・ダルク街とジャン・バルト街とが交差する角地の小さい公園に、

死後四十年記念として、一九五一年三月に建てた――、帽子をかぶり、半マントを着た彫像がある。

アンジュリエが暮らしたドゥーエーやリールの下宿、ブローニュのものと住居は、いまやその跡形もない。が、晩年亡くなるまで暮らしたブローニュのポールパール二十番地（いまは二十四番地）の庭つきの邸館は、いまでも残っている。現在そこは、もと一般医のジャン・ダヴィド氏の持物である。聞くところによると、ドイツ占領下の第二次世界大戦中、ドイツ軍の司令官がこの家を接収し、住んでいたという。

アンジュリエと“T”との交信は、かれの死にちかい時期までつづいていたようだ。なるほど、かれは若いとき、たしかにいろいろな女性と恋愛し、あの女性この女性とたえず心を移したけれど、中年を境にドゥーエーの町で“T”を知るにおよんで、邪悪な恋情はすっかり浄化され、純愛にめざめる。清らかな愛が本然の良心といっしょになり、ほんものの“愛”をはぐくむようになる。

“T”は、かれがいちばんいっしょに暮らしたい気持になった唯一の女性だった。が、^み実らぬ恋におわった。かれは本当の愛を定義しているが、それは男女ふたりが「けわしい丘を、ともに助けあって登ってゆく喜び」である、と。信愛を感じる女といっしょに暮らす夢は、けっきょく実現しなかったけれど、かれらはたえず心の交通をたち、共鳴しあう魂は、来世において固くむすばれたことであろう。

陋巷^{ろうこう} 清閑^{せいかん}
アンジュリエに寄せる歌。

汝^なが旅を
とわの
別れと
惜^おしむかな



アンジュリエの邸館のいまの持主―ジャン・ダヴィド医師と筆者。

注

- (1) 『文禄
舊訳 天草本伊曾保物語』(改造社、昭和三年十月)に付いている新村出の「解説」による。
 - (2) 亀田次郎「黒田麴廬の業績及其著目」、六六四頁。
 - (3) 平田守衛編『黒田麴廬の業績と「漂荒記事」第一巻』(京都大学学術出版社、平成二年十二月)、一〇頁。
 - (4) 瀧田貞治「西鶴の書誌学的研究」(文学科研究年報『言語と文学』第五輯所収、台北帝国大学文政学部、昭和十六年七月)、一頁。
 - (5) 内田銀蔵『歴史の理論』(河出書房、昭和十七年十一月)、八三頁。
 - (6) 福原麟太郎『日本の英語』(恒文社、平成九年九月)、六四頁。
 - (7) 御興員三「研究法の確立」(『日本の英学二〇〇年 昭和編』所収、研究社出版株式会社、昭和四十四年四月)、一〇四頁。
 - (8) 生田長江『文学入門』(新潮社、明治四十年十一月)、一四五頁。
 - (9) 上田敏「外国文学の研究」(『上田敏全集 第四巻』所収、改造社、昭和三年十二月)
 - (10) この先生は、都内のあちこちの大学でポールの短篇をおしえたが、旧制の第一高等学校でも「アッシャー家、崩れ倒るるの記」を教材に使い、なかなか味のある教え方をした(工藤幸雄著『ぼくの翻訳人生』中公新書、四七頁)。
 - (11) *Registre des Naissances de Dunquerque, 1848* (Archives municipales de Dunquerque 蔵)。
 - (12) *Dictionnaire Universel d'Histoire et de Géographie*, Librairie de L. Hachette et C^{ie}, Paris, 1855, p.526
 - (13) A^{ie} D'hautefeuille et L^s Bernard: *Histoire de Boulogne-sur-mer*, Chez tous les libraires, Boulogne-sur-mer, 1860, p.3
 - (14) *AVGVSTE ANGELLIER* 1848-1911, Boulogne-sur-mer MCMXIV, p.5
 - (15) *The Greenwich, Eltham, Lee, Blackbath, and Lewisham Directory*, 1869, J. H. Muzzall and Co., Brighton, p.91 以下 "Berry, J. R., B.A., Lond., East House School for gentlemen" 以下の学校の紹介が載っている地図と *Ordnance Survey* 1869 を Darrell Spurgeon 編の *Discover Greenwich and Charlton, 1991* 以下 Greenwich Heritage Center [Building 41, Royal Arsenal Woolwich] 蔵資料。
 - (16) H. Taine: *Histoire de la Littérature Anglaise*, tome quatrième, Librairie Hachette et C^{ie}, Paris, 1911, p.224
 - (17) *Annuaire du Ressort de la Cour d'Appel pour 1884*, Librairie Nouvelle, Douai, 1884 以下 68 頁「同じ屋根の下で暮らしてゐたのは、つぎの四名である」。
- 50 Dubrulle (V^e), propriétaire. (家主)
Angellier, prof. à la Faculté. (アンゼリエリエ)
Delestrez, peintre. (絵描き)

Vérin, jardinier. P.41 (庭師)

- (18) H.Taine: *Histoire de la Littérature Anglaise*, tome 1 Librairie Hachett et C^{ie}, Paris, 1911, p. X 平岡昇訳『英国文学史 第一卷』(創元社、昭和十八年一月) では二〇頁。

- (19) ベルジャムの博士論文は『*Le Public et les Hommes de Lettres en Angleterre au dix-huitième siècle 1660-1714* (Dryden-Addison-Pope), Librairie Hachette et C^{ie}, Paris, 1881 である。

同書は、本文が四一二頁、書誌が八九頁もある。ベルジャムは、なぜアンジュリエにたいして辛辣な批評をくださったのか、よくわからぬが、かれの大著にたいする嫉妬もあったのかもしれない。もしそうだとしたら、じつにけちな根性である。

- (20) *Auguste Angellier*, A. Messein, 1938, p.36

- (21) アンジュリエの母ルイーズ・フランソワ・ラクールが亡くなったのは、一九一四年十二月十二日(息子の死から約三年後)のことである。享年九十二歳。 *Registre Décès de 1913 à 1922* には“La Cour Louise Angellier 12 Dec. 1914” である。

〔補注〕

Paul Navaih 氏に於るに、暗号はしぎのようになっているという。

A B C D E F G H I J K L M N
J ヅ - X L V O S ・ ① | \ /
O P Q R S T U V W X Y Z
: C O † † † : ^ ^ ≡ 〇 □

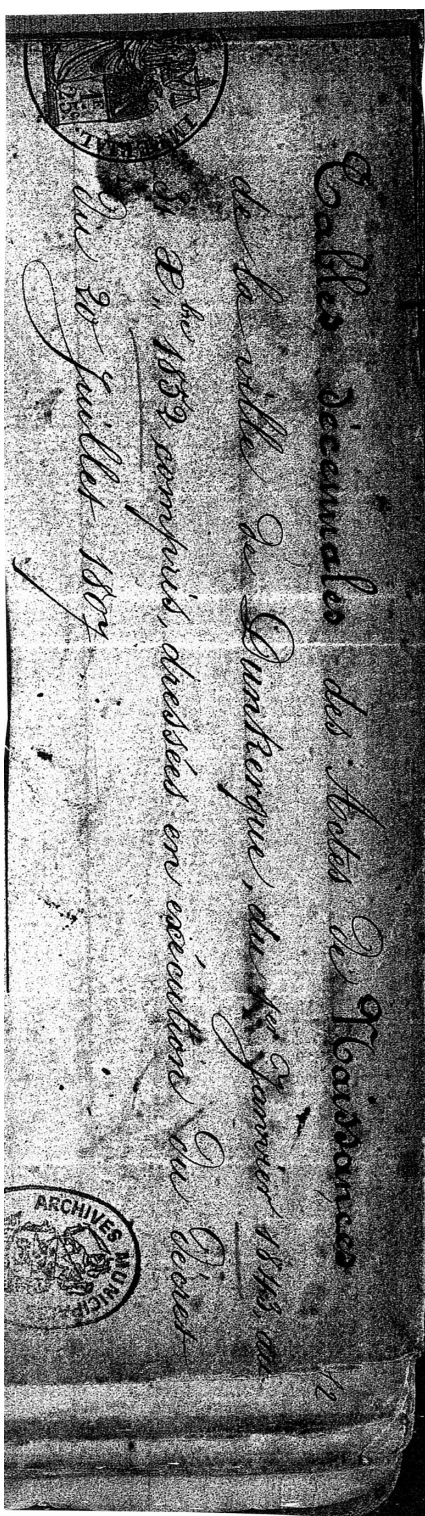
a e i o u
J L ・ : :
p b g q j z
c j o o o o □
l m n v w
l \ / ^ ^
t d r c s x
+ × † † - = ≡
y h

〇 S
s

五 オーギュスト・アンジュリエ関連史料。

Voici des matériaux originaux sur Auguste Angellier et ceux des hommes qui le concernent. I owe the copy of following records to the archivists of Archives Municipales de Dunberque.

〔資料 一〕 オーギュスト・アンジュリエの出生についての記事。



〔資料 二〕 オーギュスト・アンジュリエの出生届。

411 L'an mil huit cent quarante huit, le trois Juillet, onze heures

Auguste Jean du matin, devant nous Jean Charles Mollet, maire de la Ville

Angellier de Dunberque est comparu Jean Désiré Angellier maître

plafonneur âgé de vingt six ans, né en cette ville,

411.
 Claude Jean
 Angellier.

Par mil huit cent quarante huit, le trois d'octobre, nous heures
 du matin devant nous Jean Charles Angellier, maire de la ville
 de Quimper, est comparu Jean Pierre Angellier, marié

CCD



plus jeunes âgés de vingt dix ans, né en cette ville, son
 legue nous a présenté un enfant du sexe masculin âgé de
 avant hier à deux heures du matin, de lui déclarant en son
 domicile en cette ville, que David Dupont, marié de son
 Louis Jeanne Angellier, s'accorde avec sa femme âgée de
 vingt six ans, son épouse née à Quimper, du nom de
 de par de la face, auquel il a déclaré vouloir donner son
 prénom de Auguste Jean, les dits déclaration et
 présentation faites en présence de Jean Antoine Bergman
 Angellier, maître notaire, âgé de cinquante trois ans, marié
 de son nom, à son épouse Joseph Marie, infirmier, de la ville de
 nous, demeurant tous deux en cette ville, sont le père de
 enfant et les le nom de légue avec nous le présent acte,
 après lecture faite.

412.
 Jean Charles

Angellier, maire

Angellier, maire

lequel nous a présenté un enfant de sexe masculin né
avant-hier à deux heures du matin, de lui déclarant en son
domicile en cette ville, rue David d'angers numéro sept et de
Louise Françoise Augustine Lacour, sans profession, âgée de
vingt six ans, Son épouse née à Boulogne-sur-mer, département
du Pas de Calais, et auquel il a déclaré vouloir donner les
prénoms de Auguste Jean ; les dites déclarations et
présentations faites en présence de Jean Antoine Benjamin
Angellier, maître menuisier, âgé de cinquante trois ans aïeul
de l'enfant, et d'antoine Joseph Lano, cafetier âgé de trente et
un ans, demeurant tous deux en cette ville, et ont le père de
l'enfant et les témoins signé avec nous le présent acte,
après lecture faite.

Angellier-Lacour	Mollet	J. Lano
	Angellier	

Le 3 juillet 1848 à 11h du matin, Jean Désiré Angellier, maître plafonneur,
âgé de 26 ans, né en cette ville, est comparu devant nous (= moi) Jean Charles
Mollet, maire de la ville de Dunkerque.

Il nous a présenté un enfant de sexe masculin né avant-hier (= 1^{er} juillet) à
2h du matin, en son domicile (= chez lui) au n^o 27 de la rue David d'Angers à

Dunkerque, né de lui et de son épouse Louise Françoise Lacour, sans profession, âgée de 26 ans et née à Boulogne-sur-mer, département du Pas de Calais.

Il a déclaré vouloir donner à l'enfant les prénoms de Auguste Jean. Cette déclaration (de naissance) et cette présentation (de l'enfant) ont été faites en présence de Jean Antoine Benjamin Angellier, maître menuisier, âgé de 53 ans, aïeul (= grand-père) de l'enfant, et d'Antoine Joseph Lano, cafetier âgé de 31 ans. Ils demeurent tous deux en cette ville.

Après lecture (de l'acte de naissance) le père de l'enfant et les témoins ont signés avec nous (= le maire) le présent acte.

Transcription en français plus actuel:

(Typewritten by Prof. Paul Navailh in Paris.)

〔資料 三〕 オーギュスト・アンジュリエの死亡届。I owe the copy of following records to the archivistes of Archives Municipales de Boulogne-sur-Mer.

N. 275

Angelier
Auguste Jean
t. mil mort
11 premiers juillet.

Honoré approuvé ainsi
par la nature de trois
mots nuls

M. Lamy

St. G. 1

St. G. 1

En un mil neuf cent onze, et le premier jour de mai, nous, le Maire de la ville de Boulogne-sur-Mer, chef-lieu d'arrondissement, département du Pas-de-Calais, ont comparu
Marsel Lacroix, subrogé-procureur de l'autorité judiciaire, actuellement de la région d'homme
âge de cinquante sept ans, demeurant à Lille (Nord) et Louis Duron,
Docteur en médecine, chevalier de la Légion d'Honneur, âgé de soixante ans, demeurant à Boulogne, le premier des deux, le second mari de sa femme, lequel nous certifie que Auguste Jean Angelier, professeur et ancien honoré à la faculté des lettres de Lille, chevalier de la Légion d'Honneur, officier de l'Instruction publique, âgé de cinquante deux ans et demi, né à Dun-sur-Meuse (Nord) le cinq août mil huit cent quarante huit, célibataire, fils de feu Jean Baptiste Angelier et de Louise Farguier Augustine La Cour, sa mère, veuve, âgée de quatre vingt huit ans et sept mois, demeurant à Boulogne, et Decise Pierre vingt-huit juillet dernier à six heures dix minutes, du jour et du lieu susdits, rue de la République 10, ce dont nous nous sommes assuré. Après lecture, les comparants ont signé.

M. Lamy

St. G. 1

St. G. 1

[資料 四] アンジュリエ本人と両親の死亡証書の抜粋。 I owe the copy of following records to the archivists of *Archives Municipales de Boulogne-sur-Mer*.

REPUBLIQUE FRANCAISE	
Ville de	
BOULOGNE-SUR-MER	
<u>EXTRAIT D'ACTE DE DÉCÈS</u>	
Date de décès :	28 février 1911
Heure du décès :	18 heures
Nom et Prénoms du défunt :	Auguste Jean ANGELLIER
Lieu de naissance :	Dunkerque (Nord)
Date de naissance :	01 juillet 1848
Age :	62 ans
Profession :	professeur et Doyen Honoraire à la Faculté des Lettres de Lille, Chevalier de la Légion d'Honneur et Officier de l'Instruction Publique
Epoux (se) de :	
Veuf (ve) :	
Domicile :	20, rue Beaurepaire-Boulogne-sur-Mer
<u>PÈRE</u>	<u>MÈRE</u>
Nom :	LA COUR
Prénoms :	Jean Désiré
	Prénoms : Louise Françoise Augustine

Profession :
Age :
Déclarants-Témoins :
Domicile :
Mentions Marginales

Profession : Rentière
Age : 88 ans
Boulogne-sur-Mer
Marcel LAURENCE, entrepreneur de travaux publics, 57 ans,
chevalier de la Légion d'honneur, beau-frère du défunt.
Louis OVION, docteur en médecine, Chevalier de la Légion
d'Honneur, 60 ans.

〔資料 五〕一八五九（？）年度の学力コンクール（中学校時代）の成績。

Concours 1859									
Memoires en français	de l'ar	dictes	orthographe	grammaire	his	calcul	hygiène mod.	observation	
Augelliers Auguste	21	22	3	2	1	1	1	11, 19, 16, 16, 13	75.

〔Archives Municipales de Boulogne-sur-Mer蔵〕。

〔資料 六〕 オーギュスト・アンジュリエの母の死亡記録。

NOM ET PRÉNOMS	DATE DES ACTES
La Cour Louis (vingtquatre)	18 dec' 1914

(Registre décès de 1913 à 1921)

〔Archives Municipales de Boulogne-sur-Mer 蔵〕。

〔資料 七〕 テレーズ・マリー・デュニの出生届。I owe the copy of following records to the archivists of *Archives Municipales de Douai*.

REPUBLIQUE FRANÇAISE

VILLE DE DOUAI

Extrait des Registres aux Actes de Naissance

POUR L'ANNÉE 1857

ACTE N° 146

L'an mil huit cent cinquante-sept, le vingt quatre mars onze heures du matin, pardevant nous Philippe Joseph Pinquet, adjoint au

maire de la ville de Douai, département du Nord, délégué par lui officier de l'état civil, est comparu François Folquin Denys, âgé de quarante-six ans, brasseur, domicilié en cette ville, lequel nous a déclaré que Adelaïde Thérèse Debuissou, son épouse, âgée de trente-cinq ans, est accouchée avant-hier à cinq heures du soir en sa demeure, rue de la Massue, 15, d'un enfant du sexe féminin qu'il nous a présenté et auquel il a donné les prénoms de Thérèse Marie. Le tout en présence de Augustin François Alexandre Miliot, âgé de quarante ans, greffier du tribunal de simple police, et de Louis Parent, âgé de cinquante-cinq ans, marchand, domiciliés en cette ville, ami du comparant lesquels et le dit comparant ont signé avec nous après lecture.

LES MENTIONS MARGINALES :

Décédée le 16 mai 1942.

〔資料 八〕 テレーズ・マリー・フィウニの結婚届。

REPUBLIQUE FRANÇAISE

VILLE DE DOUAI

Extrait des Registres aux Actes de Mariage

POUR L'ANNÉE 1874

ACTE N° 81

L'an mil huit cent soixante-quatorze, le sept juillet à onze heures du matin, pardevant nous Alexandre Fleurquin, adjoint au maire de la ville de Douai, département du Nord, délégué par lui officier de l'état civil, ont comparu en la maison commune Félix Fontaine, âgé de vingt-six ans et six mois, marchand de fer, né à Solesmes (Nord) le dix décembre mil huit cent quarante-sept, y domicilié, majeur, fils de Félix Fontaine, âgé de quarante-neuf ans, brasseur, domicilié à Solesmes (Nord) ici présent et consentant, et de Feue Irma Henriette Béra, son épouse, décédée au dit Solesmes, le seize janvier mil huit cent cinquante-six, d'une part ;

Et demoiselle Thérèse Marie Denys, âgée de dix-sept ans et trois mois, sans profession, née à Douai le vingt-deux mars, mil huit cent cinquante-sept, y domiciliée, mineure, fille de feu François Folquin Denys, brasseur, décédé en cette ville le treize novembre mil huit cent soixante-sept, et de Adelaïde Thérèse Debuissou, sa veuve, âgée de cinquante-deux ans, brassense, domiciliée au dit Douai, ici présent et consentante, d'autre part ;

Lesquels nous ont requis de procéder à la célébration du mariage projeté entre eux et dont les publications ont été faites devant la principale porte de notre maison commune les dimanches vingt et un et vingt-huit juin dernier à midi, et devant celle de la ville de Solesmes (Nord), les mêmes jours sans qu'il soit survenu d'opposition. Après avoir donné lecture de l'acte de naissance du futur, de l'acte de décès de sa mère et du certificat de publication et de non-opposition délivré par l'officier de l'état civil de Solesmes, lesquelles les pièces resteront annexées au présent acte après avoir été paraphées par nous et par les parties ; de l'acte de naissance de la future et de l'acte de décès de son père qui nous ont été représentés et qui demeurent déposés aux archives de l'état civil de cette ville, nous avons interpellé les futurs époux, ainsi que le père du futur et la mère de la future, ici présents, d'avoir à déclarer s'il avait été fait un contrat de mariage ; à quoi il nous a été répondu affirmativement et que le contrat avait été reçu le vingt-deux juin dernier par M^e Cardon, notaire à Douai, et à l'appui de cette déclaration, il nous a été remis un certificat émané du dit notaire, lequel après avoir été paraphé, sera également annexé au présent acte ; après avoir aussi donné lecture des publications faites en cette ville et du chapitre six du code civil au titre du mariage sur les droits et devoirs respectifs des époux, avons demandé aux futurs époux s'ils veulent se prendre pour mari et pour femme : chacun d'eux ayant répondu séparément et affirmativement, déclarons, au nom de la loi, que Félix Fontaine et Thérèse Marie Denys sont unis par le mariage.

De quoi avons dressé acte en présence de Nestor Lemahieu, âgé de quarante-huit ans, marchand de vin, oncle de l'époux, domicilié à Carnières (Nord), Martial Payen, âgé de quarante-sept ans, rentier, ami des époux, domicilié à Solesmes (Nord), Eugène Denys, âgé de vingt-trois ans, sans profession, frère de l'épouse et de Eugène Fabre, âgé de trente ans, avoué, ami des époux, domiciliés à Douai, lesquels les époux, le père de l'époux et la mère de l'épouse ont signé avec nous après lecture.

LES MENTIONS MARGINALES :

Décédée à Douai, le 16 mars 1942.

〔資料 八〕 テレーズ・マリー・ドゥニの第二子出生について。

REPUBLIQUE FRANÇAISE

VILLE DE DOUAI

Extrait des Registres aux Actes de Naissance

POUR L'ANNÉE 1875

ACTE N° 731

L'an mil huit cent soixante quinze, le vingt décembre, à midi, pardevant nous Augustin Bertin Vasse, Maire de la ville de Douai, département du Nord, officier de l'Etat Civil, a comparu Félix Fontaine, âgé de vingt sept ans, marchand de fer, domicilié à Solesmes (Nord), lequel nous a déclaré que Thérèse Marie Denys, son épouse, âgée de dix huit ans, est accouchée en cette ville, hier à onze heures du matin en la demeure de sa mère, rue de la Massue, 9, d'un enfant du sexe masculin qu'il nous a présenté et auquel il a donné les prénoms de Paul Félix Folquin. Le tout en présence de François Demey, âgé de quarante et un ans, et de Jean Baptiste Quiquempois, âgé de cinquante neuf ans, tous deux marchands, amis du comparant, domiciliés à Douai, lesquels et le dit comparant ont signé avec nous après lecture. Décédé à Solesmes le 14 décembre 1876.

〔資料 九〕 テレーズ・マリー・ドゥニの第二子出生について。

REPUBLIQUE FRANÇAISE

VILLE DE DOUAI

Extrait des Registres aux Actes de Naissance

POUR L'ANNÉE 1878

ACTE N° 301

L'an mil huit cent soixante-dix-huit, le vingt six mai, à midi, pardevant nous Auguste Paul Maugin, adjoint au Maire de la ville de Douai, département du Nord, délégué par lui officier de l'Etat Civil, a comparu Félix Fontaine, âgé de trente et un ans, marchand de fer, domicilié à Solesmes (Nord), lequel nous a déclaré que Thérèse Marie Denys, son épouse, âgée de vingt et un ans, sans profession, domiciliée au même lieu, est accouchée en cette ville, en la demeure de sa mère, rue de la Massue, 9, hier à cinq heures du soir, d'un enfant du sexe masculin qu'il nous a présenté et auquel il a donné les prénoms de Maxime Eugène Joseph. Le tout en présence de Pierre Antoine Eugène Denys, âgé de vingt six ans, brasseur, oncle de l'enfant, et de Louis Dabincourt, âgé de vingt trois ans, employé, ami du comparant, domiciliés à Douai, lesquels et le dit comparant ont signé avec nous après lecture.

〔資料 十〕テレーズ・マリー・ユウニの父の死去について。

REPUBLIQUE FRANÇAISE

VILLE DE DOUAI

Extrait des Registres aux Actes de Décès

POUR L'ANNÉE 1867

ACTE N° 611

L'an mil huit cent soixante-sept, le quatorze novembre à midi, pardevant nous Emile Louis Béharrelle, adjoint au Maire de la ville de Douai, département du Nord, délégué par lui officier de l'Etat Civil, sont comparus Jacques François Demey, âgé de trente trois ans, marchand, et Louis Joseph Parent, âgé de soixante cinq ans, propriétaire, domiciliés en cette ville, lesquels nous ont déclaré que François Folquin Denys, âgé de cinquante-huit ans et sept mois, brasseur, né à Esquelbecq (Nord) le premier avril mil huit cent neuf, domicilié à Douai, époux de Adélaïde

Thérèse Debuissou, âgée de quarante six ans, fils des défunts Benoit Denys, cultivateur, et Jacqueline Duyck son épouse, est décédée hier à trois heures trente minutes du soir en sa demeure rue de la Massue numéro 15 et sur le certificat de M^e Faucheux, docteur en médecine qui a constaté ce décès, nous avons dressé le présent acte que les comparants, neveu et ami du défunt, ont signé avec nous, après lecture.

〔資料 十一〕 テレーズ・マリイ・デュニの母の死去について。

REPUBLIQUE FRANÇAISE

VILLE DE DOUAI

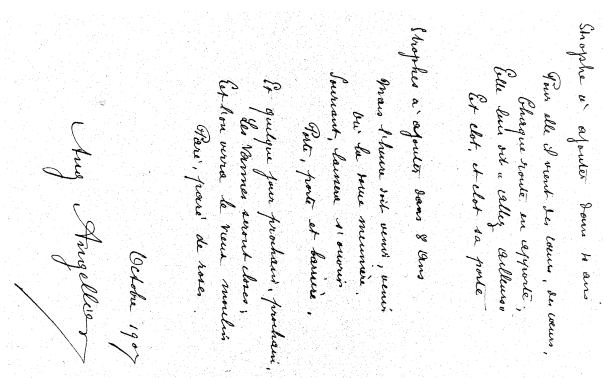
Extrait des Registres aux Actes de Décès

POUR L'ANNÉE 1888

ACTE N° 197

L'an mil huit cent quatre-vingt-huit, le deux avril à midi, pardevant nous Auguste Paul Maugin, adjoint au Maire de la ville de Douai, département du Nord, délégué par lui officier de l'Etat Civil, ont comparu Jules Blondeau, âgé de quarante deux ans, commis, et Florent Reimbaut, âgé de cinquante ans, comptable, domiciliés à Douai, voisins de la défunte, lesquels nous ont déclaré que Adélaïde Thérèse Debuissou, âgée de soixante six ans et cinq mois, brassense, née à Douai le deux octobre mil huit cent vingt et un, y domiciliée, veuve de François Folquin Denys, brasseur, fille des défunts Jean baptiste Debuissou, et Thérèse Catherine Saintenoy, son épouse, est décédée hier à six heures du soir en sa demeure Petite-Place, 9, et sur le certificat de M^e Faucheux, docteur en médecine qui a constaté ce décès, nous avons dressé le présent acte que les comparants ont signé avec nous après lecture.

〔資料 十二〕 オーギュスト・アンジュリエの未発表の詩。



Strophe à ajouter dans 4 ans :

Pour elle il vient des cœurs, des cœurs,

Chaque route en apporte ;

Elle leur dit « allez ailleurs »

Et clôt, et clôt sa porte.

Strophe à ajouter dans 8 ans :

Mais l'heure doit venir, venir

Où la douce meunière,

Souriant, laissera s'ouvrir

Porte, porte et barrière.

Et quelque jour prochain, prochain,

Les vanes seront closes ;

Et l'on verra le vieux moulin

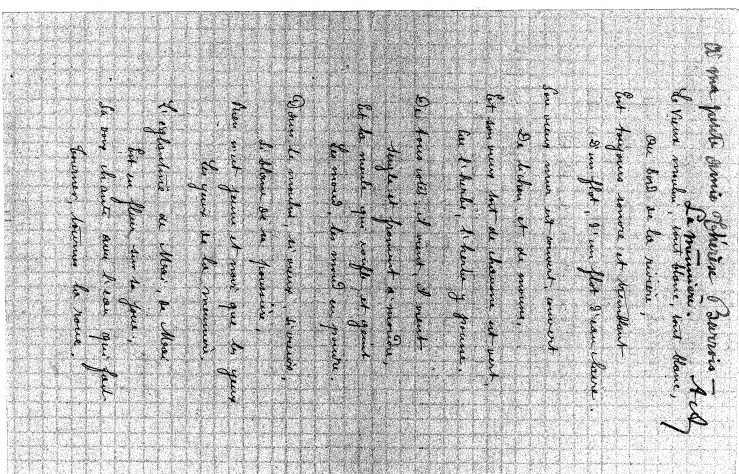
Paré, paré de roses.

Octobre 1907

Aug. Angellier

(Typewritten by Prof. Paul Navailh in
Paris.)

From the original in the author's collection.



A ma petite amie Thérèse Barrois

La Meunière

A.A.

Le vieux moulin, tout blanc, tout blanc,

Au bord de la rivière,

Est toujours sonore et tremblant

D'un flot, d'un flot d'eau claire.

Son vieux mur est couvert, couvert

De lichen et de mousse,

Et on vieux toit de chaume est vert,

Car l'herbe, l'herbe y pousse.

De tous côtés, il vient, il vient

Seigle et froment à moudre,

Et la meule qui ronfle et geint

Les moud, les moud en poudre.

Dans le moulin, si vieux, si vieux,

Si blanc de sa poussière,

Rien n'est jeune et noir que les yeux

Les yeux de la meunière.

L'églantine de Mai, de Mai

Est en fleur sur sa joue,

Sa voix chante avec l'eau qui fait

Tourner, tourner la roue.

〔資料 十三〕 オーギュスト・アングリエの未発表の詩。

Chute silencieuse et douce

Des feuilles jaunes

Qui sur l'herbe sèche et la mousse

Sous les vieux aulnes

Tombent dans l'atmosphère rousse

Des jours d'automne

Tu revenais à ces pensées

Qu'un souffle enlève

D'où tombent les âmes lassées

Des cœurs sans sève

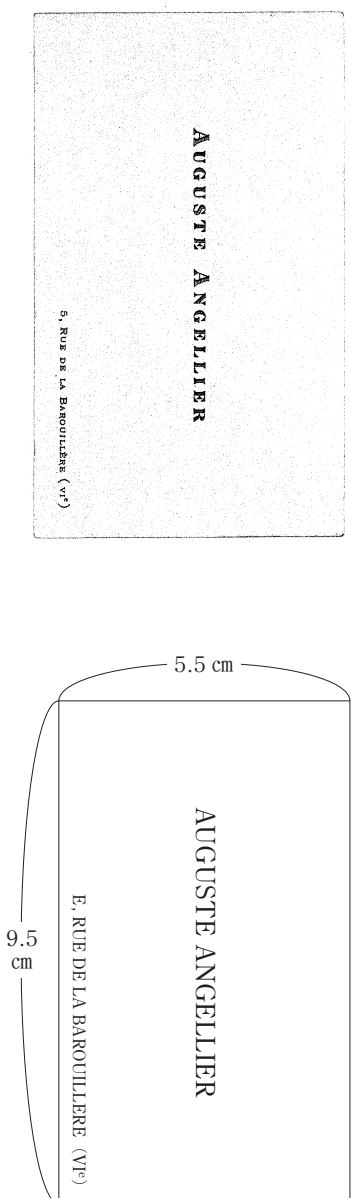
Dans les tristesses amassées

Des jours de rêve

28 7^{bre} 93

From the original in the author's collection.

〔資料 十四〕 オーギュスト・アンジュリエの名刺。



〔資料 十五〕 T 夫人がアンジュリエに送った暗号文の一部。アンジュリエが亡くなる前によんだ愛人からきた最後の通信文の断片。

2 janvier 1911

Lundi 2 janvier 1911

--*Angellier dut recevoir cette letter le 3. Il mourut le 28 fevrier suivant, mais il était déjà très malade et de moins en moins présent. C'est sans doute les dernières lignes de son amie qu'il eut encore la force de déchiffrer.*--

1.

Lundi une heure.... cher / aimé je n'ai eu ta letter / que ce matin. Elle m'a / bien manqué hier et / toute la journée / j'ai été sous la / tristesse de cette / privation. Je ne suis / pas étonnée du diag- / -nostic du médecin. / Il ne fait aucune cho- / -se. Je menagera /

2.

..... / plus aucun visite / sauf celle du mé- / -decin. Sans que tu le / perçoives, tu prends / de la fatigue même / des visites les / plus

familières. / l'entrée, la sortie, les / pas dans l'escalier / sont trop. Il faut / faire de la fragilité /

3.

précieuse..... / rester beaucoup / au lit, lire doucement / et il faudra soutenir / tout cela de l'appui / de mon incessante pen- / -sée d'amour, d'une
pen- / -sée qui imagine des / soins, des caresses / et du secours et qui à force d'être / là, prévoira tout et /

4.

sera le premier à / te faire se sentir le mieux. / je vis, mon bien aimé, dans l'attente des let- / -tres. Je ne te quitte / pas, repose toi dans / (m) es
bras. Je t'aime. Je / t'envoie des baisers. /

(Deciphered and typewritten by Prof. Paul Navailh)

[ハハハハハハハハ]

1. ANGELLIER (AUGUSTE), Poète et critique, professeur et historien de la littérature anglaise, naquit à Dunkerque, le 1^{er} juillet 1848. Son père, qui était maître plafonneur, disparut assez tôt, et ce fut sa mère, une Lacour, de Boulogne-sur-Mer, qui l'éleva dans cette dernière ville à partir de 1853, ainsi qu'une fille un peu plus jeune. Pour gagner sa vie, elle tenait les livres de ses frères, entrepreneurs de constructions. L'aîné des Lacour avait deux enfants, une fille et un fils, presque du même âge qu'Angellier. Lorsque la maladie les eut emportés, avant leur trentième année, Auguste fut traité comme un fils par son oncle, qui lui laissa en 1895 une grande partie de sa fortune et une maison, sise rue Beaurepaire, à Boulogne.

Externe jusqu'au baccalauréat au collège de Boulogne-sur-Mer, il devint pensionnaire, en octobre 1866, au lycée Louis-le-Grand. Après trois années de rhétorique supérieure, il se présenta au concours de l'École normale, mais entre l'écrit (où, on l'a su depuis, il se classait deuxième) et l'oral du concours, un incident mit aux prises le censeur du lycée et les grands élèves ; une sorte de révolte éclata dans l'internat, et Angellier, considéré à tort comme un chef du mouvement, fut, par mesure disciplinaire, expulsé du lycée et rayé, de la liste des candidats à Normale.

Pour sa famille, dont les sacrifices avaient été grands, l'événement prit les proportions d'une catastrophe. Mais E. Le Petit, homme cultivé, qui dirigeait à Boulogne un petit pensionnat pour jeunes Anglais, lui procura une situation en Angleterre dans un établissement analogue au sien. La guerre de 1870 ramena Angellier en France, et il s'engagea pour la durée de la guerre dans le même régiment que son cousin Lacour. Dirigé sur Lyon, puis sur Bordeaux, ou une broncho-pneumonie, contractée durant le rude hiver, mit ses jours en danger ; il rentra à Paris pendant la Commune, en uniforme, et n'échappa qu'à grand'peine aux insurgés.

Il avait pris en Grande-Bretagne le goût des choses anglaises, et comme, après 1870, on réorganisait l'enseignement des langues vivantes, Angellier s'orienta décidément de ce côté. Rentré en grâce auprès de l'Université par l'intermédiaire de son ancien proviseur, J. Girard, et surtout d'E. Charles, son professeur de philosophie, il est nommé en 1871 répétiteur au lycée Descartes. Six mois après, il est licencié ès lettres et, en 1873, se classe premier au concours du certificat d'aptitude à l'enseignement de l'anglais dans les lycées et collèges.

Délégué dans les fonctions de professeur à Condorcet, où il ne fait que passer, puis à Charlemagne, il accomplit dans ces deux lycées le stage de trois ans exigé alors par les règlements pour l'inscription au concours d'agrégation, qu'il passe en 1876. Nommé professeur titulaire à Charlemagne, il reste à Paris jusqu'en 1878.

Il habitait alors rue Bréa, n. 6, et prenait ses repas dans une pension de la même rue où fréquentaient des peintres, des sculpteurs, des architectes, dont les plus marquants étaient Falguière, Coutant, Idrac, Marqueste... Ses goûts et ses allures étaient d'un artiste, et la régularité de l'enseignement secondaire n'était pas sans lui peser. Sollicité par un compatriote alors en vue dans le journalisme parisien, Edmond Magnier, il donne, sous le pseudonyme de Tristram Shandy, quelques articles à *L'Événement*, collabore aussi au *Télégraphe*, feuille éphémère, et au *Temps*, mais là, comme ailleurs, il ne peut supporter la contrainte.

En 1878, il demande et obtient une mission pour étudier sur place le fonctionnement des universités britanniques. Cette même année, il

prononce et fait imprimer une conférence sur *La Chanson de Roland*, et donne peu après une *Étude sur Henri Regnault* (dédiée à la mémoire de son cousin Auguste Lacour).

En 1881, le poste de maître de conférences à la faculté des lettres de Douai lui est offert, et il l'accepte, estimant que son devoir est de coopérer au réveil et à l'affranchissement des universités provinciales. Dès lors il se donne à la tâche de former des élèves, de stimuler le développement des personnalités, et l'impulsion qu'il communique aux études anglaises et qu'accroît sa présidence du jury d'agrégation (1890-1904) est loin d'avoir épuisé sa force.

Cependant, il travaille à ses thèses de doctorat, et, en 1893, après quinze ans de lectures, de voyages et de méditations, il fait paraître, avec une thèse latine sur John Keats, deux gros volumes sur *Robert Burns*. Le premier, *La vie*, ne se contente pas de dire l'émouvante destinée du poète paysan ; c'est aussi l'évocation de l'Écosse et de la société écossaise à la fin du XVIII^e siècle.

Le deuxième, *Les œuvres*, étudie les origines littéraires de Burns, ce qui caractérise ses chansons amoureuses, son humour, son sentiment de la nature, et dans la préface oppose nettement la critique esthétique à la critique prétendument scientifique. Angellier rejette les constructions abstraites, à priori, de Taine, dont le système « a faussé et étreci l'image de la littérature anglaise ». « Il est temps, déclare-t-il, de rendre aux choses leur complexité immense, leur confusion inextricable et leurs apparentes contradictions. » Par ce manifeste, non moins que par l'exemple fourni, la thèse d'Angellier marque une date.

A peine docteur ès lettres, il est nommé professeur de littérature anglaise à l'université de Lille, où, de 1897 à 1900, il remplit les fonctions de doyen. En 1902, il est détaché comme maître de conférences à l'École normale supérieure, mais revient en 1904 à son université du Nord qu'il ne devait plus quitter. Dès 1893, il était allé se remettre d'une assez grave maladie au bord de la Méditerranée, dans le village du Lavandou (Var) que

lui avaient indiqué le peintre Cazin et Jean Aicard. Bien des hivers, par la suite, devaient le ramener dans ce coin des Maures, soit au Lavandou, soit à Bornes-les-Mimosas. C'est au retour de Bornes, en mars, 1910, qu'il fut pris brusquement des accidents cardiaques auxquels il succomba le 28 février 1911.

Nous n'avons parlé jusqu'ici que du professeur et du critique. Il nous reste à parler du poète. Celui-ci se manifesta dès l'adolescence par l'amour de la nature et de la solitude et par des vers couronnés aux jeux Floraux, publiés dans des périodiques bouloonnais ; mais il faut attendre 1872 pour trouver mieux que des promesses. En 1881, le poème en l'honneur de Frédéric Sauvage, lu au théâtre de Boulogne, marque la fin des vers de jeunesse et de circonstance.

En 1896, paraît *A l'amie perdue*, histoire d'amour racontée en cent soixante-dix-huit sonnets, depuis la rencontre et la passion enfin partagée jusqu'au jour du sacrifice où le devoir sépare l'amant de celle qui veut être avant tout une mère. Le drame auquel nous devons ce recueil fut réellement vécu à partir de 1883 environ, mais les sonnets, que seuls des amis intimes connaissaient, ne furent imprimés, sur leurs instances, que dix ans plus tard.

L'amie perdue a bien existé ; c'était, selon le Dr Ovion, « une très noble figure de femme », et rien n'a altéré le culte qu'Angelier lui a rendu jusqu'aux derniers jours de sa vie. Elle domine une grande partie de son œuvre poétique et a inspiré notamment plusieurs morceaux du *Chemin des saisons* (1903). Mais ce recueil contient aussi des pièces de pure virtuosité.

Sous l'influence de la Méditerranée, le poète revint à la Grèce, à Rome, à Ronsard, à Racine, à La Fontaine, et, de 1905 à 1911, parut la série des volumes groupés sous ce titre général : *Dans la lumière antique*. Deux livres de dialogues : les *Dialogues d'amour* (1905) et les *Dialogues civiques* (1906) furent suivis de deux livres d'*Épisodes* (1908-1909). Le second de ceux-ci renferme l'admirable suite d'épigrammes, *Lucius matris*,

inspirée au poète par un deuil de l'année perdue. En 1911 parurent *Les Scènes*, comprenant *Le banquet chez Clinias*, *Le secret de l'opale*, et *L'amant de Laïs*, et, en 1912, un recueil posthume, où des pièces inachevées du cycle antique (*L'aventure de Silène et de Pan*, *Niobé*) voisinent avec des poèmes modernes : *L'allée aux iris*, *Le vieux mendiant*. L'œuvre poétique d'Angellier allait s'élargir encore et son élection à l'Académie française étendre sa renommée, quand la maladie l'arrêta.

Cette renommée, comme il arrive souvent, a grandi depuis sa mort. En 1913, la piété du Dr Ovion réunissait des *Vers de jeunesse* et, en 1914, Boulogne-sur-Mer inaugurait un buste du au ciseau de Marqueste. Cependant, la guerre et l'invasion justifiaient les craintes du poète et donnaient une allure prophétique au *Dialogue du vieillard et du guerrier*, écrit dix ans plus tôt. En 1928, Lille érigeait à son tour un monument du sculpteur Dépléchin. En 1925 étaient nés, grâce au professeur Delattre, les *Cahiers Angellier*, destinés à recueillir, avec des lettres et des pages inédites du maître, les souvenirs de ses amis et anciens élèves.

Les manuscrits d'Angellier ont été remis par le Dr Ovion à la bibliothèque municipale de Boulogne-sur-Mer ; la correspondance avec l'« amie perdue » se trouve dans une caisse qui ne doit pas être ouverte avant 1941.

Au physique, Angellier était un homme robuste, au teint cuivré, aux cheveux noirs ; il portait la moustache et la « mouche » qui découvrait sa bouche prompte au rire et plutôt sensuelle. Ce qui attirait d'abord, c'étaient, sous le front large, des yeux étonnamment profonds et expressifs. Sa voix était chaude et prenante. La parole, qui tâtonnait parfois à la recherche du mot juste, de l'image forte, ne reculait jamais devant la franchise, voire la verdeur, de l'expression.

D'un trait inoubliable, ce liseur d'esprits dessinait la silhouette et évoquait le moi profond de tel ou tel. Au moral, ce qui le caractérisait, c'était l'amour de la vie, la compréhension, l'indulgence pour tout ce qui n'était pas mesquinerie, Petite vanité ou ambition vulgaire. Si son besoin de solitude et de recueillement était parfois intense, sa sociabilité n'était pas moindre, et nul n'a compté d'amis plus ardents et plus fidèles. Citons,

entre les plus anciens, avec le Dr Oyon, Émile Legouis, Émile Hovelacque, Jules Derocquigny. De sa poésie, qui est d'un homme au cœur chaud, d'un artiste viril, aimant la nature sous tous ses aspects, et d'un penseur riche en idées, émane une large sagesse humaine faite d'intellectualité supérieure, de courage stoïque et de bonté.

SOURCES ET BIBLIOGRAPHIE. — Souvenirs personnels, souvenirs du Dr Oyon et du professeur E. Legouis. De ce dernier, une substantielle préface introduit des *Pages choisies* d'Angellier publiées en 1909 en Angleterre (Higher French Classics, Oxford, Clarendon press). — A l'exception de l'*Étude sur la Chanson de Roland* (éd. L. Boulanger) et de l'*Étude sur Henri Regnault* (id.) les œuvres complètes d'Angellier ont été publiées par la librairie Hachette. — P. -M. Masson, *L'œuvre d'Auguste Angellier*, art. paru dans la *Rev. de Fribourg*, janv.-févr. 1910, reprod. dans *Œuvres et maîtres* ; les notices parues en 1911 dans la *Rev. internationale de l'enseignement*, *Les langues modernes*, la *Rev. de l'enseignement des langues vivantes* ; *L'enseignement secondaire* ; les art. d'E. Faguet et d'E. Legouis parus dans la *Rev. des Deux Mondes*, de Henri Potez, dans *La Rev. de Paris* ; ceux d'E. Diennet, dans *The Pilot* et *The North American review* ; d'Henri Bremon, dans *Le Correspondant* ; enfin le *Cahier Angellier et bulletin annuel des anglicisants lillois*, 1925 sq. (Paris, Didier, et 9, rue Auguste-Angellier, Lille).

[出典] *Dictionnaire de Biographie Française*, tome deuxième, Aliénor-Antlup, Librairie Letouzey et Ane, Paris, 1936, p.1072~p.1073.

[英文レジュメ]

Auguste Angellier, — the scholar and the poet

by Prof. Dr. Takashi Miyanaga

Dep. of Sociology, Hosei Univ, Tokyo.

This essay is comprised of four chapters: (1) The study of English literature in Japan—past and present (2) Auguste Angellier in Japan (3) The reminiscences of Prof. Kinji Shimada (4) Auguste Angellier, the man and his achievements.

It was in the twenties of the Meiji era (i.e. 1880s) that the study of English literature in Japan started both at a university and popular level. However the English ability of general academics was not high enough to specialize in English literature. The scholars and students weren't likely to go any further than trying to read and understand the original texts. In other words, their English was not good enough to appreciate or study English literature.

The writings of general scholars of English literature in Japan were borrowed straight from the pioneers in England or in the United States. They wrote after the fashion of Western scholars. Generally this is still the marked tendency in Japan. The Japanese aren't rich in originality, and poor language skill has arrested the development of technical study of English literature in the country for generations.

For the French, English literature means a foreign literature. It is the same way for the Japanese. However the French have made distinguished services in the study of English literature in France, making free use of their aesthetic appreciation and psychological approach as well. The key to their success is of great concern for us, so I have taken up Auguste Angellier (1848~1911), the anglicist, as a case study.

Angellier took a doctorate in 1893 by writing "Robert Burns: *La vie et les oeuvres*". However the opinion fiercely differed on his dissertation in the judging committee at Sorbonne. Nevertheless it was due to the tutorage from Prof. Angellier that his disciples produced remarkable works in later years.

Auguste Angellier is not well known in Japan. Some anglicists in the country took interest in Robert Burns as written by him in the Taisho era (i.e. 1920s). One of the most eager scholars of Angellier was a lecturer in English at Taihoku Higher School in Taipei, Formosa. Lecturer Shimada (Professor at Tokyo University after the Second World War) was engaged then in studying the French school of English literature and was

publishing short essays on it now and then. He first published, “*The French school of English literature—The Achievements of Auguste Angellier*” in the annual reports of the literary course (no.3), published by the department of literature and political science at Taihoku Imperial University in 1937. He reissued it with major enlargements in the “*Travaux d’Auguste Angellier*” (Hikaku Bungaku Kenkyu [i.e.] Étude de Littérature Comparées No.15) in 1969, based on “*La personnalité d’Auguste Angellier*” by Floris Delattre and other books.

When Shimada’s study on the French school of English literature was almost completed, all of his manuscripts were destroyed by the American bombers in Taipei. Nevertheless, we must keep his name in mind as an introducer of Auguste’s writings to Japan.

Prof. Kinji Shimada visited France twice in 1978 and in 1980. He visited such cities in Flanders as Dunkirk, Calais, Douai and Boulogne-sur-Mer with his French friends. However he didn’t conduct any survey of Auguste in these cities, except making photocopies at the municipal library in Lille. Later on he published his travel sketches twice in the “*Rising Generation*” published by Kenkyusha Publishing Co., in Tokyo

My essay on “*Auguste Angellier, the man and his achievements*” was written on the basis of “*La personnalité d’Auguste Angellier*” by Floris Delattre and a field investigation conducted by me both in England and in Northern France.

I was able to clarify in detail not only the East House in Greenwich (London), where Auguste taught French in his twenties, but also the woman ‘T’ who often appears in his pocket notebook. With so few historical records, the woman’s identity was cloaked in mystery. As regards this mysterious woman, Floris Delattre says; “*Elle appartenait à la riche bourgeoisie locale—Elle avait fait un mariage malheureux et, après la naissance de son second enfant, était revenue, à vingt-cinq ans, vivre après de sa mère.*”⁽¹⁾

Though she was a woman of noble presence, she seemed to be sunk in grief. “*les yeux bleus dans un visage de brune pâle, le regard net, les*

sourcils élevés sur un front large, un nez droit de patricienne, la lèvre fine, le menton un peu avangant, avec une allure générale de distinction alliée et triste, et d'intelligente fermée"⁽²⁾

(130) 91

Many people were interested in identifying the woman but in vain. A short description titled «“Amie perdu” amie retrouvée» in the article of *«Le 1^{er} Juillet 1848 naissait à Dunkerque Auguste Angellier qui devait devenir le “Petrarque Boulonnais”*» published in the Revue de Boulogne (No. 267, 1960), however, gave me a clue to unravel the mystery.

The “coffrets” (chests) deposited at the municipal library in Boulogne-sur-Mer do not disclose the woman in mystery. The above-mentioned French article in the Revue de Boulogne was written by Guy Bataille, a journalist.

Being spurred by the article appearing in “*Le Bayou*”, the bulletin of Houston University, Texas, U.S.A., the French journalist decided to write on Auguste Angellier. The article in the bulletin was written by Prof. H.W. Izzard, a specialist of American literature, who tried to unveil “*L’Amie perdu*” (Lost Lover) in Douai.

In Douai, Prof. Izzard found «a very old lady, who, when she was alone, or accompanied by her housekeeper, always clothed in black, leaving her old house in the rue Massue to go to the church». The lady was tall, straight, with deep blue eyes. It was ambiguous whether the lady was the one whom Auguste Angellier designated as ‘T’ in his notebook.

At the municipal library in Boulogne-sur-Mer, there are five chests containing many letters exchanged between Auguste and his lover. Most of which were written in cipher due to the scandalmongers. The letters were deposited by M. Marcel Laurence, who was the husband of Angellier’s sister. The chests were not open to the general public by 1980. Nowadays the secret letters have been deciphered by Mme Michele Mouret-Rougier

living in the rue Pompidou, Boulogne-sur-Mer.

At the municipal library in Boulogne-sur-Mer, I happened to find the name of "Mme Fontaine" and her photograph in one of the five chests. This clue helped me also to identify 'T' in Douai. The investigation seemed to be very difficult at first. However, due to the assistance of archivists, I had an unexpected good harvest.

The findings were as follows ; 'T' is Thérèse Marie Denys, who was born on 22 March 1857 in the rue Massue No. 15 and died on 16 May 1942 in Douai. She was a daughter of François Folquin Denys (?~1803), a brewer in Douai. And her mother called herself Adélaïde Thérèse Debuison (1821~1888). Her father was born in Eskerbeck and died on 1 April 1803 in the rue Massue No. 15 in Douai. Her mother was born in Douai, 1821 and died on 1 April 1888 at Petite-Place No.9 in Douai.

According to the Acts of Marriage in 1874, Thérèse Marie Denys married Félix Fontaine, 26, a merchant of iron and a resident in Solemes, at the age of 17. The bridegroom was the son of the brewer named Félix Fontaine in Solemes. Thérèse Marie gave birth to two children. The first child, named Paul Félix Folquin, was born 20 December 1876 in the rue of Massue No.9 in Douai. The second one, named Maxime Eugène Joseph, was born on 25 May 1878 in the same place as above.

The bride and bridegroom were born of rich parents. The identity of 'T', the learned madame of bourgeois in Douai, is most presumably Thérèse Marie Denys (1857~1942) herself.

In the summer of 2005, I spent a month in England and in Northern France, making a field investigation on Auguste Angellier. I first visited Greenwich (London), then Dunkirk, Boulogne-sur-Mer, Lille, Douai, Étaple, Berk-sur-Mer, Étretat, Yport, Fécamp, Rouen, Paris and so on. My

main purpose of visiting some cities in Flanders in France was to find traces of Auguste Angellier as well as to find some new facts concerning him.

Although there still remain some buildings related to Auguste both in England and in France, most of them have been destroyed. In Boulogne-sur-Mer, his palatial mansion, bequeathed by his uncle, remains intact in the rue Beaufort No.24. It is now owned by Dr. Jean David. The house was requisitioned for a German Commander during the occupation years. Mr. and Mrs. David kindly ushered me into the interior of the house.

In conclusion, I'd like to express my profound gratitude to Mme Annick Degout, archivist, Mme Rougier, M. Paul Navailh, a professor at a Lycée in Paris and many others, for providing every convenience for the benefit of my research, as well as to some of the municipal libraries and archives both in England and in France for providing assistance during my research.

(1) Floris Delattre: *La personnalité d'Auguste Angellier*, tome Premier, Paris, Librairie Philosophique J. Vrin, 1939, p.248

(2) *ibid.* p.249